

シ食物消化トハ食品トシテ胃中ニ受容セル各種ノ物品ヲ
 乳糜粥ト名ツクル液狀物ニ化スルノ謂ニシテ乳糜粥ヨリ
 更ニ純良ナル養分乳糜ヲ生シ乳糜ハ循環中ニ輸送セラル
 、ナリ
 食物ヲ乳糜粥ニ化スルハ重ニ化學的ノ作用ニシテ胃ヨリ
 一種ノ液ヲ分泌シ此液ハ食物ヲ溶解シテ乳糜粥ニ化セシ
 ム
 物體ハ各々固有ノ溶解度ヲ異ニスルノ外ニ溶解物ノ溶解
 力ニ暴露スル表面ニ比例シテ溶解ノ遲速ヲ生ス是ヲ以テ
 固形食物ノ一塊ヲ其儘ニ吞下スレハ健康ノ胃中ト雖モ數
 時間ノ後始メテ溶解セラレ同一ノ食塊ヲ數片ニ咬斷シ且
 ツ其際唾液ト混合シテ嚥下スレハ一時間ニシテ髓樣物ニ
 轉化セラルヘシ一例ニ於ル消化ノ官能ハ乳糜粥ノ製造ニ

關シテ正當ニ執行セラレ他例ニ於テ該官能ハ阻碍セラレ
 タルナリ是故ニ食物ハ胃中ニ嚥下スル前ニ能ク咬斷碎粉
 シ以テ胃液ニ蠶透シ易カラシムルヲ極メテ肝要トス詳言
 スレハ完全ナル消化ヲ得ント欲セハ完全ナル咀嚼ヲ必要
 ト爲スナリ此目的ヲ達セシメノカ爲メ吾人ニ附與セラレ
 タル特別ノ器管ハ即チ齒牙ニシテ而シテ其注意ノ委托ヲ
 受クテ之ヲ脩理シ其脫失セル場合ニ於テ之ヲ補充スルハ
 實ニ齒科醫ノ職分ナリトス
 前數章ニ於テ余ハ齒牙ノ保存法及脩理法ヲ説述シタルハ
 今ヨリ齒牙ノ補充法ヲ述ヘント欲ス抑モ咀嚼器管ヲ保護
 スルハ其理生命ヲ保護スルニ均シク咀嚼器管ノ欠乏ヲ補
 充スルハ其理將ニ短縮セントスル生命ヲ延長スルニ均シ
 其外ニ天然齒ヲ保護スルニ注意シ若シ缺乏スルキハ義齒

ヲ以テ補充スルニ注意スルヲ緊要ナルノ理由アリ此理由ハ前者ニ比スレハ其度輕シト雖モ亦決シテ忽諾ニ付ス可カラサル者ナリ

齒牙特ニ前齒ハ天然ナルト人巧ナルトニ拘ラス明瞭ナル發音ヲナスニ必要ニシテ吾人他人ト對話スルニ彼レ吾ノ言語ヲ明瞭ニ聽取シ吾レ彼ノ言語ヲ分明ニ理解スルニハ一ニ彼我共ニ齒牙ノ完全ナルヲ要ス

齒牙ノ缺乏ハ人ノ面貌ノ恰好ヲ失ナハシム幼年ノ人及壯年者ニ於テ齒牙ヲ缺乏スルハ天然ニ悖レル事ニシテ老人ト雖モ齒牙ヲ有スルハ天然ニ非スト爲サス之ヲ要スルニ齒牙ハ人躰ヲ組成スル器關ノ一ニシテ諸機關中一ノ機關若シ常調ヲ失フキハ從フテ其餘殃ヲ他ノ機關ニ及ボシ健康ト幸福トヲ損シ因テ壽命ヲ短縮スルヲ思及セハ齒牙

ノ價值モ亦豈大ナリト謂ハサル可ケン乎

余ハ今義齒ノ各種類製法及應用法等ヲ述フヘシ然レモ余ハ製造法ノ詳細ニ入ルヲ能ハス又縱令ヘ之ヲ述フルモ無益ナリ何トナレハ製造ノ方法ヲ理解セント欲セハ之ヲ目撃シ熟練セント欲セハ躬カラ實行スルニ勝カサレハナリ余ハ又各人特異ノ口腔ニ對應スルヲ要スル特異ノ形狀ニ就テ個々ニ詳述スルヲ能ハス是レ一回ノ講義中ニ述盡クスヘキ限リニ非ラサレハナリ余ハ唯義齒製法ノ通則ヲ短簡ニ述フルヲ得ルノミニシテ其所説ハ義齒ノ完全ナル一具或ハ殆ント完全ナル者又ハ半具ニ限ルヘシ

天然齒ハ齒齦ヲ穿通シテ顎骨中ニ嵌入セル齒根ヲ有セルカ故ニ義齒ニ於テモ亦齒根ニ對照スル部分ヲ附與セサル可カラス然レモ義齒ノ場合ニ於テ齒根ハ之ヲ齒齦上ニ停

止セシメ咀嚼ノ壓力ハ該部分ヲ經由シテ顎骨ニ通達シ顎骨ニ依リテ維持セシメラル、ヲ要ス吾人ハ此部分ヲ床ト名ケン蓋シ義齒ノ冠部ハ實ニ之ニ根據スレハナリ床ハ總テ義齒ノ(多少ニ拘ラス)緊要部ニシテ義齒ノ要用ハ床ノ齒齦ニ適合スル精密度如何ニ關ス床ニシテ若シ善ク適合セサレハ義齒ヲ着用スヘカラス其理由タル咀嚼ノ壓力ハ唯床ノ停止スル齒齦ノ部ニ達スルノミナレハナリ此等ノ面積ニシテ若シ小ナレハ該齒齦部ハ損傷セラレ更ニ小ナレハ齒齦部ハ切傷セラルヘシ之ニ反シ壓力ノ達スル面積愈大ナレハ感覺愈少ナシ床ノ面積若シ邊緣或ハ尖端ノ如クアラソニハ其結果如何ハ識者ヲ待タスシテ明瞭ナリ然レ此單簡ナル理ニ不注意ナルヨリシテ床ノ製法宜シキヲ失ヒ義齒着用後久シカラスシテ齒齦ヲ損傷スルノ例寡少

ナラス是レ職トシテ床ノ面積不充分ナルニ由ラサルハ無シ
 是ヲ以テ義齒ヲ製作スルノ價值アルヤ否ヲ定ムルニハ正當ニ適合スル床ヲ製スヘキヤ乎否ヤ其面積充分ナルヤヲ思考セサル可カラス若シ此等ノ要點ヲ達スルヲ得レハ床ハ齒齦上ニ壓着セラル、時其被覆スル全面ヲ均同ニ壓着シ押壓セラル、ノ際床ト齒齦面ノ間ヨリ唾液及空氣ヲ擠出シ空氣ノ壓力ニ因リ較著ノ壓力ヲ以テ其位置ニ保持セラルヘシ然リ而シテ製法ノ後段巧ニ執行セラルレハ義齒ハ脫失齒ノ後ヲ承ケテ甚々有用ノ代表物トナルヘシ
 義齒ノ床ハ大概黃金或ハ河馬若クハ海馬ノ牙質ヨリ製造ス河馬ハ亞弗利加ニ産シ海馬ハ北極地ニ産スルノ獸ナリ而シテ其法ハ左ノ如シ蜜蠟ヲ預メ熱湯ニ投シテ柔軟ト爲

シ能ク洩回シ馬脊形ノ模型盤(大サ適宜ノ)ニ置キ口内ニ入
 レ全ク齒齦ヲ埋没スルニ至ル迄注意シテ之ヲ齒齦ニ壓着
 ス可シ次テ注意シテ模型盤ヲ取出シ(手際善ク執行セラレ
 タレハ蜜蠟ハ完全ナル齒齦ノ反對模型ヲ顯ス)此蜜蠟ノ印
 象ハ石膏ヲ注加シ石膏ノ凝固スルヲ待チ蜜蠟ヲ柔軟トナ
 シテ之ヨリ除去スルナリ然スレハ石膏ハ形狀大小ニ於テ
 恰モ齒齦ノ模型ヲ成スヘシ但シ蠟印象ノ正確ナルヲ要ス
 ルヲ勿論ナリ

義齒ノ製作ニ着手スルニ當リテハ須ラク模型ノ正否如何
 ヲ確定スルヲ必要トス之ヲ爲スニハ極メテ堅硬ナル封蠟
 ニ類スル一種ノ物品ヲ混合セル者ヲ用ヒ(此物品ハ沸湯ノ
 熱度ニ於テハ柔軟ニシテ粘着性ヲ有スレモ人身ノ熱度ニ
 於テハ堅硬ト成ル)其柔軟ナル時ニ乗シテ齒ノ形狀ヲ有ス

ル石膏ノ模型上ニ鑄入スル一瞬時間ニシテ新齒ノ模型ヲ
 得ヘシ試ニ此模型ヲ口内ニ入レ若シ變更ヲ要スルノ箇處
 アレハ少許ノ熱湯ノ幫助ニ因テ輒チ變更スルヲ得然レモ
 勿論新齒ノ模型ハ石膏模型ノ正否ニ關スルカ故ニ石膏ノ
 模型若シ正當ナレハ新齒ノ模型ハ石膏模型ニモ口腔ニモ
 均シク能ク適合スヘシト雖モ石膏模型ニシテ若シ不正ナ
 レハ新齒ノ模型ハ口腔ニ適合セサルヲ以テ吾人ハ石膏模
 型ノ誤謬ヲ發覺シ其改正ニ着手スルヲ得

乃チ誤作セル模型ヲ放棄シ新齒ノ模型ヲ熱度ニ投シテ微
 シク柔軟カクシ柔軟ノ時ニ乗シテ注意シテ齒齦面ニ壓着シ
 堅硬ト成ルヲ待チテ再ヒ口内ニ入レ若シ適合スルト認メ
 タレハ之ヲ用ヒテ石膏ノ模型ヲ取ルヲ猶第一例ニ於テ蜜
 蠟ノ模型ヲ用ヒタルカ如クスヘシ此等ノ方法ニ因テ吾人

ハ信用スヘキ完全ナル模型ヲ製シ失敗ノ憂慮ナク新齒ノ製造ニ着手スルヲ得黄金ヲ床ニ供セント欲スルハ石膏ノ模型ヨリ亞鉛若クハ黄銅ノ模型ヲ作リ此模型ヨリ鉛ヲ以テ反對ノ模型ヲ作クニ模型ノ間ニ黄金板ヲ入レテ之ヲ槌打シ黄金板カ模型ノ形狀ヲ取リ模型ノ表面ニ能ク適合スルニ至ラシム可シ

牙質ヲ選用シテ床ヲ作クルハ紅色ノ顔料ヲ以テ石膏模型ヲ被覆シ模型上適當ノ位置ニ牙質ノ片ヲ置クヲ通常トス片ハ最初ニ唯一ニ點ニ觸接シ此等ノ點ハ少許ノ顔料粘着スルニ因テ標示セラル刮器ヲ用ヒテ此等標示點ヲ除去シ再ヒ接觸セシメテ復タ紅色點ヲ除去シ牙質片ト顔料トニテ被覆サレタル模型トヲ新ニ觸接セシムル毎ニ前回ト同様ノ位置ヲ保タシムル様大ニ注意ス可シ此作業ハ煩雜

ニシテ頗ル不確定ナル者ナレバ數百回反復施行シ牙質片カ切ラレテ模型ノ表面ニ適合スルマテ施行シ次ヲ餘剩ノ部分ヲ除去シ如是方法ニ從ヒ得タル床ヲシテ義齒ヲ受容セシムルノ準備ヲ爲ス可シ

トリス氏ハ一ノ專賣器械ヲ用ヒテ床ヲ彫刻セリ此器械ハ手工彫刻及顔料ニ優ルヲ萬々ナリ義齒ノ模型ハ模型混合物ニテ製造シ之ヲ器械ニ附着シ次ヲ牙質ニ模寫ス此法ハ大ニ時間ヲ省キ且過誤ノ憂ナシ

床ニシテ既ニ成就スレハ次ヲ吾人ハ床ニ附着スヘキ義齒ヲ選擇スルヲ要ス義齒ニハ三個ノ種類アリ天然齒、礦物齒彫刻齒即チ牙質ヨリ彫刻セル義齒是ナリ彫刻齒ヲ床ニ供用セントスルハ同一ノ牙質片ヨリ彫刻ス可シ天然齒若クハ礦物齒ヲ選用スルハ針ヲ以テ床ニ附着ス

齒科醫ハ義齒ヲ區別シテ前位齒及側片齒トナセリ前位齒ハ前齒、側前齒、犬齒及小白齒ヲ含ミ大白齒ニ對應スル者ハ一連續片ヲ成シ之ヲ側片齒ト名ツク又數ノ多寡ニ拘ラス床ト義齒トヲ併セテ齒科醫ハ之ヲ片^{ピース}ト稱シ上顎ニ用非ル者ヲ上片ト呼ビ下顎ニ用ヒル者ヲ下片ト云フ

義齒ハ各齒ノ中心或ハ殆ント中心ヲ通過スル針ニ因テ床ニ固着セラレ而シテ床ノ性質ニ從ヒ之ヲ黃金ニ綴着シ或ハ牙質ニ因テ釘着ス

一義齒若シ着用中其針ヨリ離ル、キハ針ノ周圍ニ少許ノ蠶綿ヲ纏ヒテ暫時附着セシメ次ヲ義齒ヲ交換ス可シ

斯ク迄片^{ピース}ヲ成就シタル後ハ咬合セ即チ上齒ト下齒トノ閉口ヲ調理スルヲ要ス詳言スレハ閉合ノ際諸齒總テ同時ニ相合スル様上下齒ヲ調整スルヲ要ス口腔一側ノ齒カ他側

ノ齒ニ先ヲチテ相合スレハ咀嚼セントスル毎ニ片^{ピース}ハ移動セラルヘク後位ノ齒カ前位齒ニ先ヲチテ相合スルモ同様ノ結果ヲ生ス可シ試ニ義齒ヲ口中ニ入ル、ニ當リ若シ較著ノ過誤アレハ多ク凸出スル部ハ容易ク觀察シテ除去ス可シト雖モ咬合セ即チ閉合殆ト完全ナルレハ顔料法ニ倚ラサル可カラズ即チ時ノ場合ニ從テテ顔料ヲ以テ上齒若クハ下齒ヲ被覆シ閉口ニ因テ標記セラレタル觸接點ハ刮器或ハ鍍子ヲ用ヒテ除去シ試ニ閉口セシメ各部カ對齒ヨリ均シク着色セラル、ニ至ラシムヘシ

余ハ前ニ説述セル混合物ヲ以テ片^{ピース}ヲ製シ側片及前位齒ハ熱ヲ加ヘテ微シク柔軟トナスカ故ニ閉口スル時過分ニ凸出スル部ハ屈從シテ適宜ノ平面ヲ得ルニ至ル而シテ如是クシテ得タル咬合セテ義齒ニ摸寫ス

義齒ヲ口内ニ保持セシムルニ三種ノ方法アリ

第一 義齒完全ナル一具ナルトハ螺旋形ノ發條ヲ其終端ニテ兩顎ノ片ニ附着シ單ニ下齒ノ完全ナルトハ下齒ニ適合サレタル帽子ニ發條ノ終端ヲ附着セシムルニアリ發條ノ黃金線ヲ圓筒狀ノ剛鐵小片ノ周圍ニ纏絡シテ之ヲ製シ環ヲ以テ之ヲ義齒ニ附着ス(一針ハ此環ヲ經テ床或ハ片ニ達ス)而シテ環小終端ハ一金線ヲ成シ該金線ハ發條ノ内部ニ精密ニ適合ス裝置斯ノ如クナルヲ以テ義齒着用者ハ自ラ容易ク發條ヲ脫離スルヲ得ヘシ發條若シ環ニ適合セスシテ弛緩ナルトハ發條ニ於ケル環ノ位置ニ之ヲ壓着スルニ先ヲチテ其周圍ニ少許ノ蠶綿ヲ纏絡ス可シ而シテ發條若シ不意ニ環ヨリ脫離スルトハ着用者自カラ此法ヲ施行スルヲ得ヘシ

第二 彈力性ノ鈎或ハ黃金帶ヲ殘留セル天然齒ノ周圍ニ一部通過セシメ開口スル時露出セザル襟裝置スルニアリ鈎ハ唯其長徑ノ一部ノミヲ床ニ附着シ殘餘ノ部ヲシテ遊離セシメ發條ハ開ヒテ齒ヲ受容ス若シ何時ニテモ鈎カ確然義齒ヲ抱擁セサルトハ唯遊離セル部ヲ互ノ方向ニ屈曲セシムルヲ要ス然スレハ再ヒ確然之ヲ抱擁スルナルヘシ

第三 空氣ノ壓力ヲ利用スルニアリ即チ齒齦ニ合着スル表面ヲ精密ニ齒齦ノ表面ニ適合セシムルハ唾液及空氣ハ排除セラレ氣壓ハ唯舌ニ暴露スル義齒ノ表面ニ働クヲ以テ齒齦ニ對シテ密ニ義齒ヲ保持スヘシ

氣壓利用ノ義齒ハ之ヲ製造スルニ最モ困難ナレトモ製造宜シキヲ得レハ最モ佳良ナリ何トナレハ此等義齒ハ殘留スル天然齒(兩顎共ニ)ニハ全ク無關係ナレハナリ

老年ニ至レハ齒齦ニ凸隆ヲ附與スル所ノ齒槽突起ハ全ク消失シ口腔ノ上頤ハ全ク平區ト成ルヘシ如是場合ニ於テ氣壓義齒ハ確固ナラス反テ滑脱スルト尙ホ區平ナル金屬ノ二表面ヲ隔離セント欲ス該表面ニ對シテ直角ノ方向ニ力ヲ加フレハ較著ノ力ヲ要スルニ拘ハラス自己ノ重量ニ因テ容易ク滑脱スルカ如シ此等ノ理ニ因テ推考スルルハ氣壓義齒ヲ精密ニ適合セルモノト做シ其有効ナルノ度ハ床面ノ重量ト齒齦ノ凸隆トニ比例スルヲ諸子ノ自ラ理會スル所ナル可シ

氣壓ノ量ハ床面ニ比例シ横ニ滑脱スルノ患ヲ免カルハ齒齦ノ凸隆ニ比例スルヲ勿論ナリ但シ天然齒ノ殘留スル有リテ義齒ヲ固着セシム可キ場合ハ此例ニ非ラス

氣壓義齒ハ大概牙質ヲ以テ製造シ鈎ヲ以テ維持スル義齒

ニハ大抵金床ヲ附ス然レモ時トシテハ牙質ヲ以テ床ヲ造リ殘留スル天然齒ノ周圍若クハ間ニ固着セシム又此等ノ二法ヲ併用シテ保持ス可キ様義齒ヲ製造スルヲアリ

凡ソ義齒ノ製法ニハ許多ノ連合法及變改法アリテ齒科醫ノ良否ハ特別ノ場合ニ臨ンテ此等ノ法ヲ適用スルト否トニ在リ口腔ノ形狀ハ各人之ヲ異ニシ義齒ノ形狀恰モ二人ノ口腔ニ適合スル者無シ如是千差萬別アルハ義齒製造ノ困難ナル所以ニシテ熟練家ノ成功シ不熟家ノ失敗スルハ一ニ之ニ職由セスンハアラス

床ノ成就シタルルハ義齒ヲ附着シ咬合セテ調へ患者ニ義齒ヲ交附シ義齒着用後口内ニ疼痛ヲ感スレハ翌日義齒ヲ返附スヘキ様患者ニ命ス可シ患者若シ義齒ヲ返シタル場合ニ於テハ口内ヲ検査シ義齒床カ他部ヨリモ特ニ或ル一

部ヲ強ク壓着シ爲メニ該部ヲシテ紅色ヲ呈セシメタルヲ
 發見シタルキハ床ノ該部ヲ鑷子ヲ以テ除去スルカ或ハ屈
 曲シテ除去シ且義齒ノ快ク口内ニ適合スル迄反復シテ此
 等ノ整理法ヲ施行シ常ニ患者ノ陳言ヨリモ寧ロ口腔ノ狀
 況ヲ以テ標準トナスヘシ
 諸氏ハ能ク單一ノ考察ヲ以テ假定スルナラン能ク製造セ
 ラレタル義齒ニ在テハ製造後ハ多數ノ整理ヲ要セスシテ
 口内ニ適合スヘキヲ然リ多數ノ場合ニ於テハ整理ヲ要セ
 サレトモ他ノ場合ニ於テハ大ニ整理ヲ要スルヲアリ蓋シ縱
 令ハ床ハ均シク齒齦ノ各部ヲ壓着スルモ各部ハ均シク壓
 力ニ堪ユルヲ能ハス又顎ノ或ル部ハ他部ヨリモ厚ク齦肉
 ニ被覆セラレ齦肉ノ厚キ部分ハ壓力ニ服從シ薄キ部分ヲ
 シテ全面ニ均シク行ナハル、壓力ヲ受クシム斯ク壓着セ

ラル、部分ハ必然疼痛ヲ感スヘシ是レ床ノ整理ヲ要スル
 所以ナリ
 義齒ヲ着用スル人ハ最初必ス大不快ヲ覺ヘ口内ニ或ル物
 ノ充滿スルヲ感シ言語ヲ困難不明ナラシメ咀嚼ヲモ困難
 ナラシムヘシ然レモ此等ノ困難ハ二週間乃至三週間ニシ
 テ悉ク消失シ患者ハ却テ義齒ヲ缺クモ不便ヲ感スルニ
 至ル又義齒着用後早ク嘔氣ニテ惱ム人往々有レモ暫時忍
 耐スレハ常態ニ復スヘシ
 義齒ヲ以テ能ク咀嚼スルニ至ルハ多少ノ時日ト耐忍トヲ
 要シ早晚善ク咀嚼スルニ至ルモ各人ノ巧拙ニ從テ遲速
 アリトス然レモ義齒ノ製法良好ニシテ壓力ニ因テ疼痛ヲ
 生セサル様整理スレハ各人皆能ク咀嚼スルニ至ルモノナ
 リ

然レ稀ニハ顎ノ形狀不正ニシテ床ニ對シテ利用ス可キ
 充分ノ表面ヲ有セサル人ナキニアラズ又他ノ人ニ在テハ
 口内ノ被膜ハ自然ニ或ハ不攝生ノ習慣ニ因リテ甚シキ刺
 衝ヲ感シ義齒ノ存在ニ堪ユル能ハサルヲ有リ然レモ持續
 シテ忍耐シ且ツ若シ義齒ノ製造良好ニシテ能ク整理スレ
 ハ最モ困難ノ場合ニ於ルモ終ニハ良好ノ結果ヲ得ヘシ義
 齒若用者ハ義齒ヲ以テ一ノ器具ト思考シ忍耐ト經驗トニ
 因テ其使用法ヲ學ハサル可カラス譬ヘハ始メテ木匠ノ鉋
 ヲ手ニスルモ之ヲ使用スルヲ能ハサル可シ否ナ預シメ熟
 練セサルハ使用スルノ念慮ヲカラシ義齒ニ於ルモ亦然リ
 實驗ニ因テ使用法ヲ知得スル迄ハ到底義齒ヲ以テ能ク咀
 嚼スル能ハサルヘシ
 義齒ヲ保存スルノ法如何ヲ知ルハ甚タ緊要ナリ何トナレ

ハ適宜ノ注意ヲ缺クハ義齒ハ速ニ腐敗シ一層速ニ有害
 物トナルニ至レハナリ若用者ハ不淨ナル義齒ヨリ發スル
 有害ノ惡臭ヲ知ラサル者ノ如シト雖モ傍人ハ否ラス其惡
 臭甚シクシテ殆ント傍人ヲ惱殺セントス義齒ノ製造ニハ
 多分牙質ヲ使用スルモノニシテ而シテ諸氏ノ知レルカ如
 ク牙質ハ放棄スレハ速ニ唾液ノ作用ヲ受テ漸々ニ分解ス
 是レ惡臭ヲ發スル所以ナリ
 甚タ滑澤ナル牙質ハ能ク唾液ノ溶解力ニ抵抗スルヲハ前
 講義ニ於テ數々陳述セリ義齒若用者ハ大ニ此事ニ注意セ
 サル可カラス毎日少ナクモ二回ハ少許ノ沈澱自聖ヲ以テ
 義齒ノ表面ヲ刷掃シ刷掃ノ後ハ乾キテ柔軟ナル手巾或ハ
 洗滌皮ノ一片ヲ以テ摩擦ス可シ此等ノ方法ヲ施セハ常ニ
 義齒ノ表面ヲ美麗滑澤ナラシムルヲ得

義齒ヲ使用セサル時ハ酒精二分ト水一分トヲ盛レル玻璃
 瓶中ニ貯ヘテ固ク栓塞ヲ施ス可シ酒精ノ防腐性ハ能ク牙
 質ヲ保護スルノ功ヲ奏シ且ツ義齒ヲ美麗ナラシムルカ故
 ニ大ニ義齒ニ注意シテ清淨法ヲ行ヒ不用ノ時ハ酒精中ニ
 沈没スレハ之ヲ放棄シテ注意ヲ加ヘサル者ニ比シ必スヤ
 二倍永久ニ保綴スヘシ

義齒着用者ハ大概義齒ヲ保護スルト周密ナル能ハス動モ
 スレハ疎漏ノ弊ニ座ス床ハ黄金ニシテ齒ハ礦物製ナルモ
 尙毎日善ク清淨スルヲ要シ床ハ黄金ニシテ齒ハ牙質ナレ
 ハ一層清潔法ノ注意ヲ要シ床ノ牙質ニシテ天然齒ナルモ
 ハ若シ清淨法ヲ怠レハ速ニ腐敗スヘシ

或ル義齒着用者ハ一週間ニ唯一二回義齒ヲ口内ヨリ取出
 スノミニシテ其他ハ口内ニテ掃除スルノ惡習慣ヲ有セリ

ト唯口内ニテハ能ク清淨ナラシムル可カラズ且ツ不斷
 口腔ノ表面ヲ被覆スレハ其健康ヲ傷フノ害アリトス夫
 レ齒齦ハ上皮ヲ以テ被覆セラシテ而上皮ノ性質トシテ
 不斷内部ニ形成シ從テ不斷外面ヨリ消耗シ鱗ハ舌及食物
 ノ爲メニ摩去セラル然ルニ今上皮ニシテ若シ常ニ義齒床
 ノ爲メニ被覆セラルレハ内部ノ形成ハ尙ホ持續シテ外面
 ヨリノ脱失ハ抑止セラシテ外上皮鱗ハ分離スレハ逃避スル
 能ハサルヲ以テ床ノ下ニ醗積シ甚タシキ有害ノ物ト成ル
 ヘシ爾後暫時ニシテ粘膜炎ハ癒癒シ上皮ノ發育ハ停止スル
 カ或ハ汚敗シ鱗ハ互ニ粘着シ以テ膜ヲ形成スルヲ停止
 ス口腔此状態ニ陥ルノ後義齒ヲ除去スレハ被覆セラレタ
 ル表面ハ紅色多脈ト成リ微カニ抵觸スルモ出血シ義齒床
 ノ合着セル表面ハ白色ノ皮脂物ヲ以テ被覆セラシ甚タシ

キ有害物トナルヘシ
 義齒ハ着用者ノ便宜上必要ナルカ或ハ殘餘天然齒ヲ保護
 スルカ爲メ必要ナルニ非ラサレハ夜間ハ脫去スルノ習慣
 ヲ養生ス可シ夜間ノ若用ヲ要スルノ場合ニ於テハ余ハ患
 者ヲシテ別ニ夜間用ノ一具ヲ備ヘシムルヲ冀望ス夜間用
 義齒ハ咀嚼用ノ者ヨリ床ノ小ナルヲ可トシ可成的唯顎
 ニ附着シ閉合スヘキ齒齦ニ對シ對顎ニ達セシムルヲ可ト
 ス夜間用義齒ニ就テ必要トスルノ點ハ唯兩顎ヲ隔離スル
 ニ在リ齒齦面ハ自然ノ狀態ニ在テハ唾液ニ浴シ摩擦セラ
 ル、モノナレハ廿四時間中八時間ハ自由ニ放置スルヲ要
 ス而シテ若シ夜間スラ或部ヲ被覆スルヲ要スルモハ可及
 的被覆部ノ小ナルヲ良トス
 人或ハ問テ曰ハシ義齒ハ人ノ生活中何レノ時ニ使用スヘ

キ者ナルヤ如何ナル場合ニ於テ使用スヘキ者ナルヤ義齒
 ニ因テ幾何ノ利益ヲ冀望スヘキ義齒ハ幾何久シク保績ス
 ルモノナルヤト義齒ハ齒ノ缺乏スル時發音不明瞭ト成ル
 時大白齒ヲ用ヒテ咀嚼スルヲ能ハサル時等ノ場合ニ於テ
 常ニ之レヲ採用セサル可カラス爰ニ特ニ大白齒ト云フ所
 以タル大白齒ヲ失テハ前齒ヲ以テ咀嚼シ然スレハ前齒
 ハ速カニ摩耗スルカ或ヒハ上前齒ハ下前齒ノ爲メニ前方
 ニ驅出セラレテ弛緩シ自己ノ本務ニ非サル用ニ供セラレ
 、テ以テ早く敗壞スルニ傾向スルハ何人モ疑ハサル處ナ
 レハナリ
 義齒着用者ニシテ若シ尋常ノ忍耐力ヲ有シ尋常ノ口腔形
 狀ヲ備ヘ而シテ製造ノ良好ナル義齒ヲ着用スルモハ完全
 ナル發音ニ回復シ普通ノ食物ハ充分ニ咀嚼スルヲ得ルニ

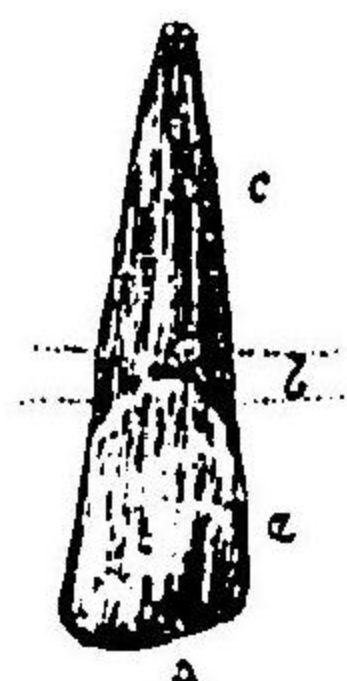
至ル可シ
 義齒ノ保續期限ハ各人ニ從テ差異アリ而シテ其差異ハ
 唾液ノ性質義齒ニ注意スルノ如何義齒ノ製造ニ供スル物
 品ニ關シ又大ニ義齒ノ製法ニ關ス(製法ノ良否ニ拘ラス)製
 法ノ良好ナル義齒ハ粗惡ノ者ヨリ二倍久シク保續ス金床
 ナ有スル一個若クハ二個ノ義齒ハ無限ニ保續シテ十年十
 五年乃至廿年ニ亘ルヲ有リ或ハ近隣天然齒ノ狀態ニ依リ
 二年ニシテ新調ヲ要スルヲナキニ非ラス
 或人ハ十年間保續シテ完全ナル一具ノ義齒ヲ着用シ或人
 ハ僅カニ十八個月ニシテ新調ヲ要スト雖モ三年乃至四年
 ハ中數ナリトス

齒科生理及外科學 完

圖解

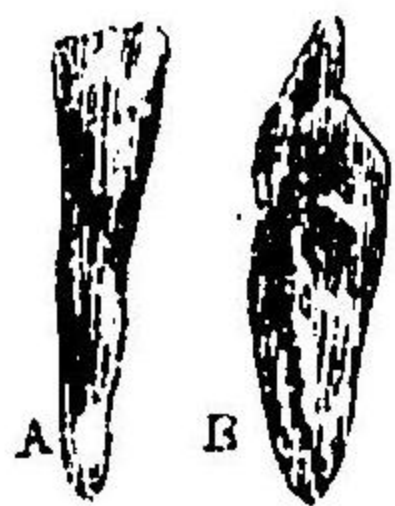
齒科生理及外科學

第一圖



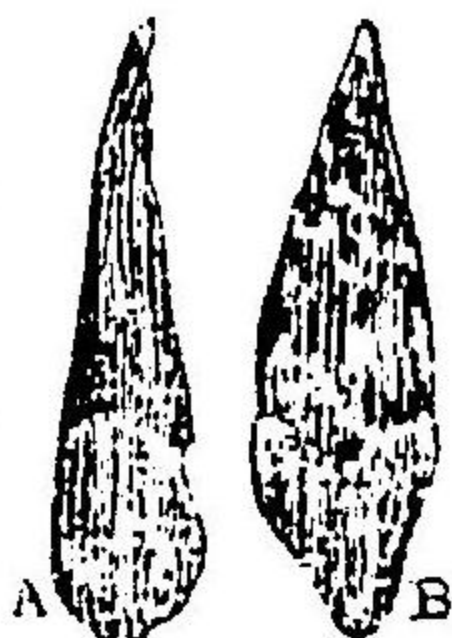
(A) 上顎左中前齒前側面 (B) 齒頸 (C) 根

第二圖



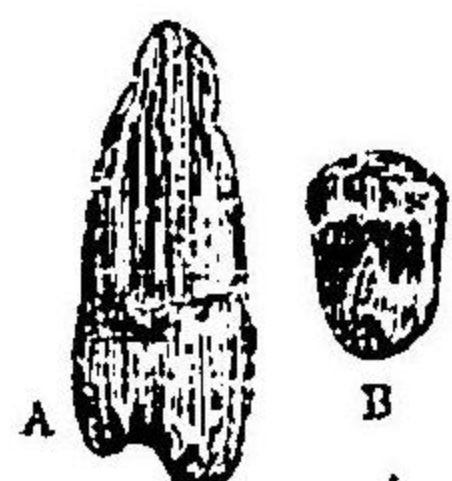
(A) 下顎右中前齒 (B) 前側面

第四圖



(A) 上顎左大齒 (B) 前側面

第六圖

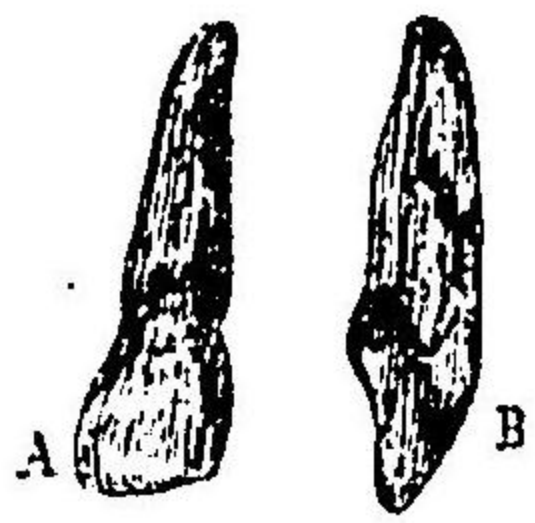


(A) 上顎小白齒 (B) 咀嚙面



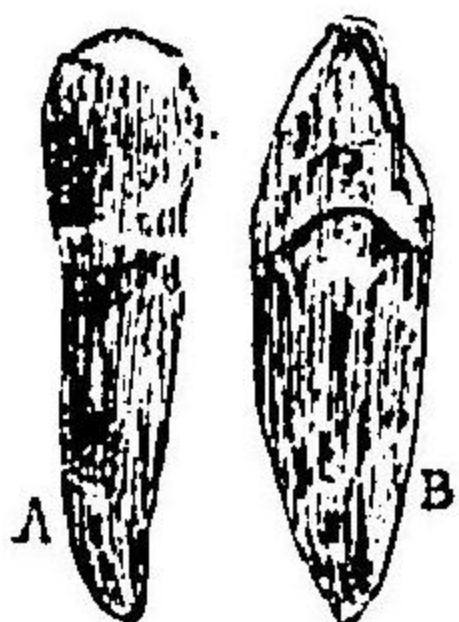
(A) 上顎左中前齒前側面 (B) 對唇面 (C) 齒頸

第三圖



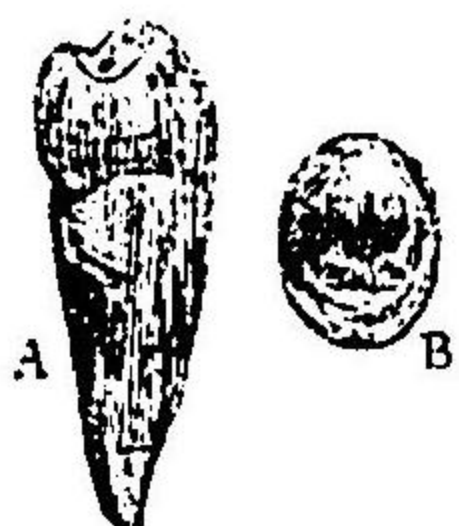
(A) 上顎左側前齒 (B) 前側面

第五圖



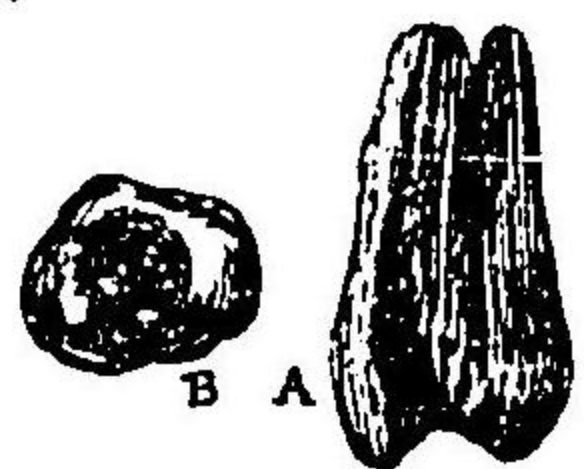
(A) 下顎右大齒 (B) 前側面

第七圖



(A) 下顎小白齒 (B) 咀嚙面

第十圖

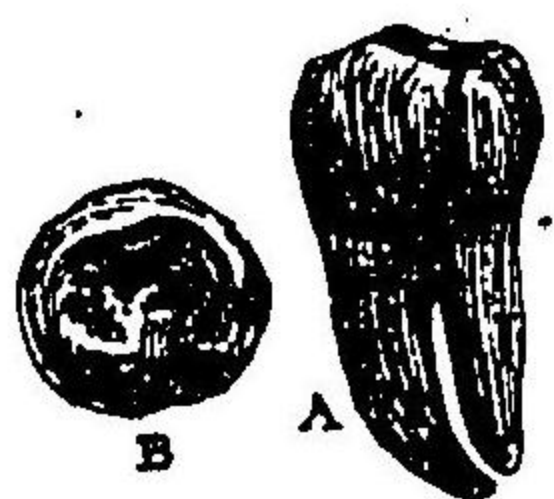


(B) 咀嚼面

(A) 後面

上顎第三大齶齒

第十圖

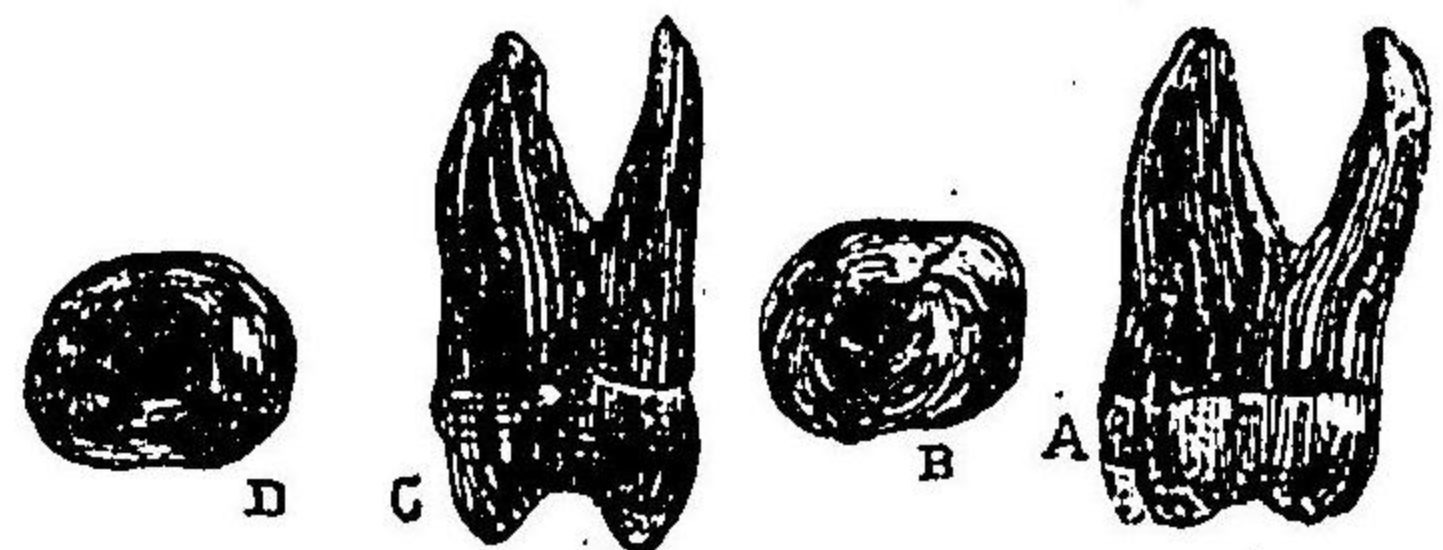


(B) 咀嚼面

(A) 側面

下顎左方第三大齶齒

第八圖



(D) 第二大齶齒咀嚼面

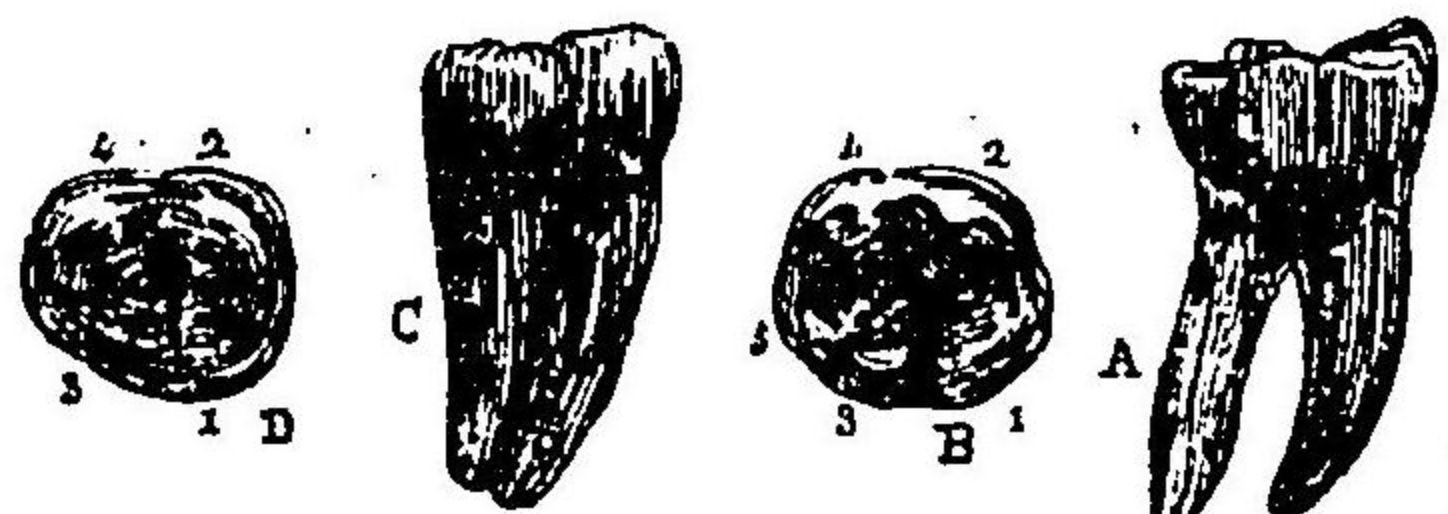
(C) 第二大齶齒

(B) 第一大齶齒咀嚼面

(A) 第一大齶齒後面

上顎左方第一及第二大齶齒

第九圖



(D) 第二大齶齒咀嚼面

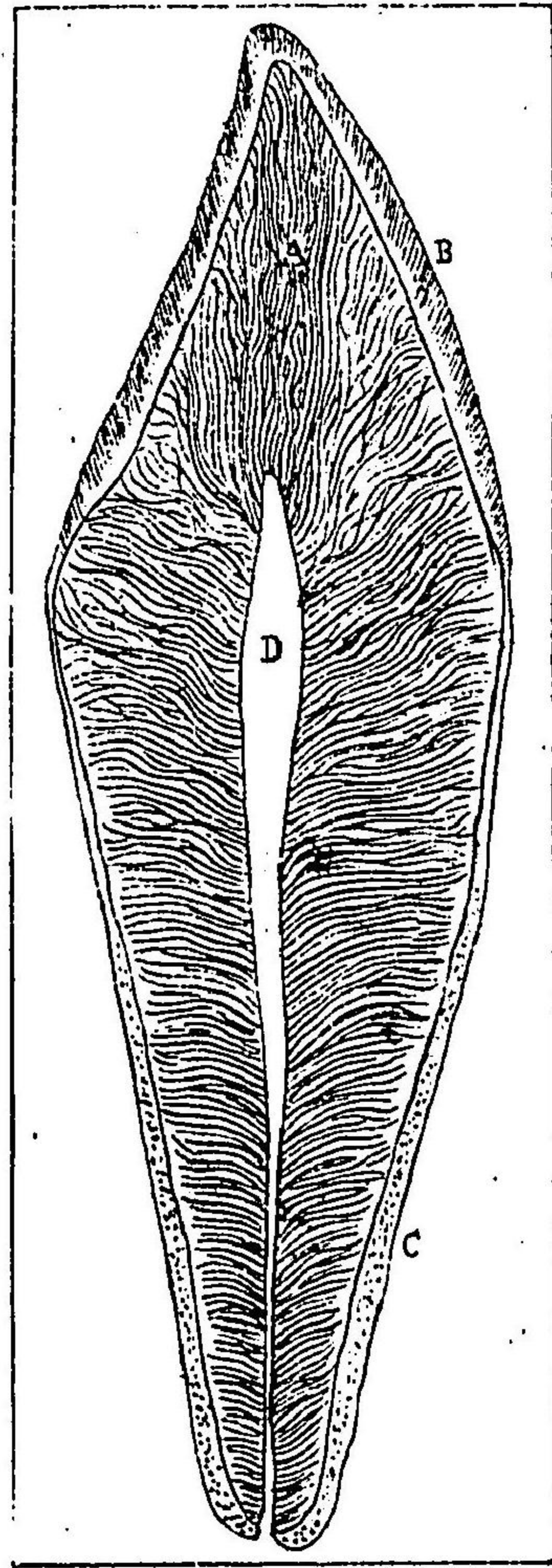
(C) 第二大齶齒外面

(B) 第一大齶齒咀嚼面

(A) 第一大齶齒外面

下顎右方第一及第二大齶齒

第三十圖



- D. A. 象牙髓腔
- B. 琺瑯質
- C. 白堊質

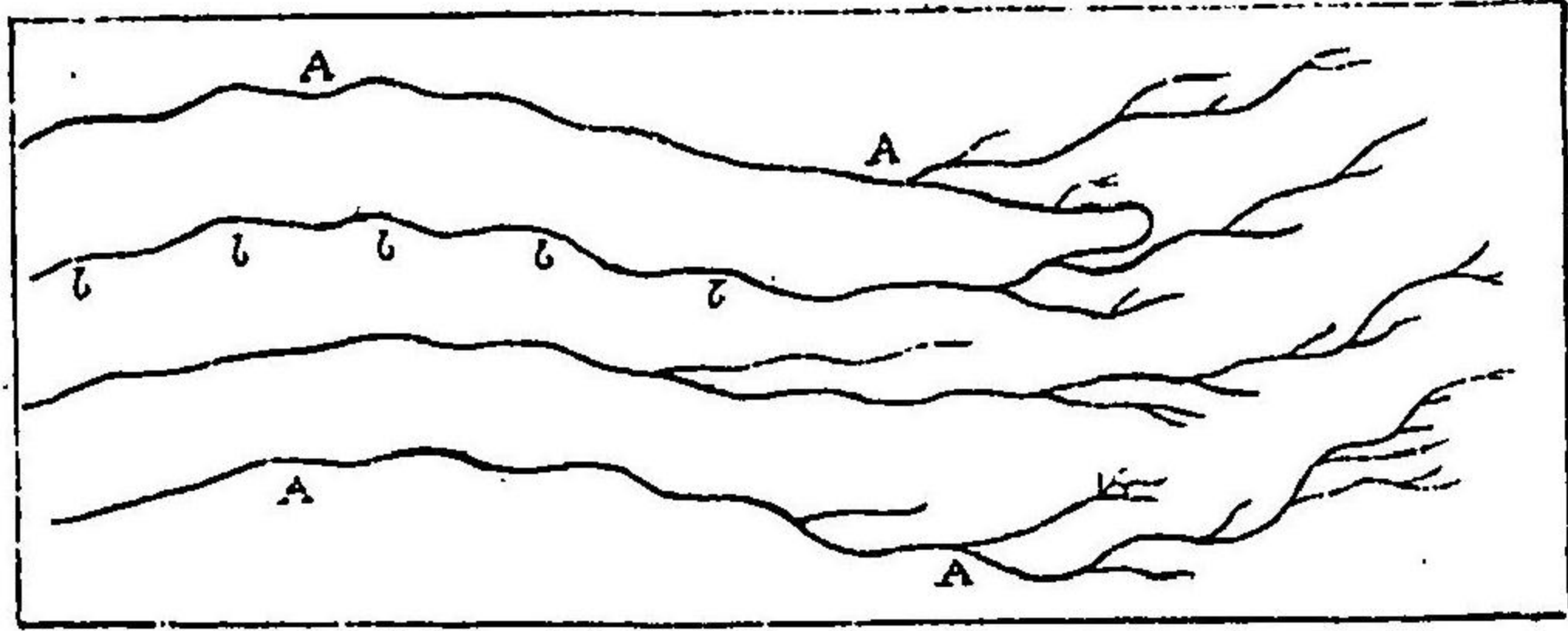
第十二圖

ハ第五對神經解剖篇ニ
詳ナルヲ以テ茲ニ畧ス

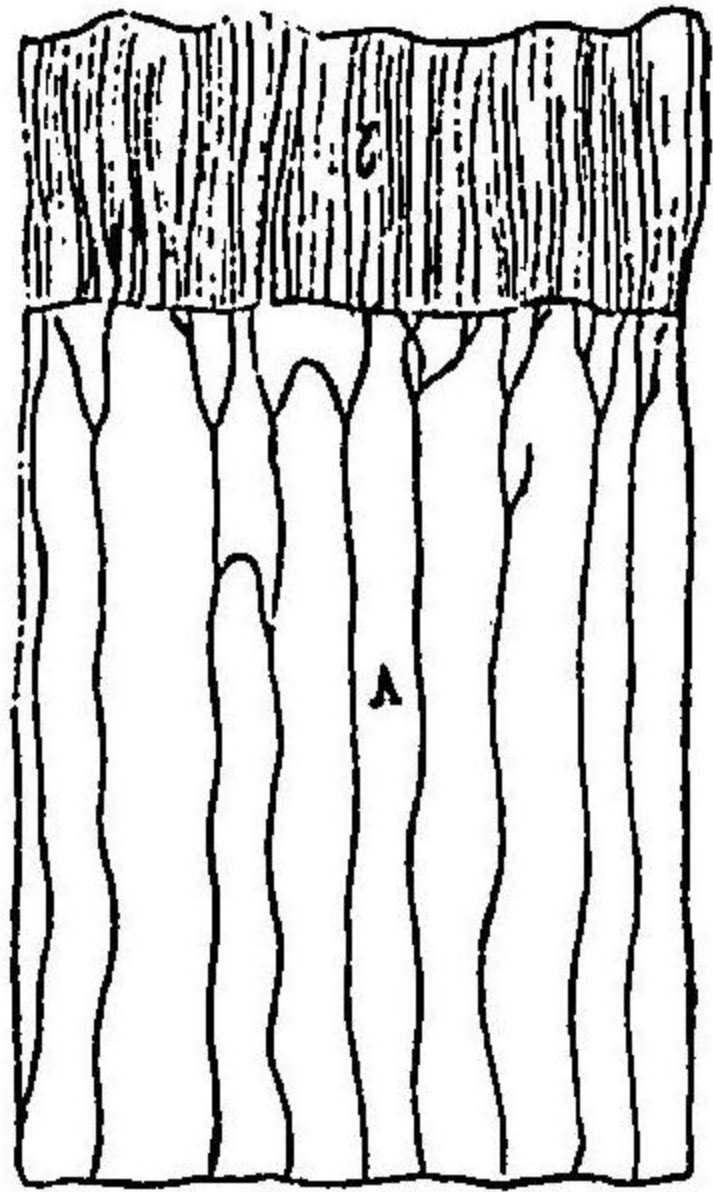
犬齒縱断面ノ圖

第四十圖

象牙管ノ圖



A. 象牙質
B. 珞瑯質

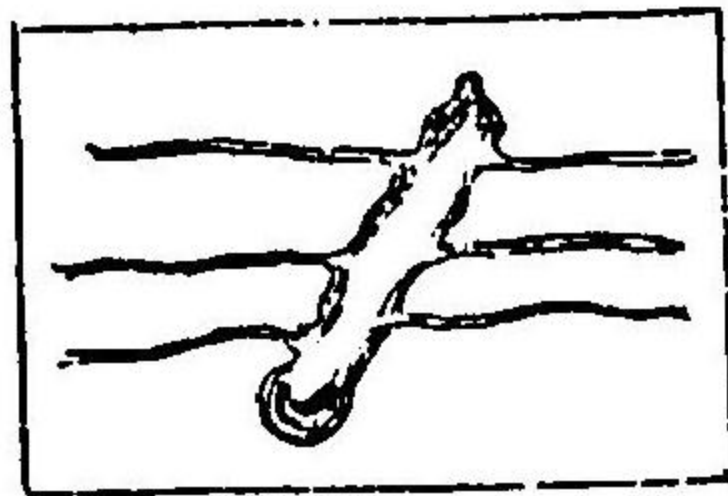


第十六圖

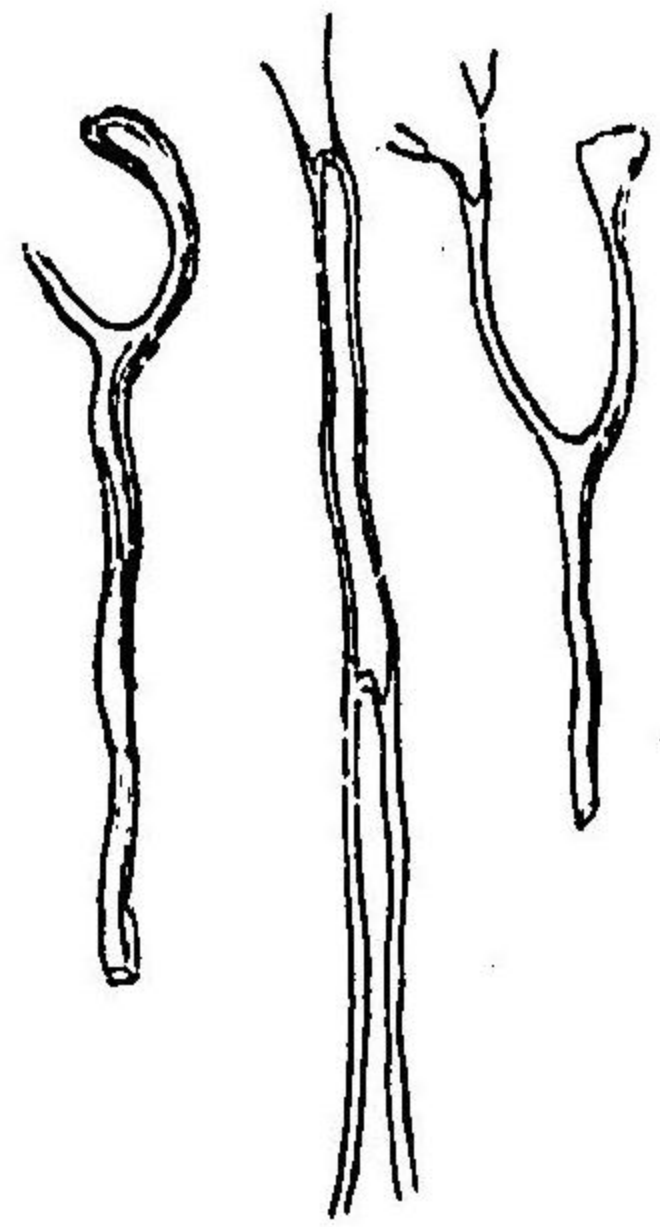
珞瑯質及象牙質ノ
聯合セル部分ノ圖

B. A.
本彎曲
副彎曲
副彎曲ハ圖ニ示
シタルヨリモ多

第五十圖



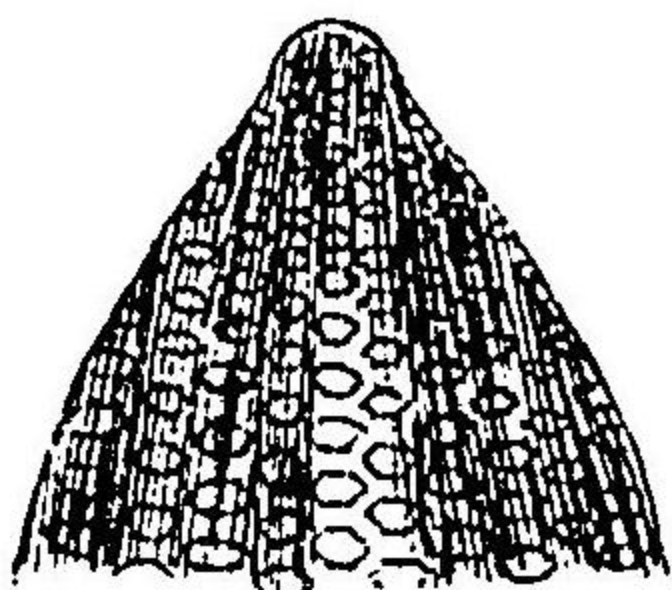
象牙管ヲ
横走セル
胞ノ圖



第十七圖

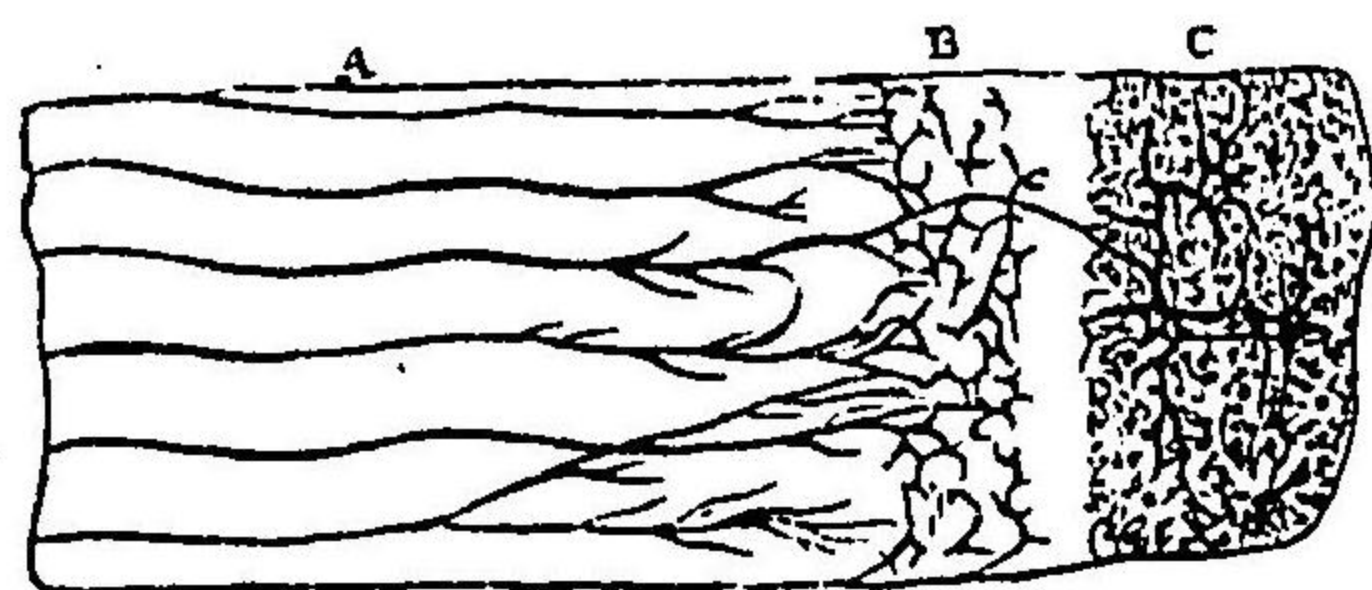
冠部象牙
管ノ末端ノ
圖

圖八十第



珙瑯須發育
以前ニ於テ
ル象牙須冠
面ノ圖

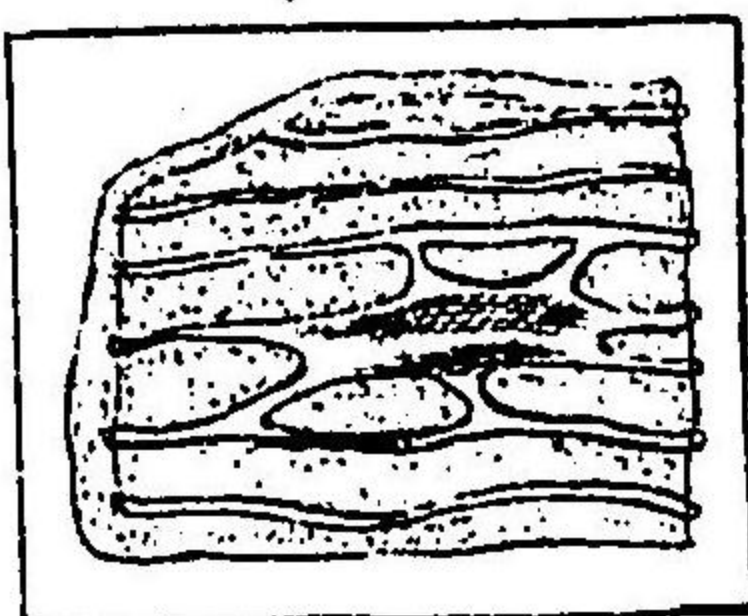
圖十二第



象牙須及白堊須ノ縱断面ノ圖

Aハ象牙須管ニシテ其一管ハBナル
球間空洞ヲ經テCナル白堊須ニ達ス
白堊須ト球間層トハ透明ナル白堊須
層ヲ以テ分界セラレ

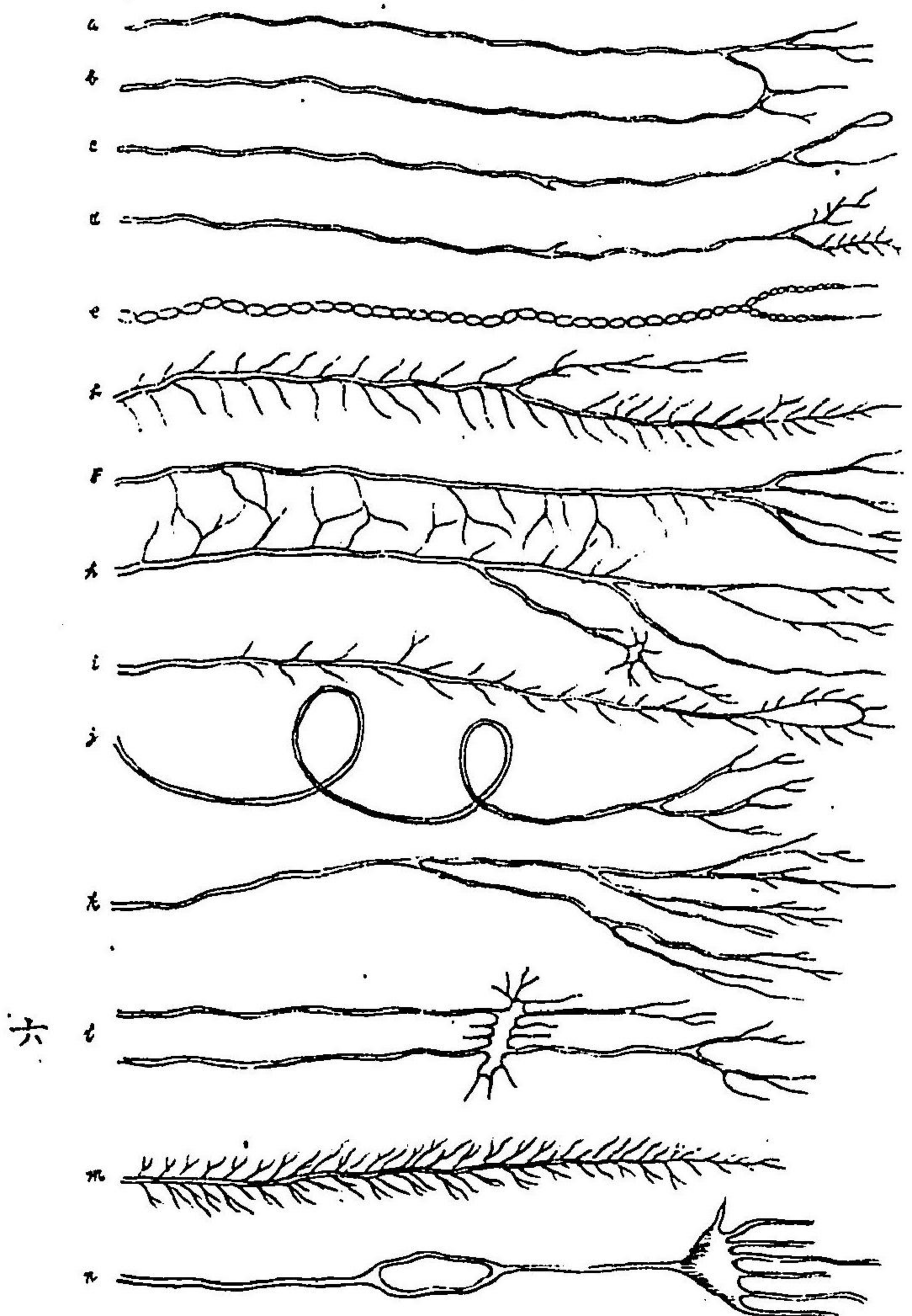
圖九十第



象牙須
ノ縱断面
ノ圖

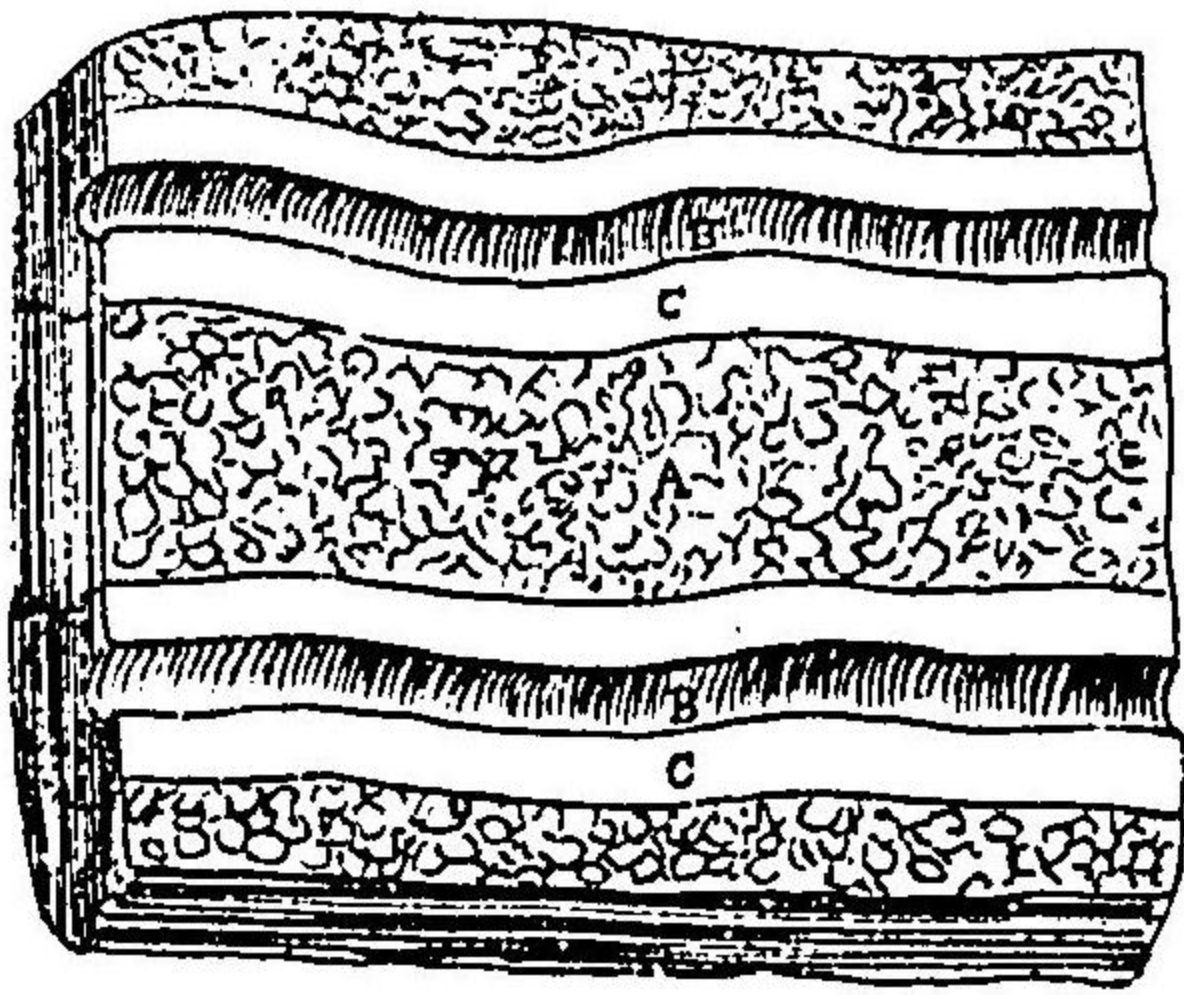
第二十一圖

人齒ノ象牙質管



第二十二圖

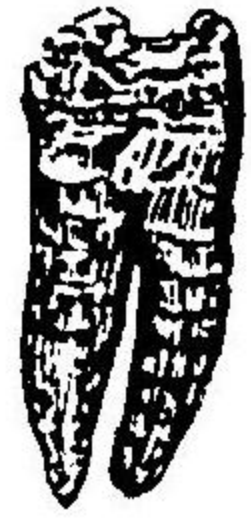
人齒象牙質ノ
縱斷面 (二千倍)



A. 細粒ノ結合
ヨリ成ル管
間組織
B. 管ノ内部
C. 管壁

七

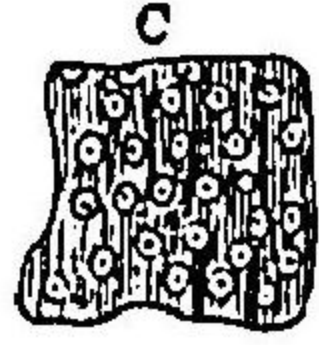
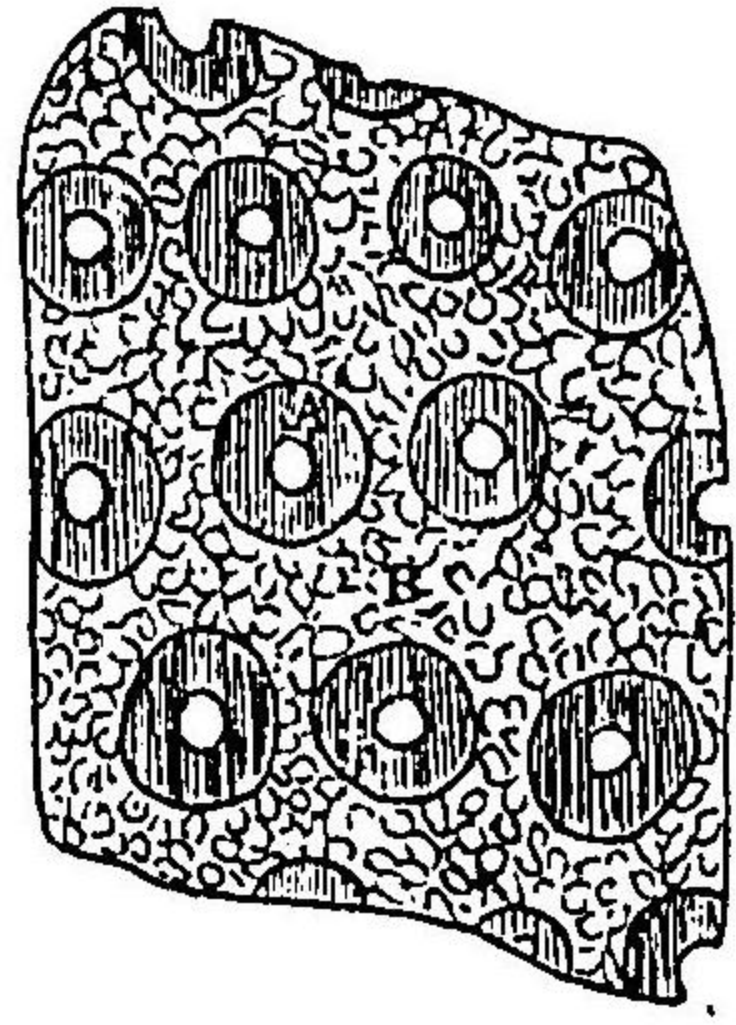
α. β. γ. δ. 齒冠ヨリ發スル象牙質管
 ε. 發育ノ完全ナラザル象牙質管
 ρ. σ. τ. υ. 齒根ノ上部及中部ヨリ發スル象牙質管
 φ. 齒根及髓腔間ヨリ發スル螺旋狀ノ象牙質管
 χ. ψ. η. θ. 齒根ノ末梢ヨリ發スル象牙質管



第二十五圖 下顎大白歯

本圖ノ齒牙ハ癩癘病ニ罹レル十五歳ノ婦人ヨリ得タルモノニシテ齒組織殊ニ象牙質及珐瑯質ノ不完全ナルヲ其外面ニ徴シテ之ヲ知ルベシ

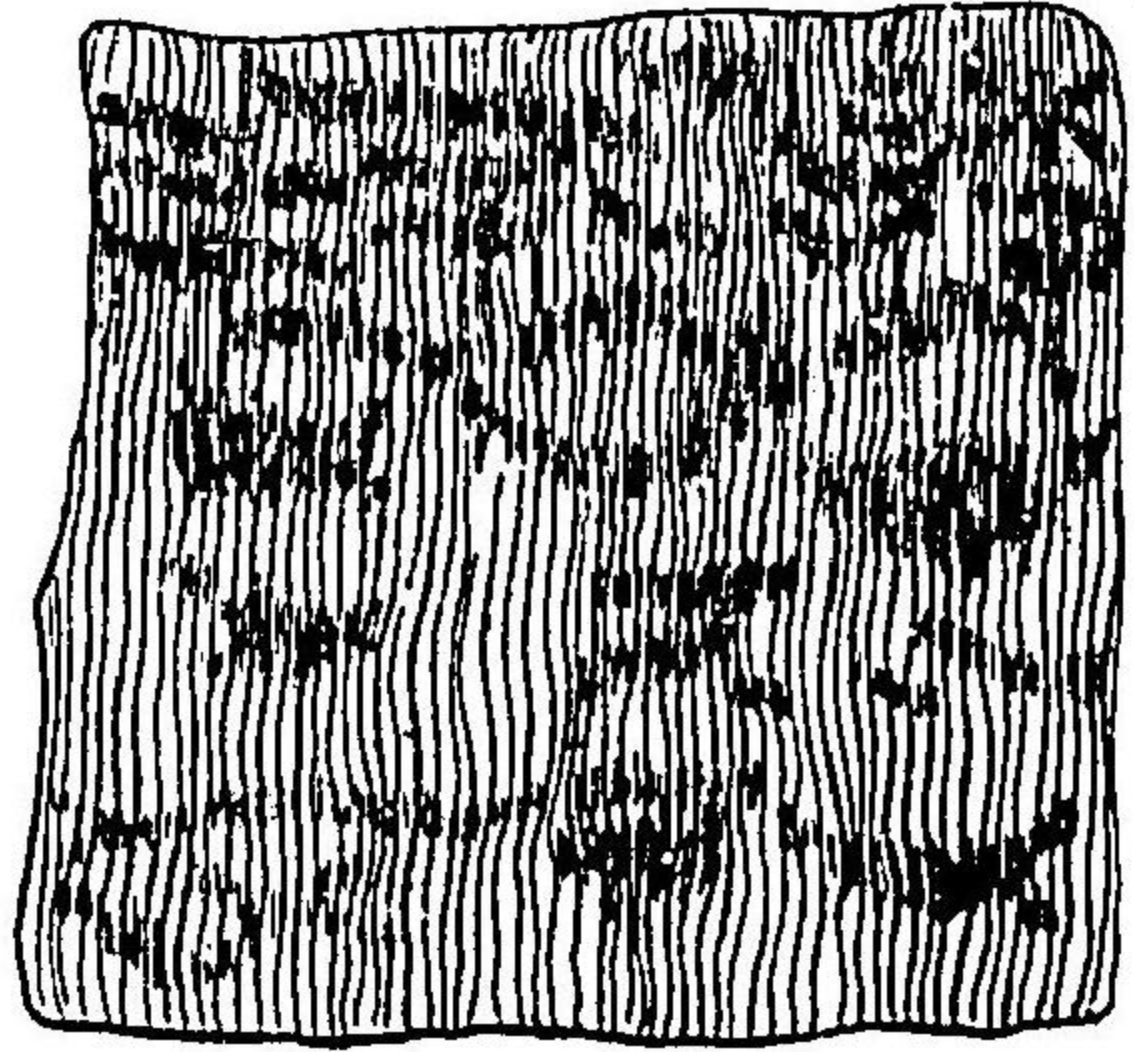
八



C B A

管壁
管間組織
管及管間
組織ノ小觀

第二十三圖 象牙質ノ横断面

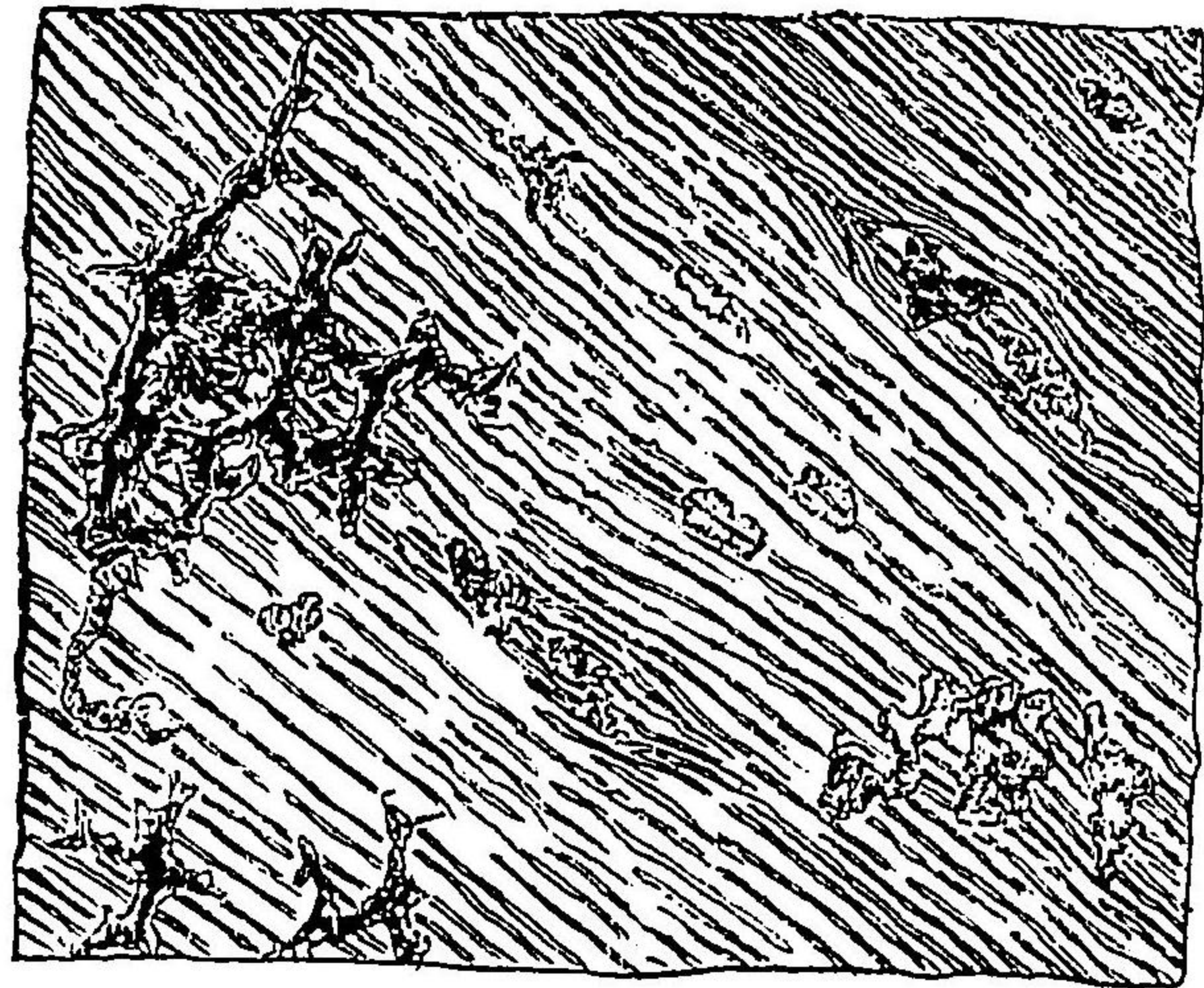


第二十四圖

蜂窩狀ノ象牙質

第二十六圖

發育完全ナラ
ザル象牙質ノ
縦断面



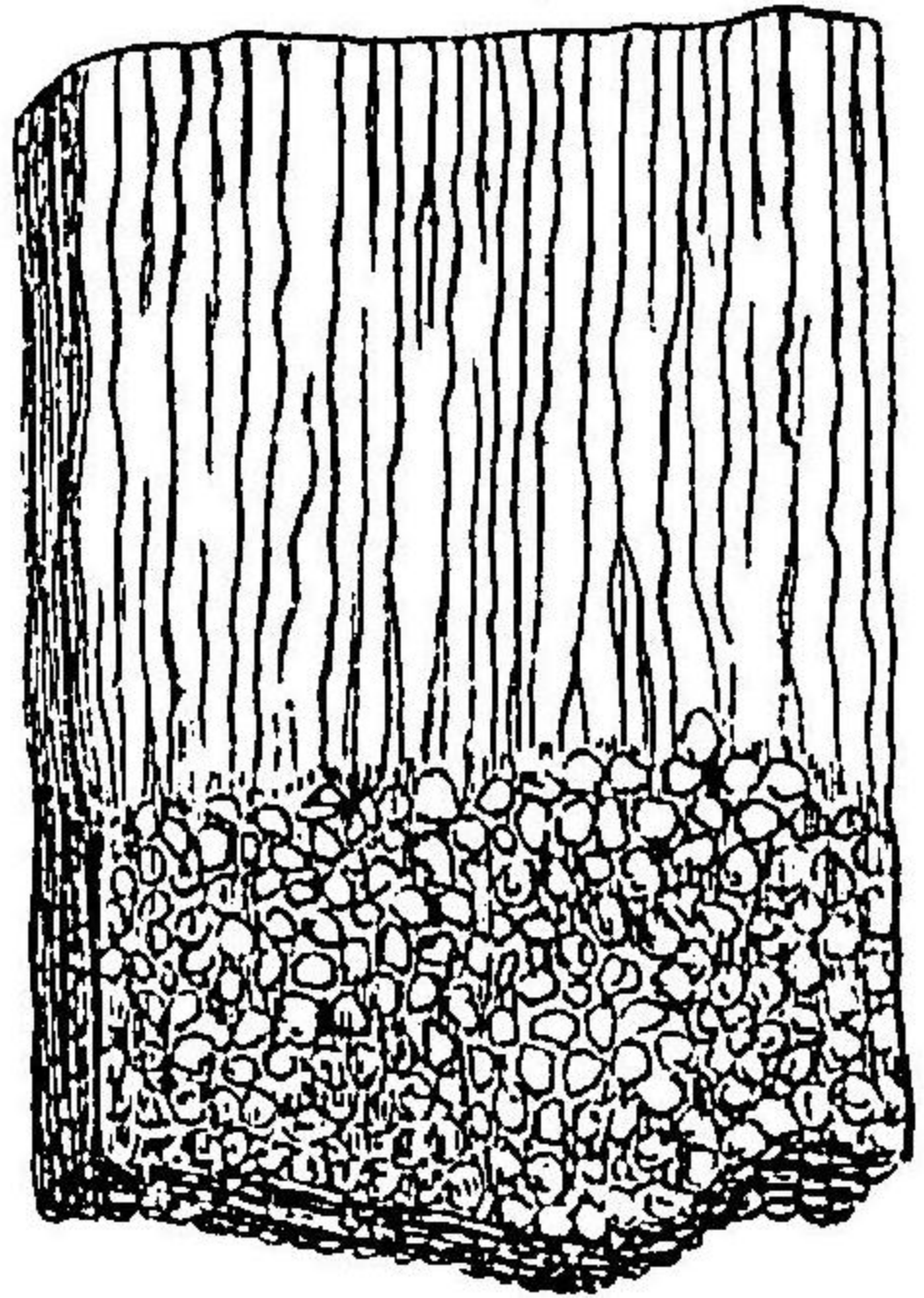
本圖ノ齒組織ハ整齊
セザル細胞ノ大ナル
モノヲ以テ充タシ其
面ハ宛モ第二十五圖
ニ示セルモノニ髣髴
ト

第二十七圖
第二十八圖

第二十五圖ニ同シ
第二十九圖ニ同シ

第二十九圖

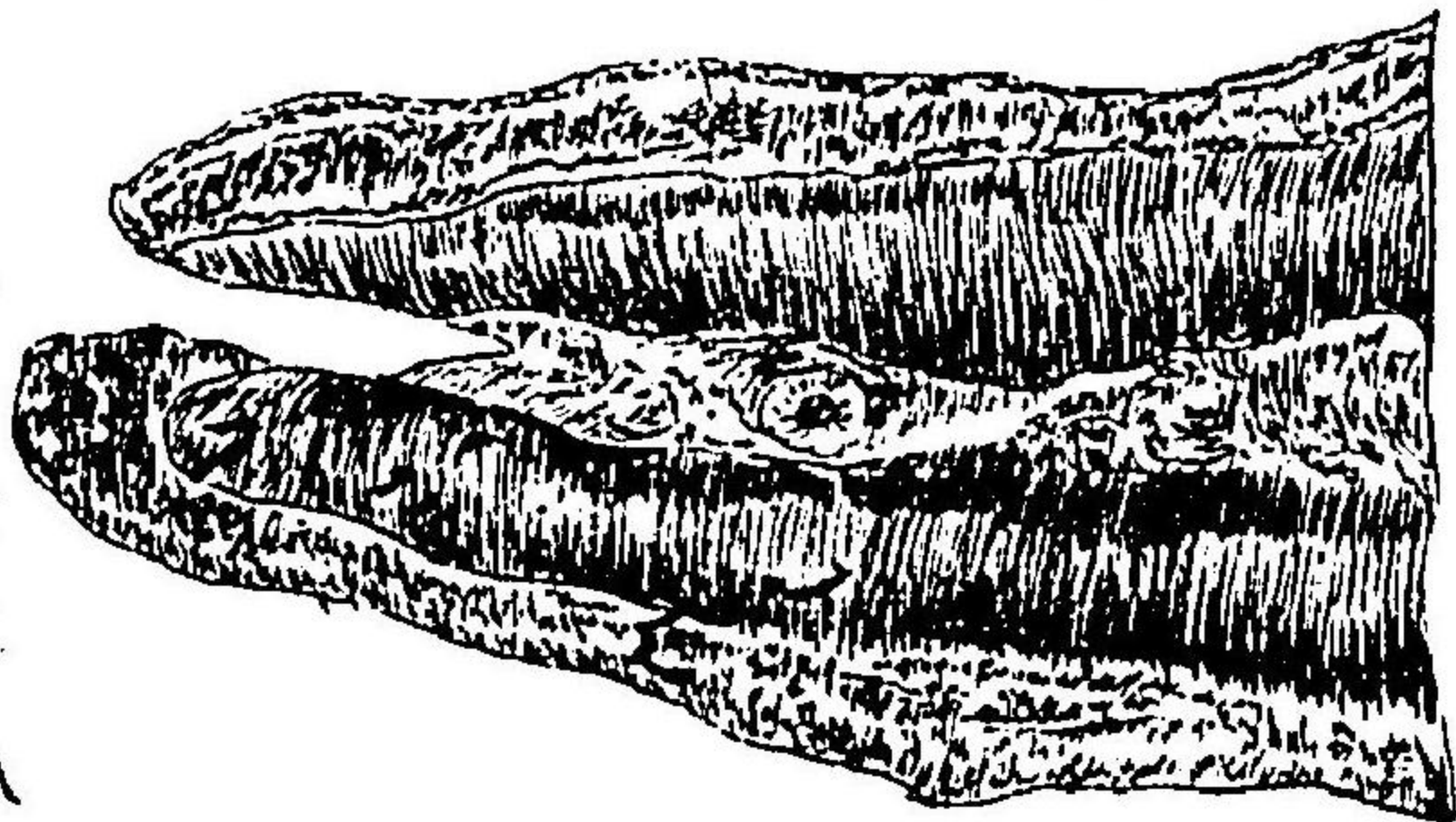
象牙質ノ縦断面



本圖ハ佝僂病患者ヨリ獲タル
大白齒根ヲ示セルモノニシテ
其細粒層ハ非常ニ厚ク其細粒
大ニシテ白重痕ハ殆ト皆無ナ
ルカ如シ

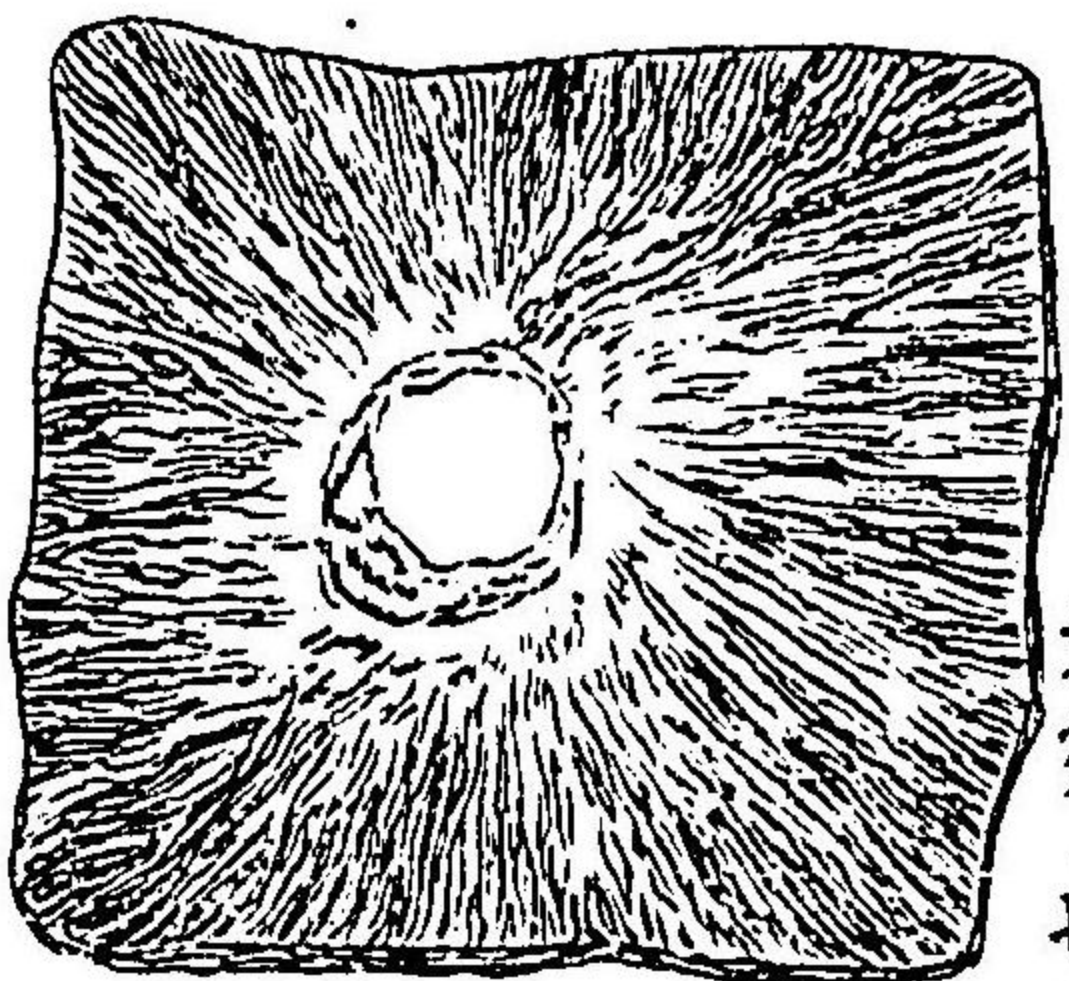
第三十圖

齒根末端ノ縦断面



其象牙質及白重痕ハ脈管ヲ以テ
貫通セラレ而シテ白重痕ハ非常
ニ厚シ

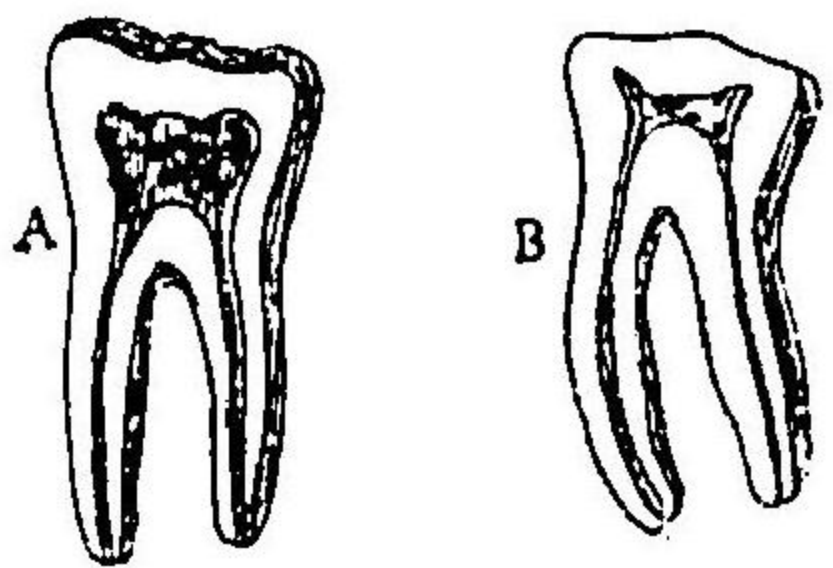
第三十一圖



齒根ノ中部ヨリ
髓腔ニ達スル象
牙質ノ切断面

脈管ニ依リテ横断
セラレ其二分ノ一ハ
白堊質ヲ以テ覆ハル

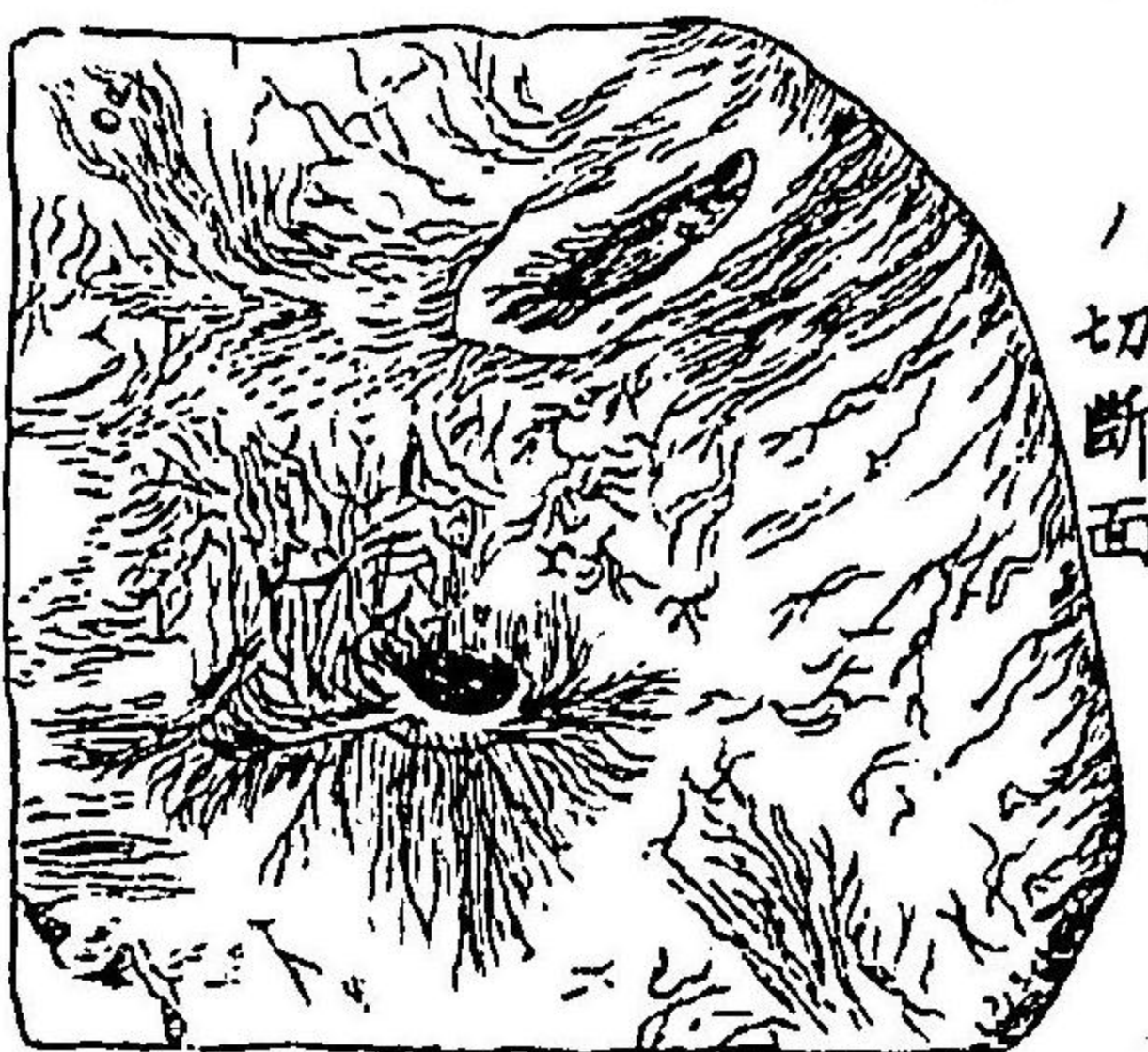
第三十二圖



二齒ノ縦断面ニシテ
比較的ニ其髓腔ノ大
サヲ示ス

A. 咀嚼面ノ摩耗
セサル以前ノ
齒牙
B. 咀嚼面ノ摩耗
シタル以後ノ
齒牙

第三十三圖

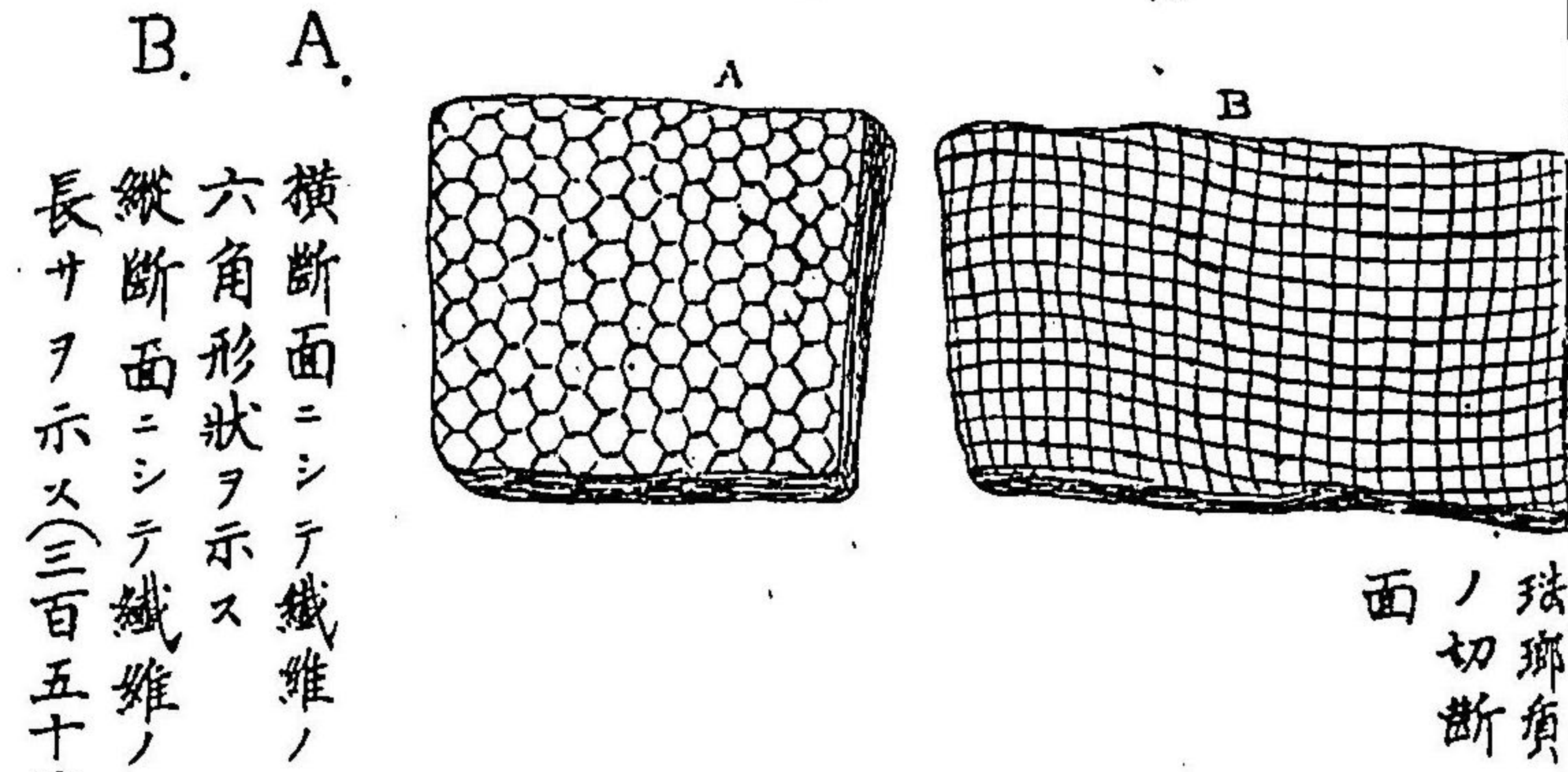


腐蝕齒ノ髓腔ヨリ獲タル
新生物即チ第二象牙質
ノ切断面

α, α, α. 象牙質ニ於ケル
脈管

爰ニ示セル象牙質ハ骨
傷ノ為メニ髓腔ニ達ス
ベキ開口ヲ閉塞シ宛モ
齒冠ノ摩耗セシ場合ニ
於テ髓腔ヲ充塞スル所
ノモノニ似タリ

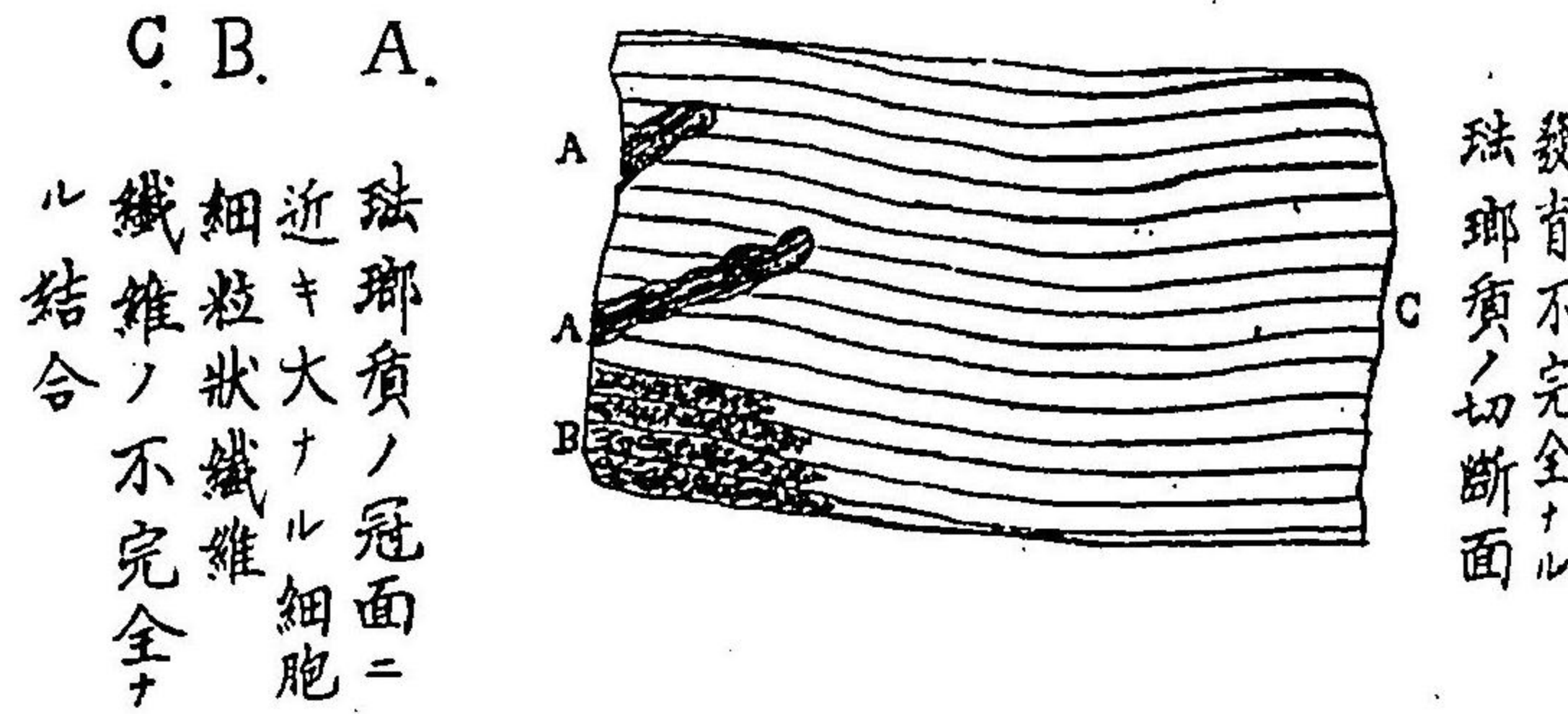
圖四十三第



A. 横断面ニシテ纖維ノ六角形状ヲ示ス
 B. 縦断面ニシテ纖維ノ長サヲ示ス(三百五十倍)

珞瑯質ノ切断面

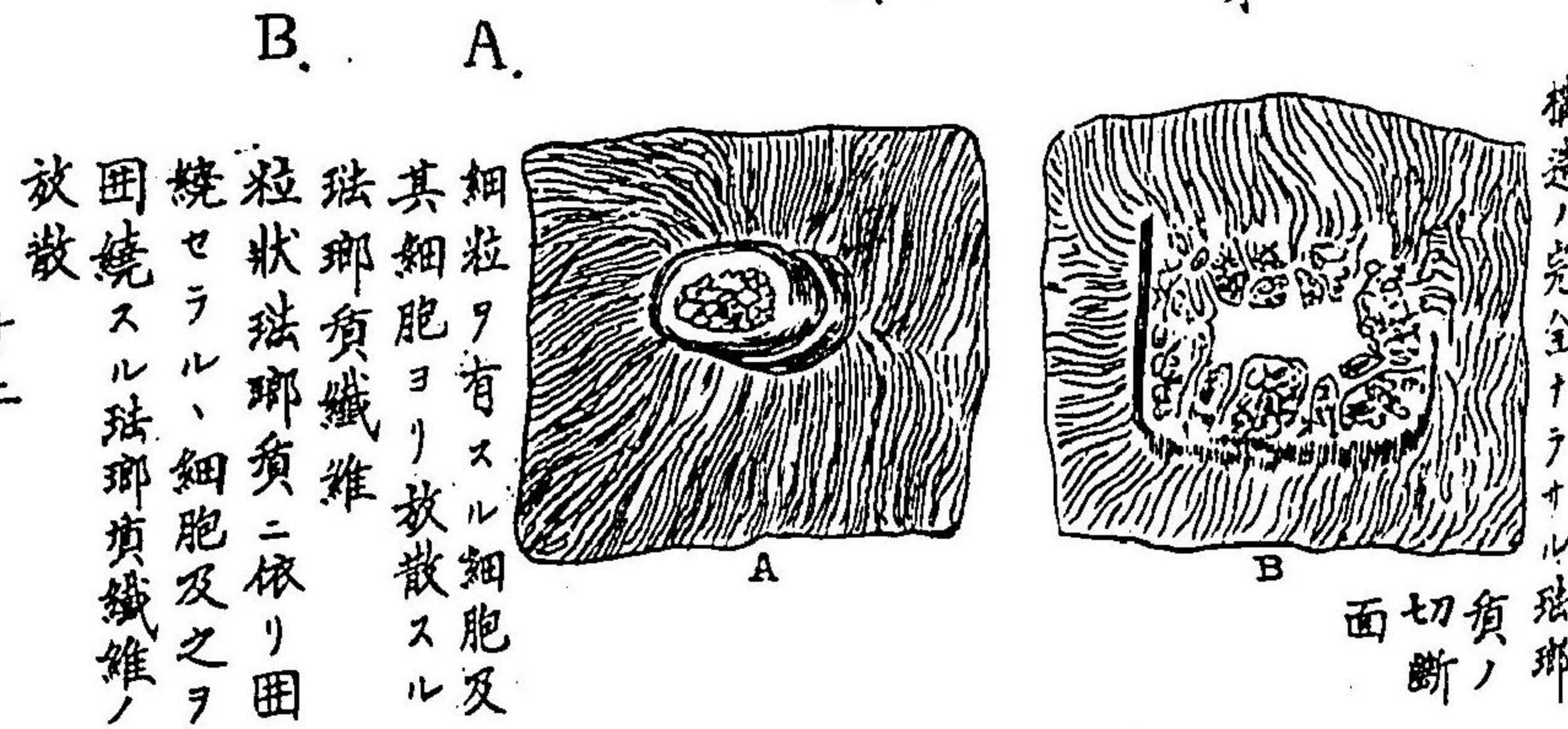
圖五十三第



A. 珞瑯質ノ冠面ニ近キ大ナル細胞
 B. 細粒状纖維
 C. 纖維ノ不完全ナル結合

發育不完全ナル珞瑯質ノ切断面

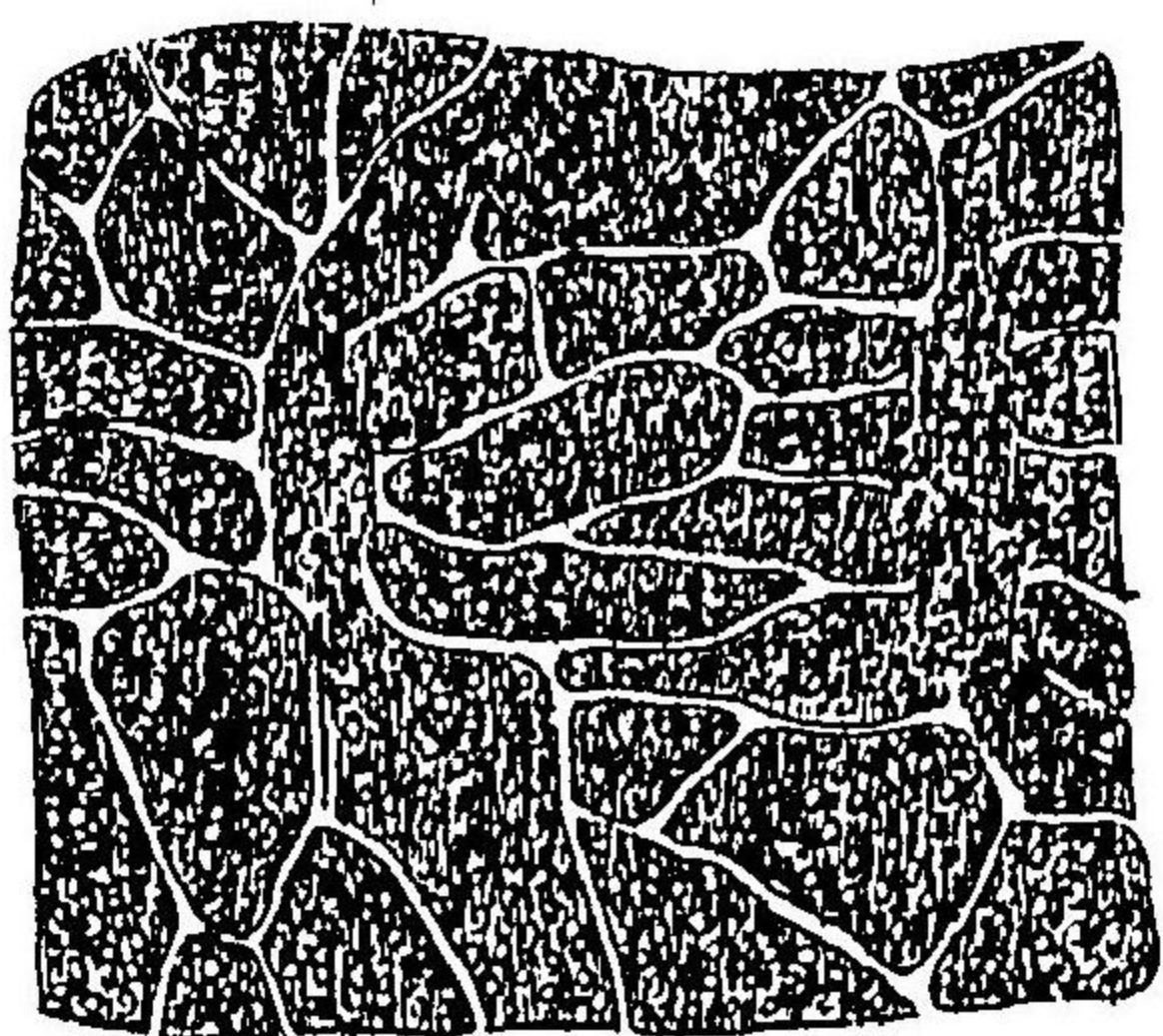
圖六十三第



A. 細粒ヲ有スル細胞及其細胞ヨリ放散スル珞瑯質纖維
 B. 粒状珞瑯質ニ依リ圍繞セラルル細胞及之ヲ圍繞スル珞瑯質纖維ノ放散

構造ノ完全ナル珞瑯質ノ切断面

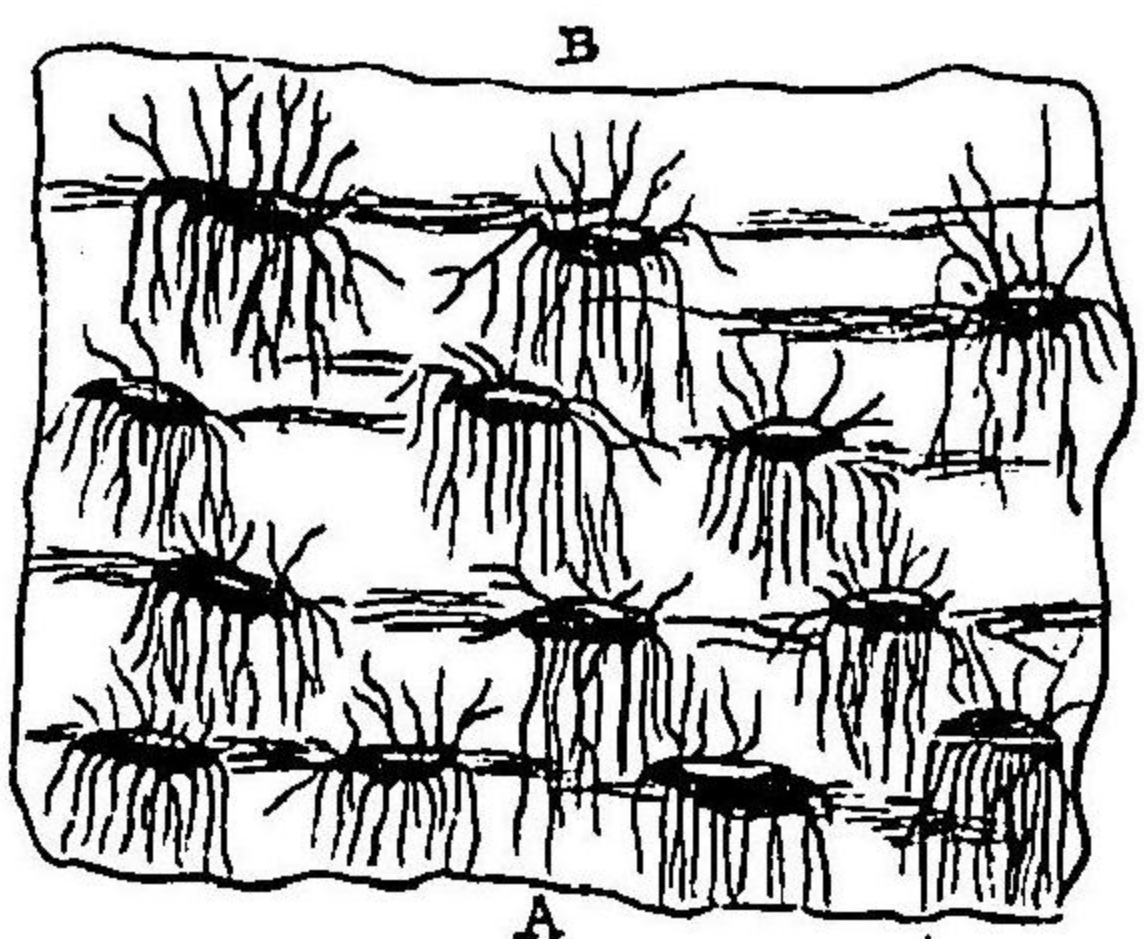
第三十七圖



白堊質ノ切断面

本圖ハ細胞其分枝及ヒ粒状ヲ示セル細胞間組織ヲ示ス

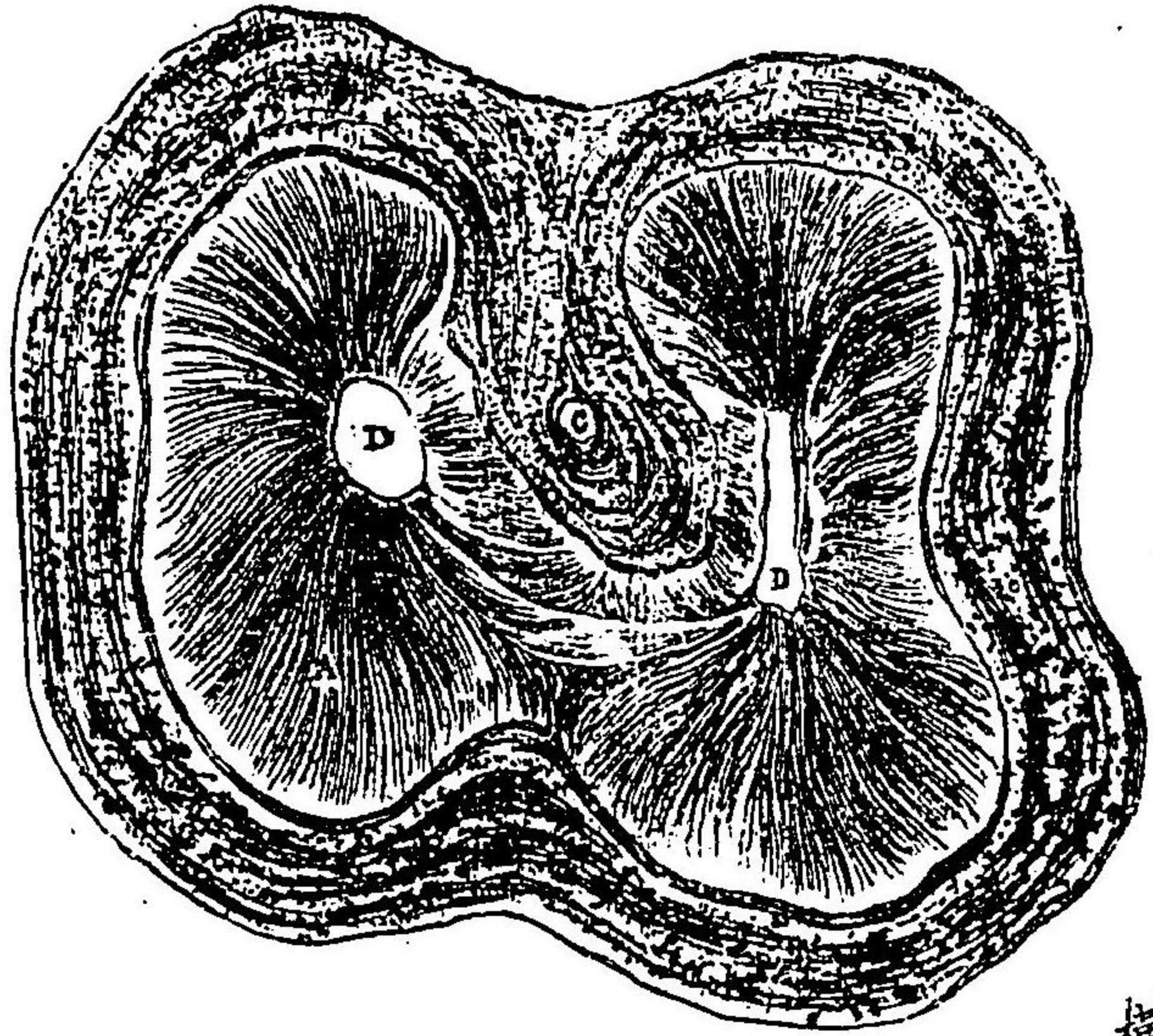
第三十八圖



白堊質ノ切断面ニシテ細胞及薄層ノ排列ト共ニ其一般ノ性状ヲ示ス

B. A.
骨膜面
象牙質面

第三拾九圖



大白齒ニ於ケル齒頸直下ノ
横断面

A. 象牙質

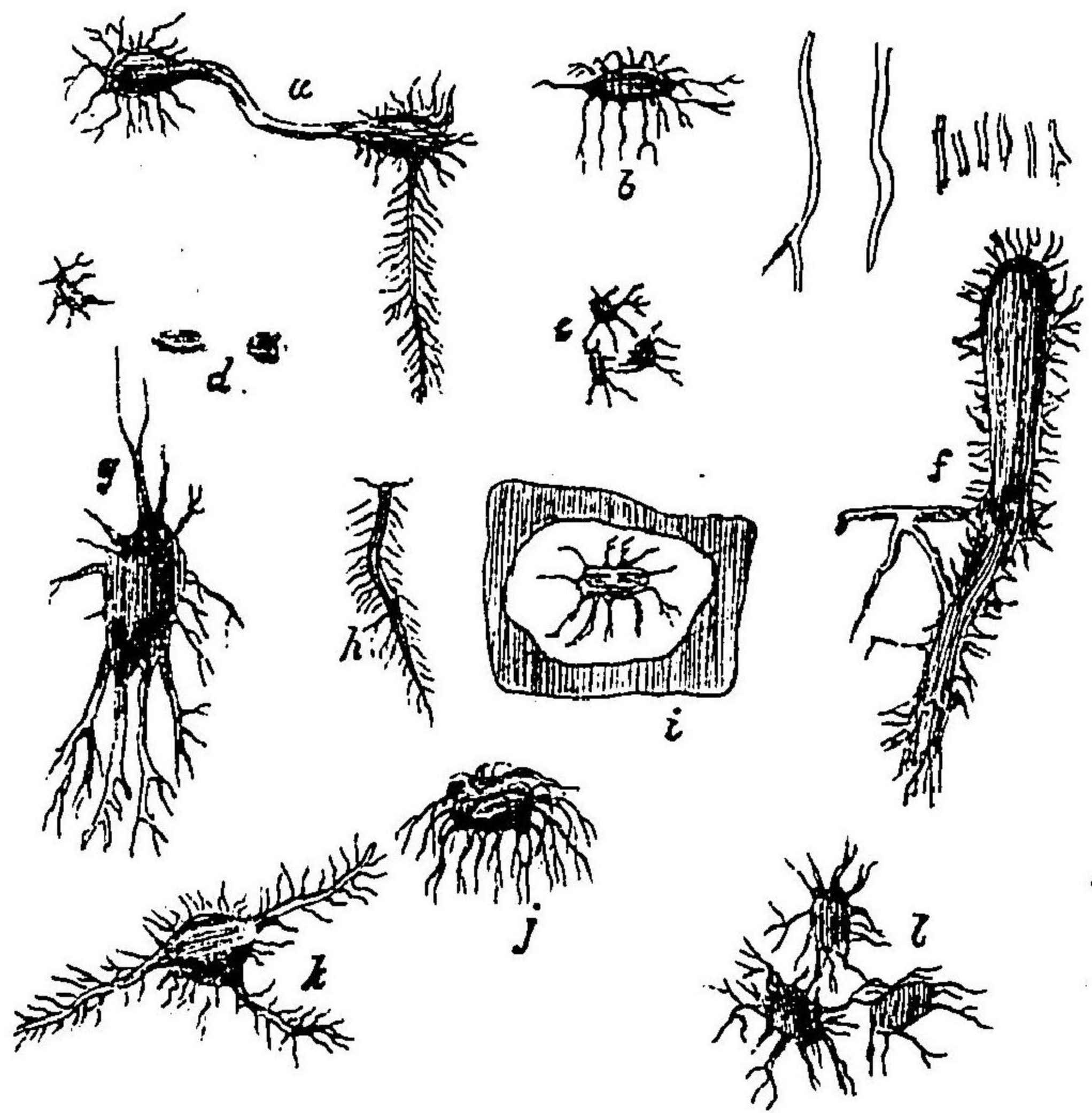
B. 白堊質

C. 薄板ニ依リ圍繞セラレ
横斷組織ヲ形成スル白
堊質ノ脈管

D. D. 齒根ノ髓腔

第四拾圖

白堊質ニ於ケル細胞ノ種々ノ形狀



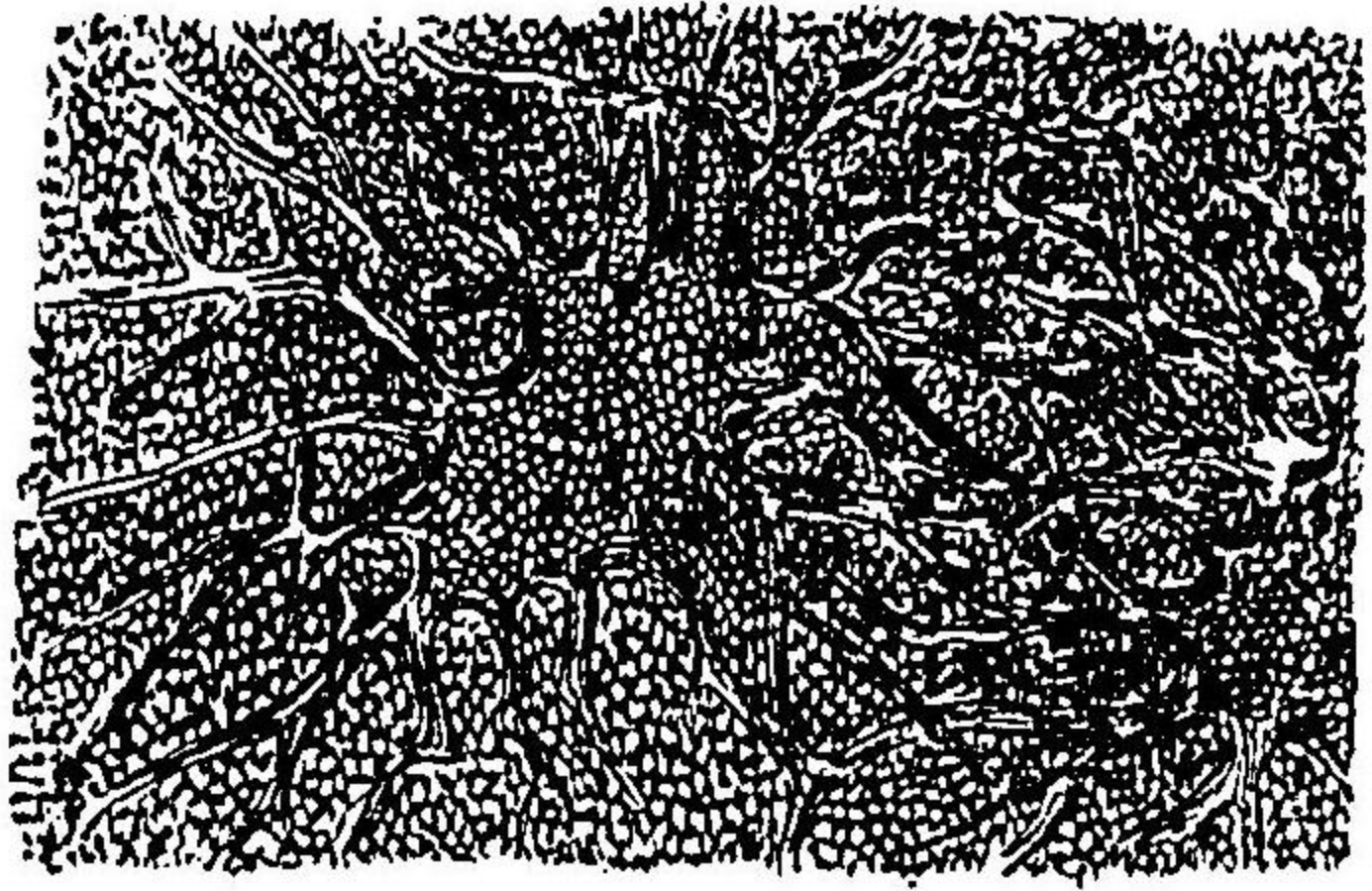
第四拾一圖

白堊質ノ切斷面
ヲ示ス



第四拾二圖

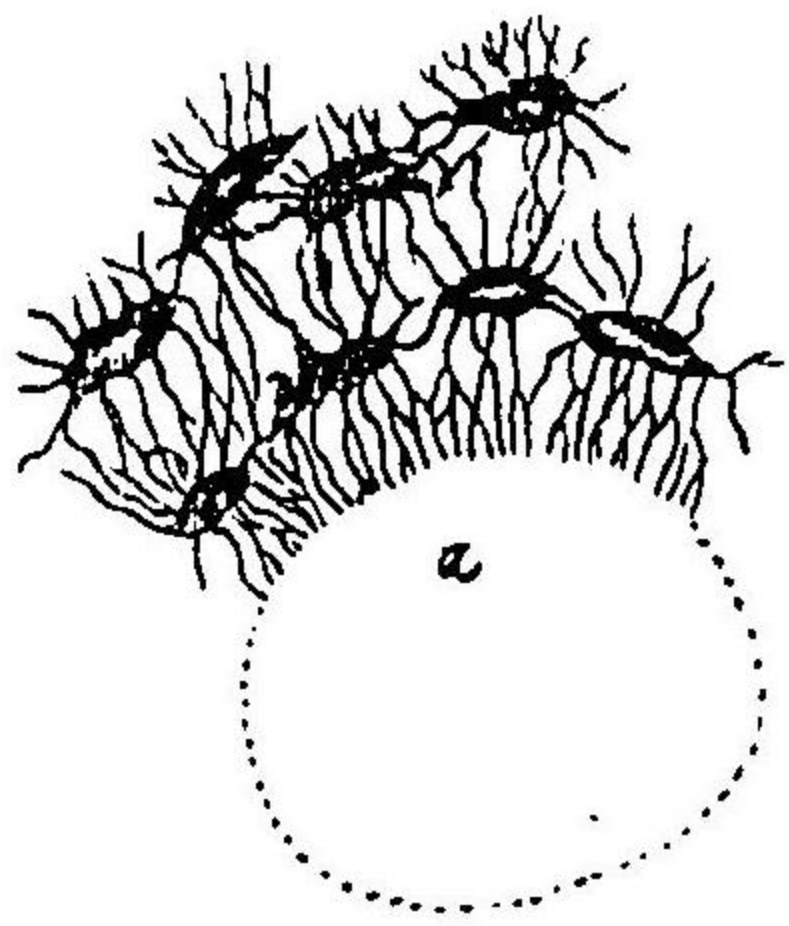
骨組織ノ二細胞



細胞ニ於ケル氣孔ノ
 排列ト細胞ノ壁上及
 其周圍ニ於ケル細粒
 組織ヲ示ス(一千二百倍)

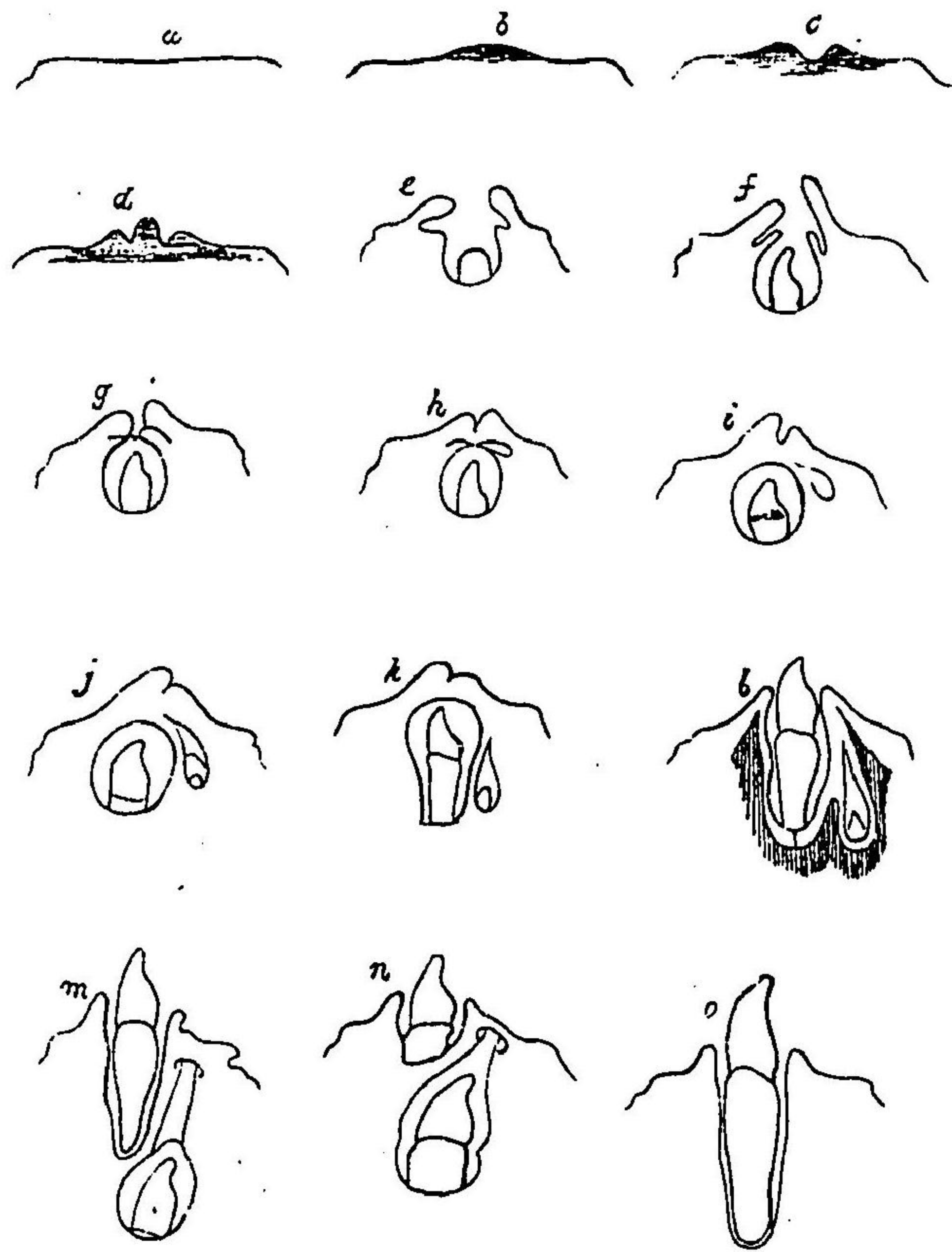
第四拾三圖

ハーヴェルス氏管ノ周圍ニ
 於ケル骨部ノ横断面

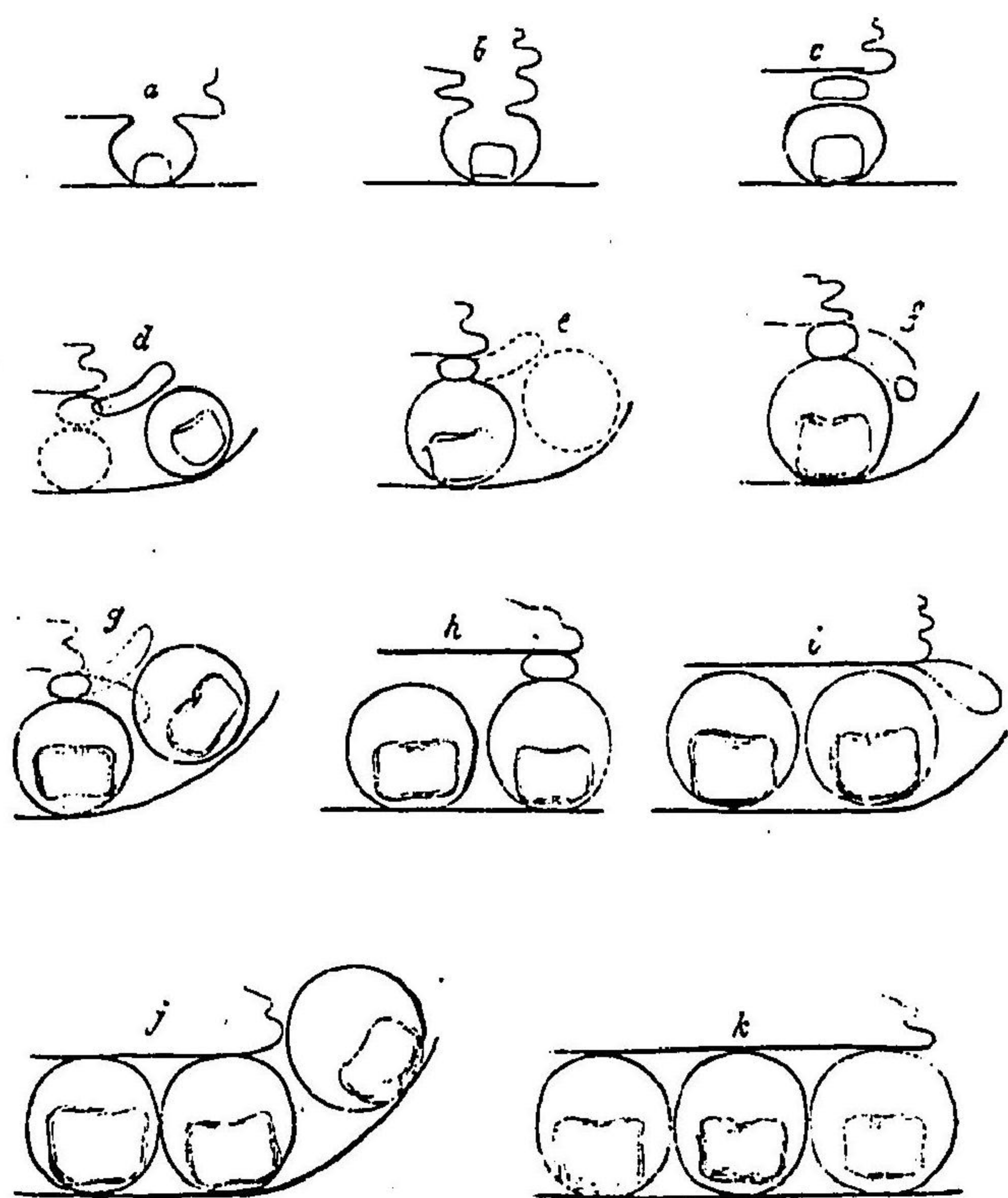


氣孔ノ面ニ始マリテ窩腔
 ヲリ窩腔へ貫通スルヲ示ス
 (三百倍)

第四拾四圖



第四拾五圖



第四十五圖 第一齒牙溝ノ密接セサル部分中ニ形成セラ
ル、成大臼齒

A. 第一齒牙溝ノ密接セサル部分

B. 其密接セサル部分(今ヤ已ニ第二齒牙溝ノ部分ナリ
ノ底上ニ於ケル第一成大臼齒ノ乳嘴及齒囊

C. 齒髓及閉口セル齒囊トナリタル第一大臼齒ノ乳嘴
及齒囊 第二齒牙溝ノ蓋ハ密接シテ大窩孔ヲ形成
ス

D. 第一大臼齒ノ齒囊ハ彎曲セル徑路ニ沿フテ鳥啄突
起即チ顎結節ニ進ミ窩孔モ延長シテ齒囊ト共ニ進
ムヘシ

E. 第一大臼齒ノ齒囊ハ同一ノ徑路ニ沿フテ舊位地ニ
復シ窩孔モ之ト共ニ再ヒ短少トナルヘシ

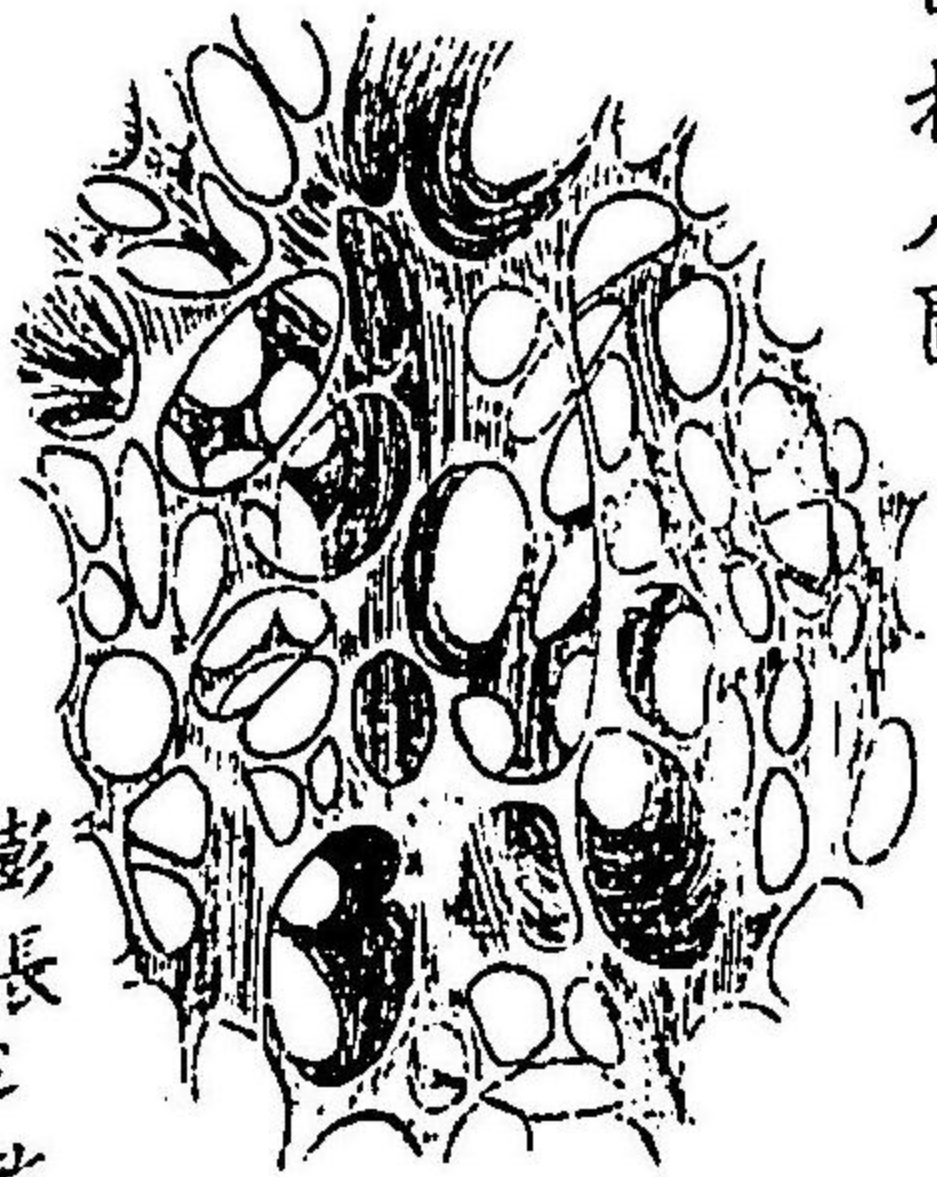
- F. 第二大臼齒ノ齒囊ヲ後部ニ送出セル窩孔
- G. 第二大臼齒ノ齒囊ハ彎曲セル徑路ニ沿フテ鳥啄突起即チ顎結節ニ進ミ窩孔ハ第二ノ組織ノ爲メニ延長スヘシ
- H. 第二大臼齒ノ齒囊ハ齒列ノ平面ニ復シ窩孔ハ再ヒ短少トナルヘン
- I. 齒髓及智齒々囊ヲ送出スル窩孔
- J. 智齒齒囊ハ彎曲セル徑路ニ沿フテ鳥啄突起即チ顎結節ニ進ム
- K. 齒列ノ極端ニ復セル智齒ノ齒囊

第四拾六圖



第一有機細胞
細胞膜、核、及
小核ヲ示ス

第四拾八圖



膨脹ニ乾燥セラ
レタル蜂窩織
差ニハ稍大ナル
網眼ノ概狀ヲ示
シタル者ナレバ
其各網眼ハ更ニ
小ナル許多ノ網
眼ヲ包有ス

第四拾七圖



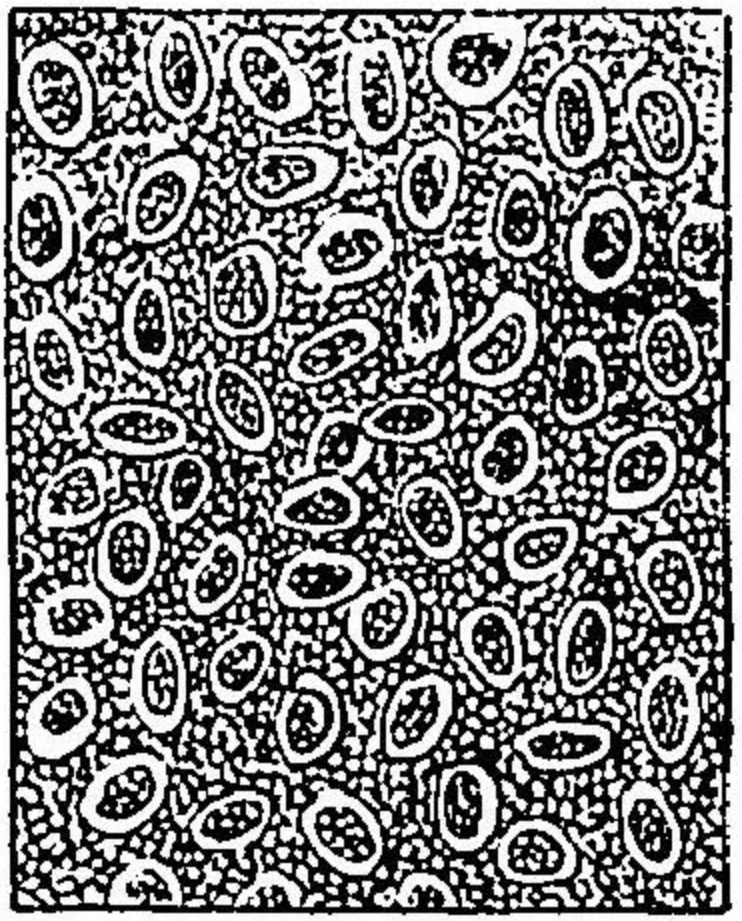
第一期ニ於ケル
象牙質髓
アラスマ蜂窩織及
有核細胞ヨリ成ル

第四拾九圖

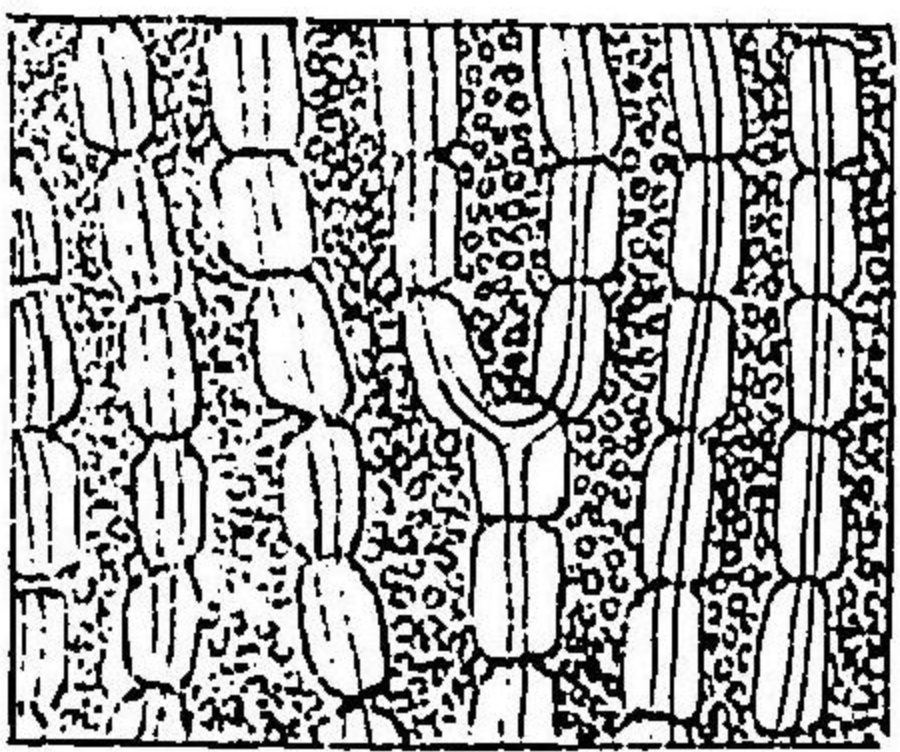
第二拾六圖ヲ觀ルベシ

第五拾二圖

第五拾圖

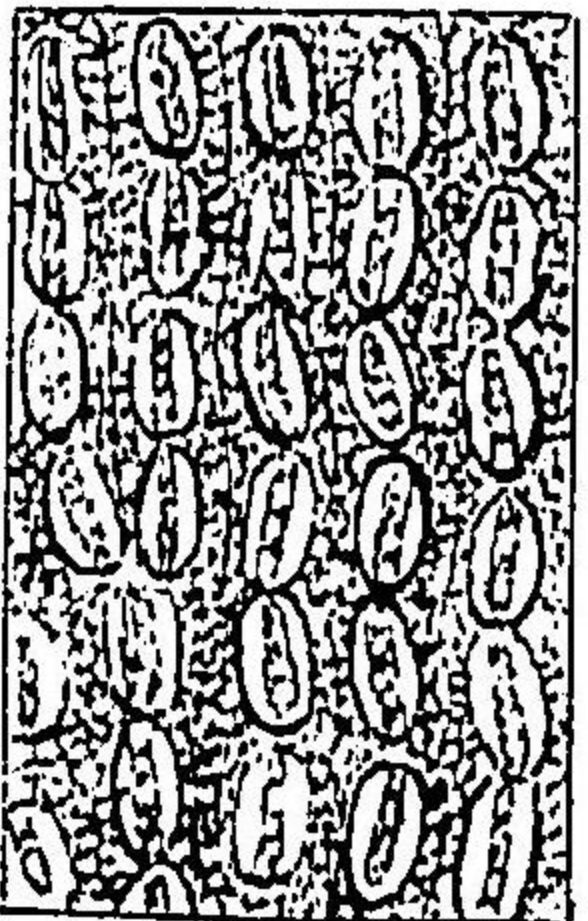


第二期ニ於ケル
象牙質髓
有軟細胞及更ニ
小ナル細胞ノ列ヲ
スヨリ成ル



A
第三期ニ於
ケル象牙質
髓

第五拾一圖

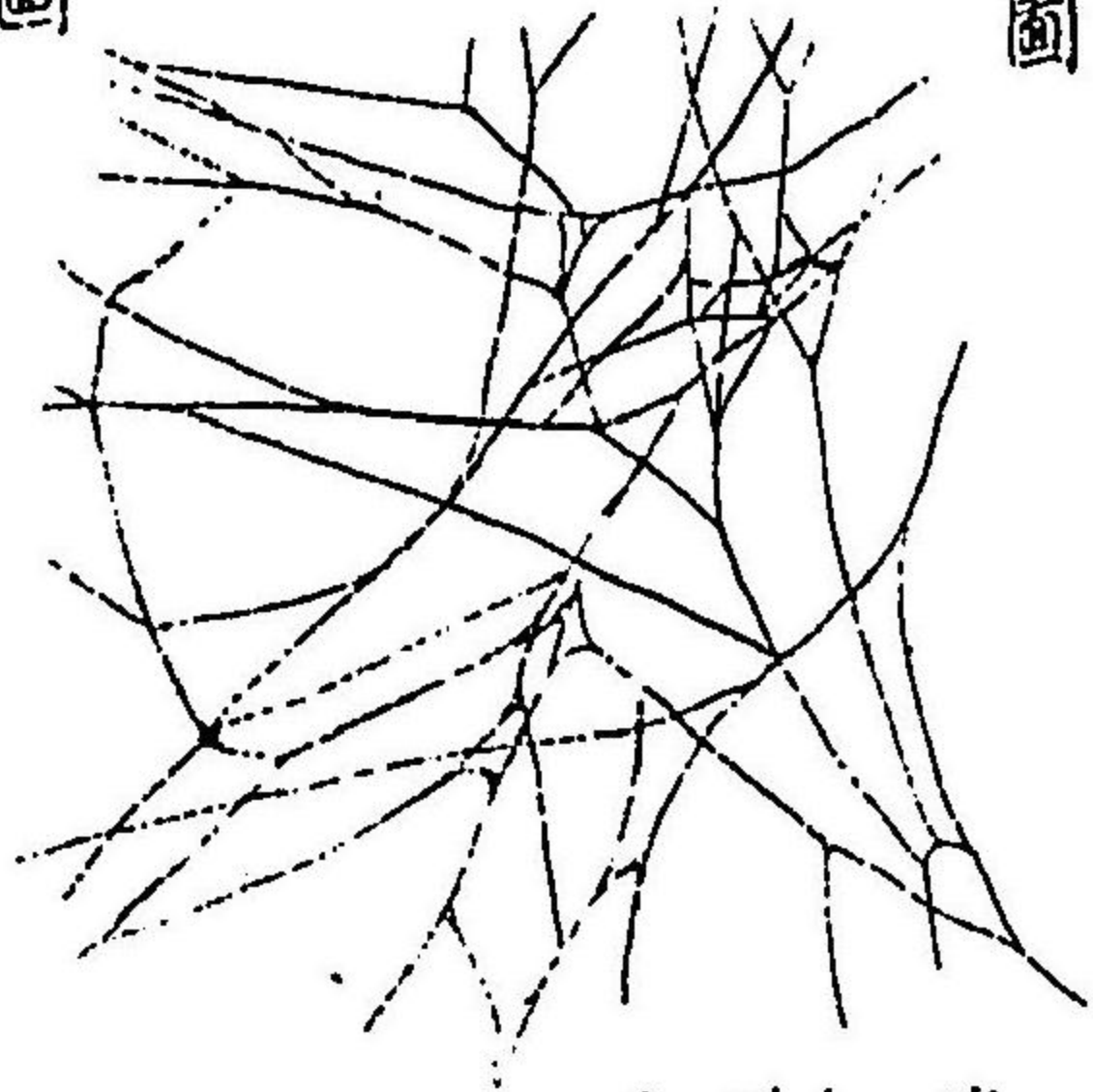


第三期ノ當初ニ於ケル
象牙質髓
細胞ハ線狀ニ排列シ
A. ハ二線ヲ為セル細
胞カ一線ノ排列トナ
リタルモノナリ

細胞ハ聚合シ其内部ニアル
窩孔ハ互ニ相連續ス然ラ
ザレハ髓ノ象牙質ニ變ス
ルニ先タチ互ニ相接近ス
ヘシ

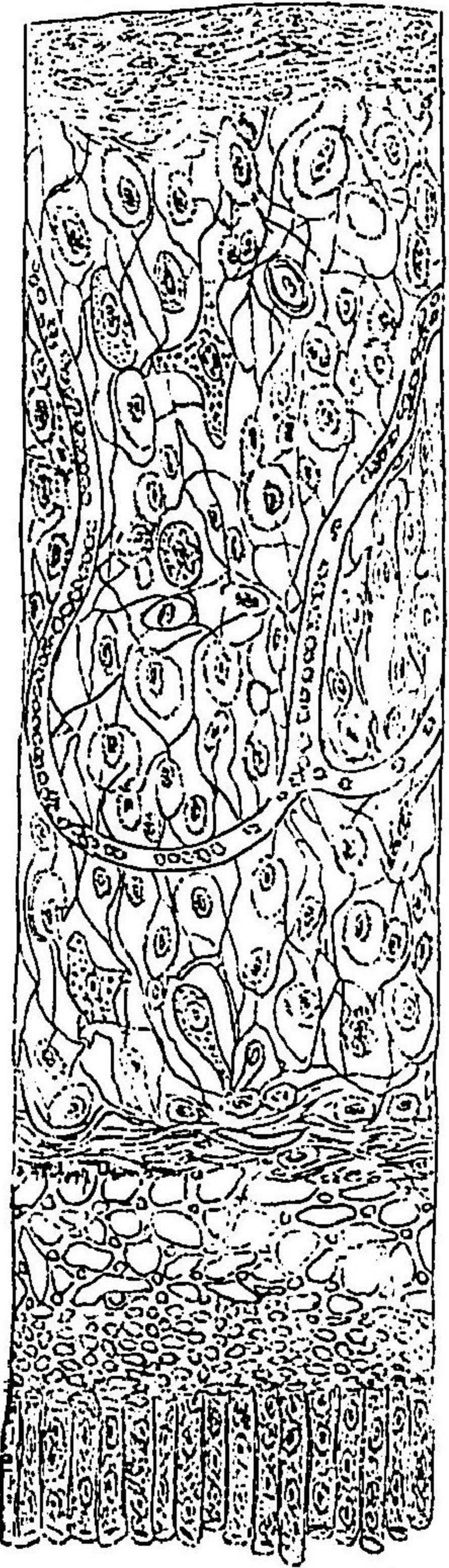
A. 二線ヲナセル細胞カ一線
ノ排列トナルノ状及象牙
質管ノ分派ノ發育スル
模様ヲ示ス

第五拾三圖



漿液膜齒槽組織ノ黃纖維素
醋酸ヲ以テ家兔ヨリ得タルモノニシテ
其三百倍ヲ示ス

第五拾四圖

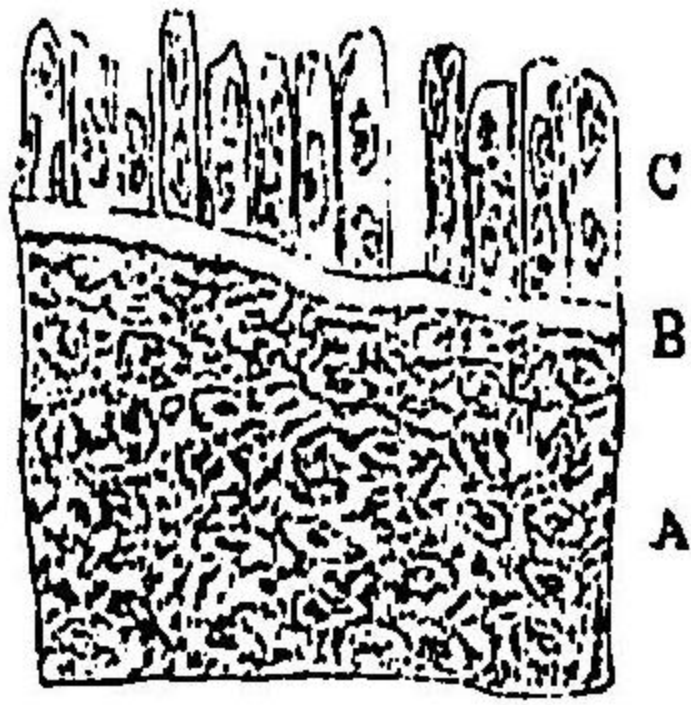


珐瑯質髓ノ縦断面ニシテ其成ニノ
種々トル時期ヲ示ス

C. 網狀組織ヨリ星狀組織ヘノ變化
D. 柱狀組織
E. 星狀組織ヨリ變化セル基礎膜

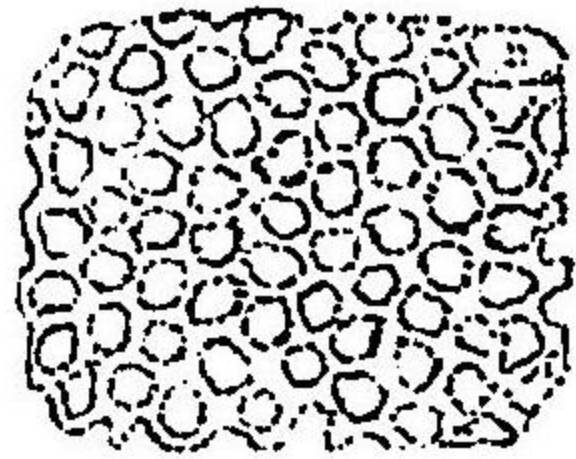
A. 珐瑯質髓開
合囊ノ被覆
板細胞液及
纖維組織ヨリ
形成セラレタ
ル髓ノ網狀体
B. 尿管
C. 星狀組織

第五十五圖



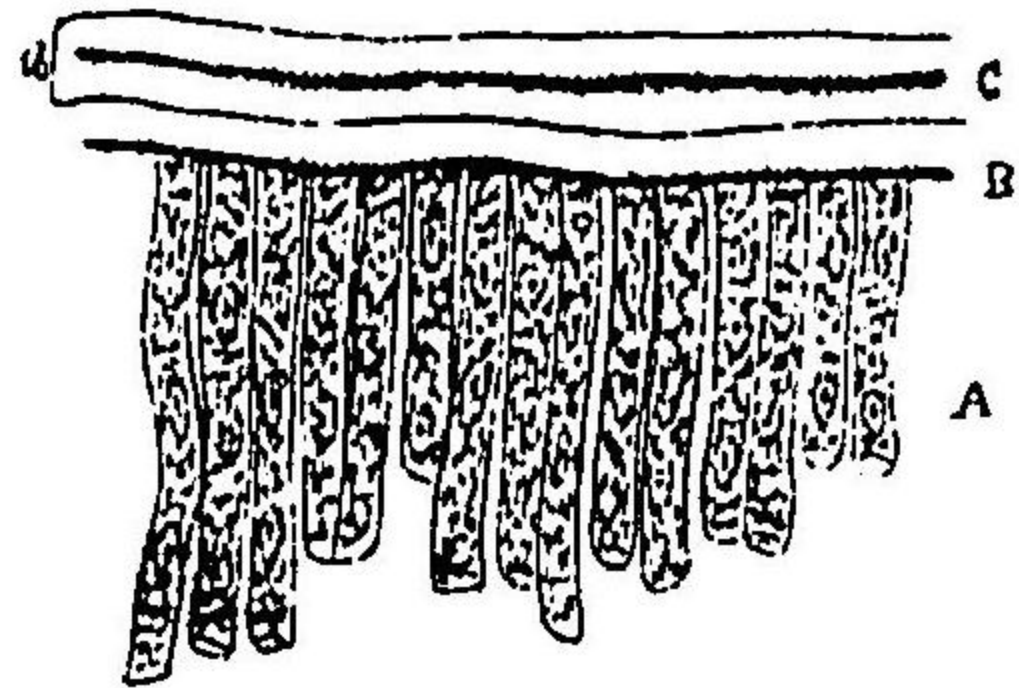
化骨作用ノ起始前ニ於ケル珐瑯質髓及ヒ
象牙質髓ノ切斷面
C. A. 象牙質髓 B. 象牙質髓ノ外膜
C. 發育ノ末期ニ於ケル珐瑯質髓

第五十六圖



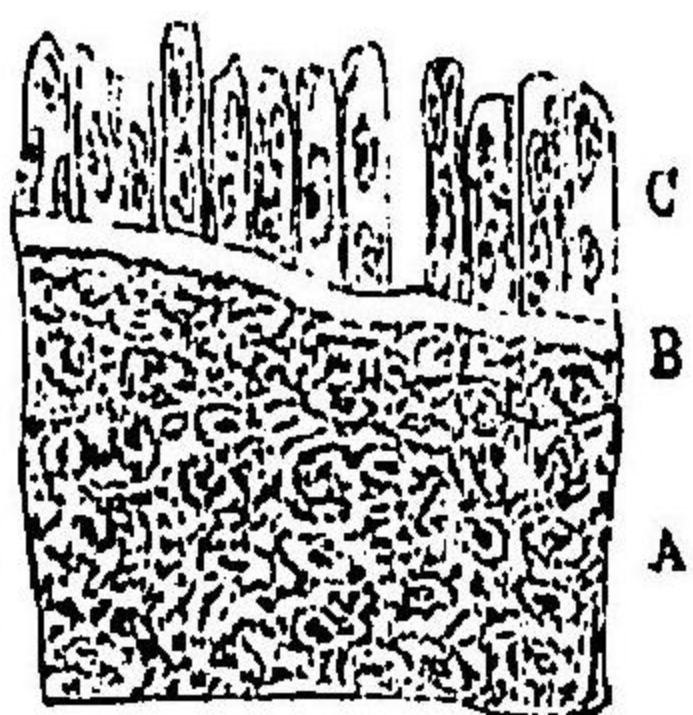
珐瑯質髓ノ基礎膜

第五十七圖



完成シタル珐瑯質髓ノ縱斷面
A. 圓柱組織 B. 基礎膜
C. 基礎膜外ニシテ齒囊表皮中ニ
於ケル脉管層
d. 齒囊ノ表皮(脉管ハ此内ニ分枝ス)

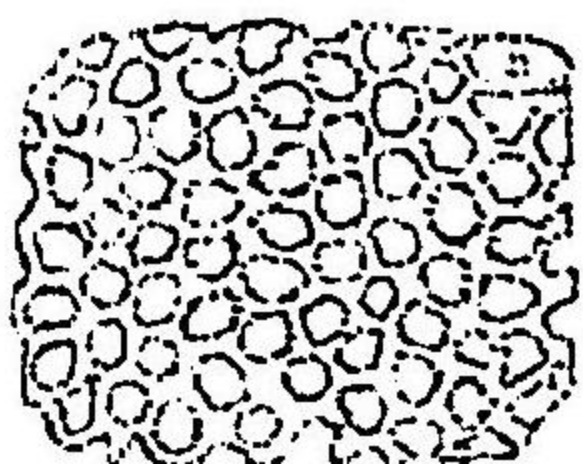
第五十五圖



化骨作用ノ起始前ニ於ケル珐瑯質髓及ヒ
象牙質髓ノ切斷面

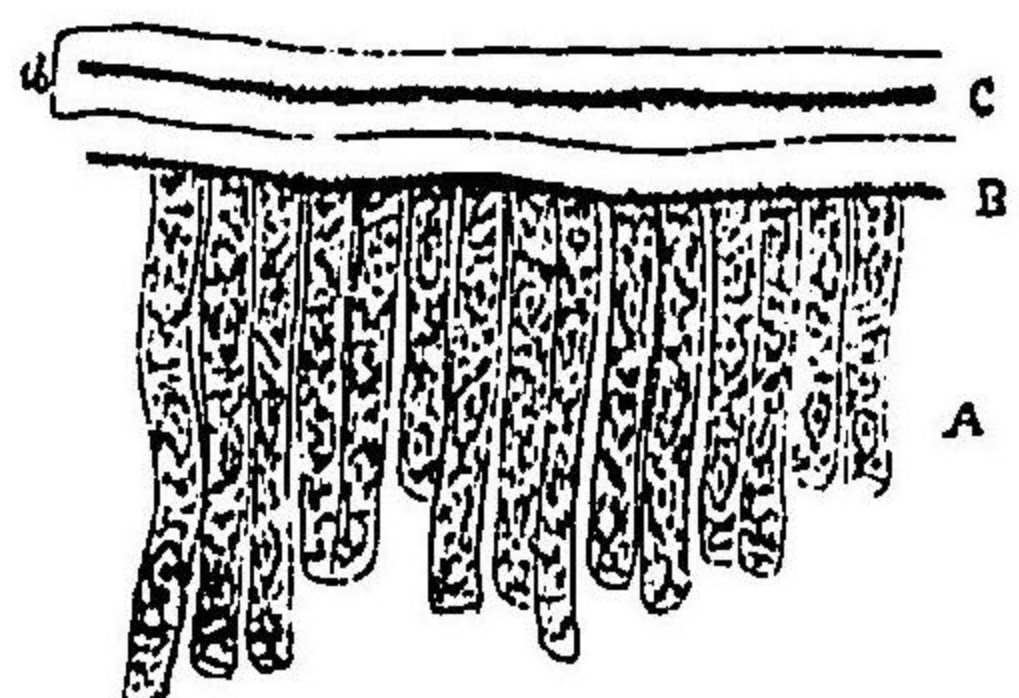
C. A. 象牙質髓 B. 象牙質髓ノ外膜
C. 發育ノ末期ニ於ケル珐瑯質髓

第五十六圖



珐瑯質髓ノ基礎膜

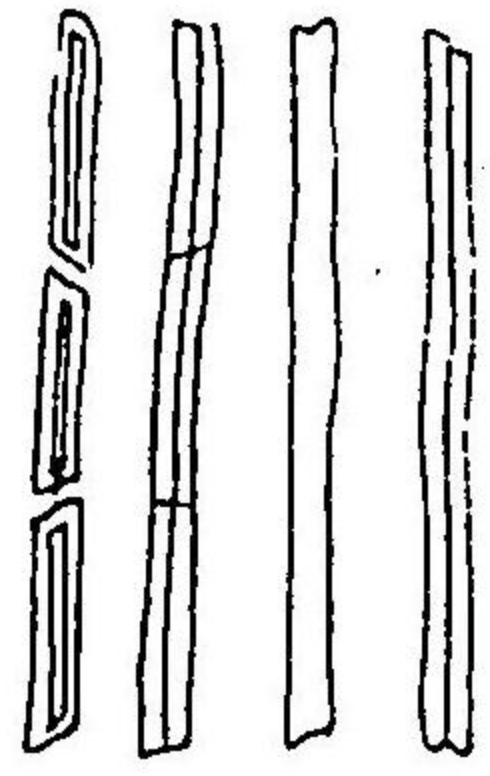
第五十七圖



完成シタル珐瑯質髓ノ縱斷面

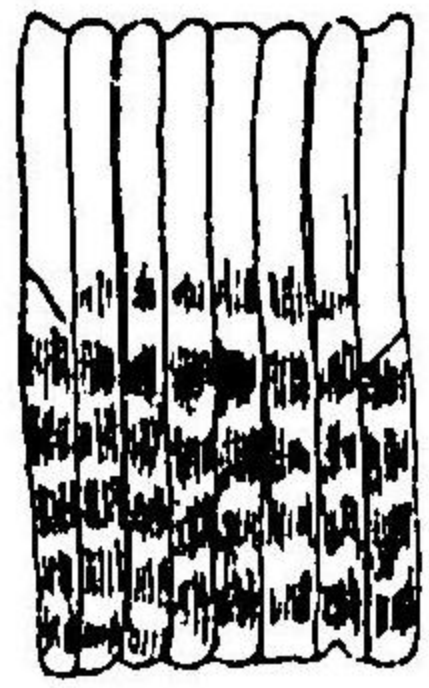
C. A. 圓柱組織 B. 基礎膜
C. 基礎膜外ニシテ齒囊表皮中ニ
於ケル脈管層
d. 齒囊ノ表皮(脈管ハ此内ニ分枝ス)

第五十八圖



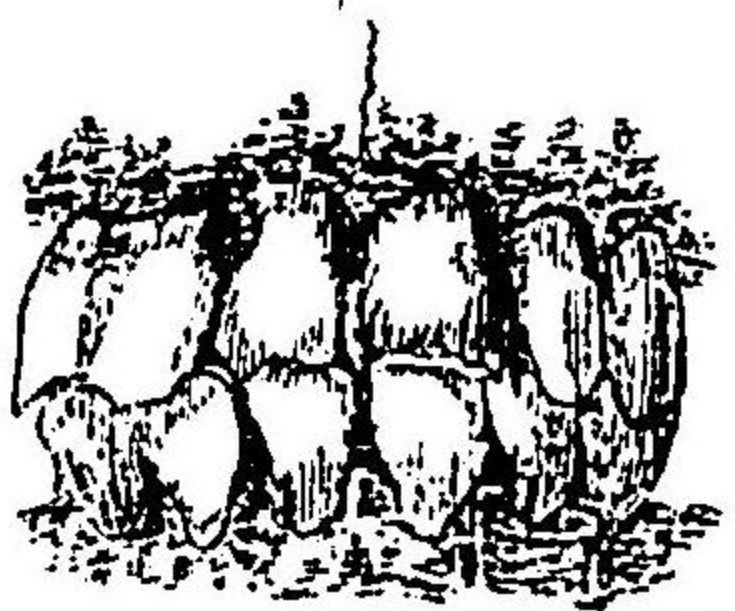
圓柱細胞ヨリ發育シツ、アル
珐瑯質纖維

第五十九圖



新成珐瑯質ニシテ細線ニ依リ
標示セラル

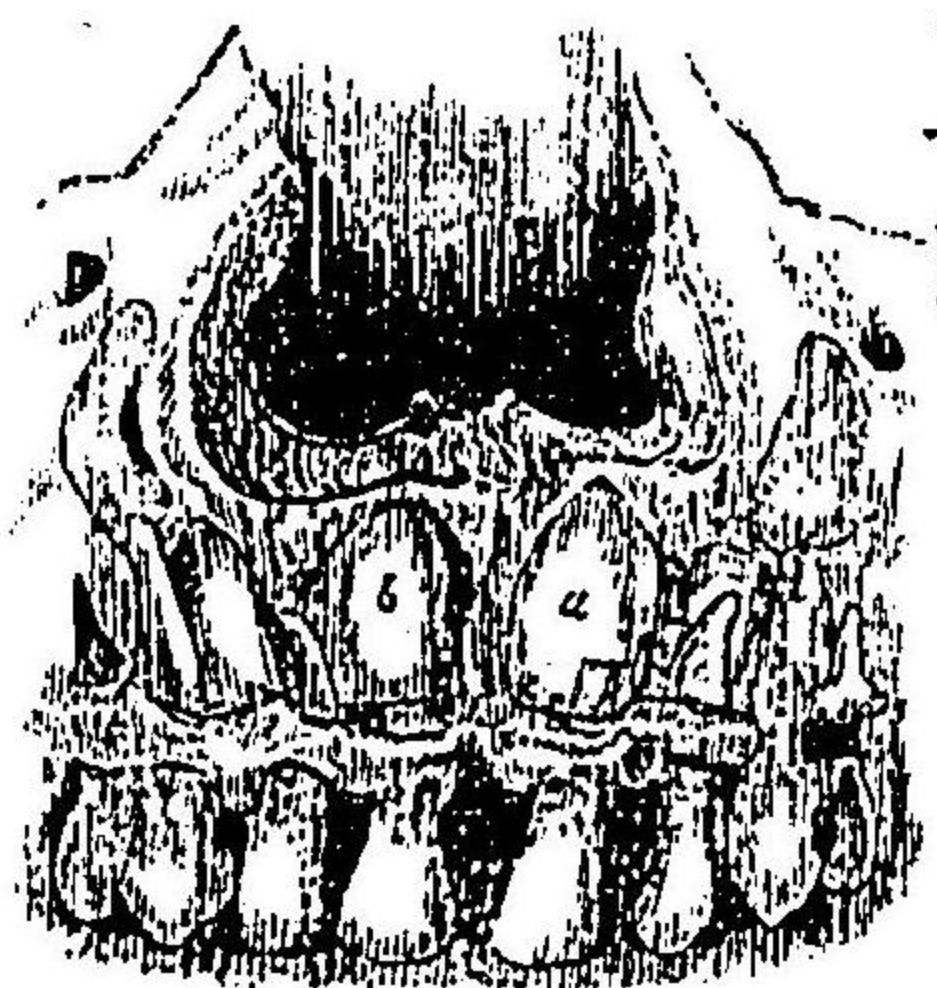
第六十圖



上顎中央前齒

閉口スル場合ニ於テ其切縁ハ内方ニ傾キ下顎齒ノ後方ニ在ルモノ

第六十一圖

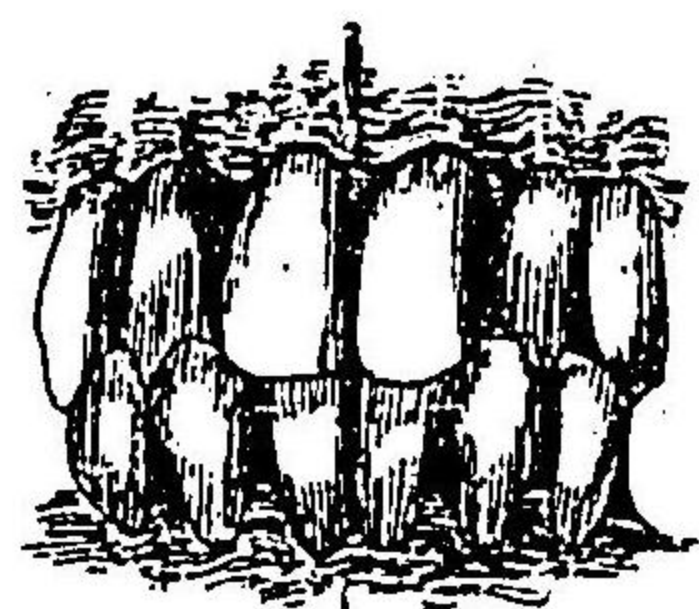


乳齒及齒根發育前ニ於ケル永久齒

a. 正當ノ位置ニ於ケル左方永久中央前齒ニシテ乳中央前齒及側前齒ノ根ノ後部ニ在ルモノ
 b. 右方永久中央前齒ニシテ其外角ハ乳側前齒齒根ノ後部ニ在ルニ其中心縁ハ乳中央前齒齒根ノ前部ニ在ルモノ
 ナリ此場合ニ於テハ乳中央前齒齒根ニシテ速カニ吸收セラレ、ニアラサレハ之ニ繼出スル永久中央前齒ノ中心縁ハ前方ニ突出シテ萌生スベシ

圖二十六第

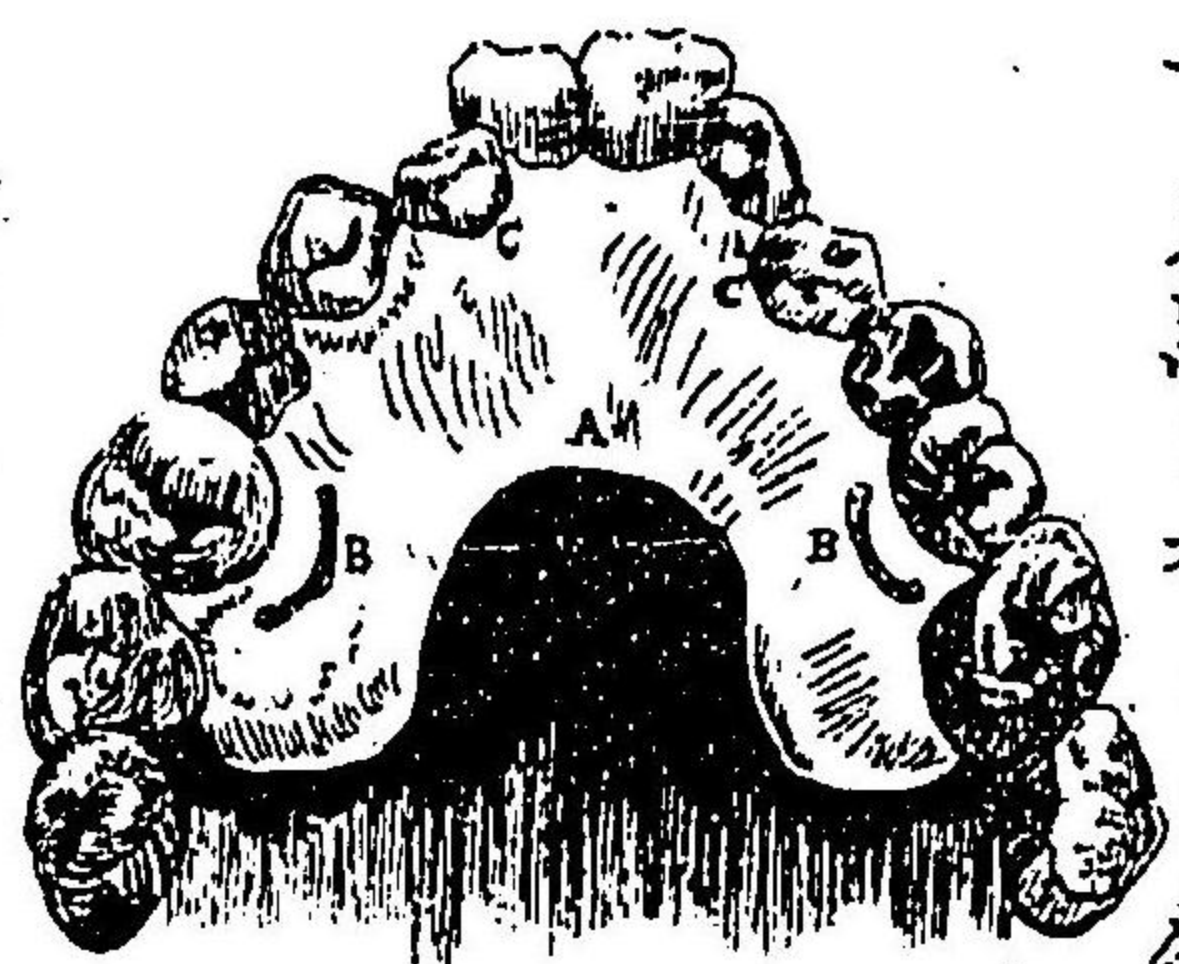
上顎側前齒



其切縁ハ内方ニ傾キ
下顎全名齒ノ後方ニ
密接ス

圖三十六第

不正齒ヲ治センカ為ノ
一定點ヲ有スル床



A. 口蓋面及ヒ齒頸ニ適切セル象牙
製ノ床
BB. 壓力ヲ加フルニ當リ床ヲ動搖セ
サラシメシメカ為メ床ヲ穿テ齒頸ヲ
圍繞セル紐
CC. 不正齒ニシテ其舌面ト床トノ間ニ
壓縮セル木片若クハ硫化護膜ヲ挿ミ
將サニ前方ニ推出セラレントスルモノ

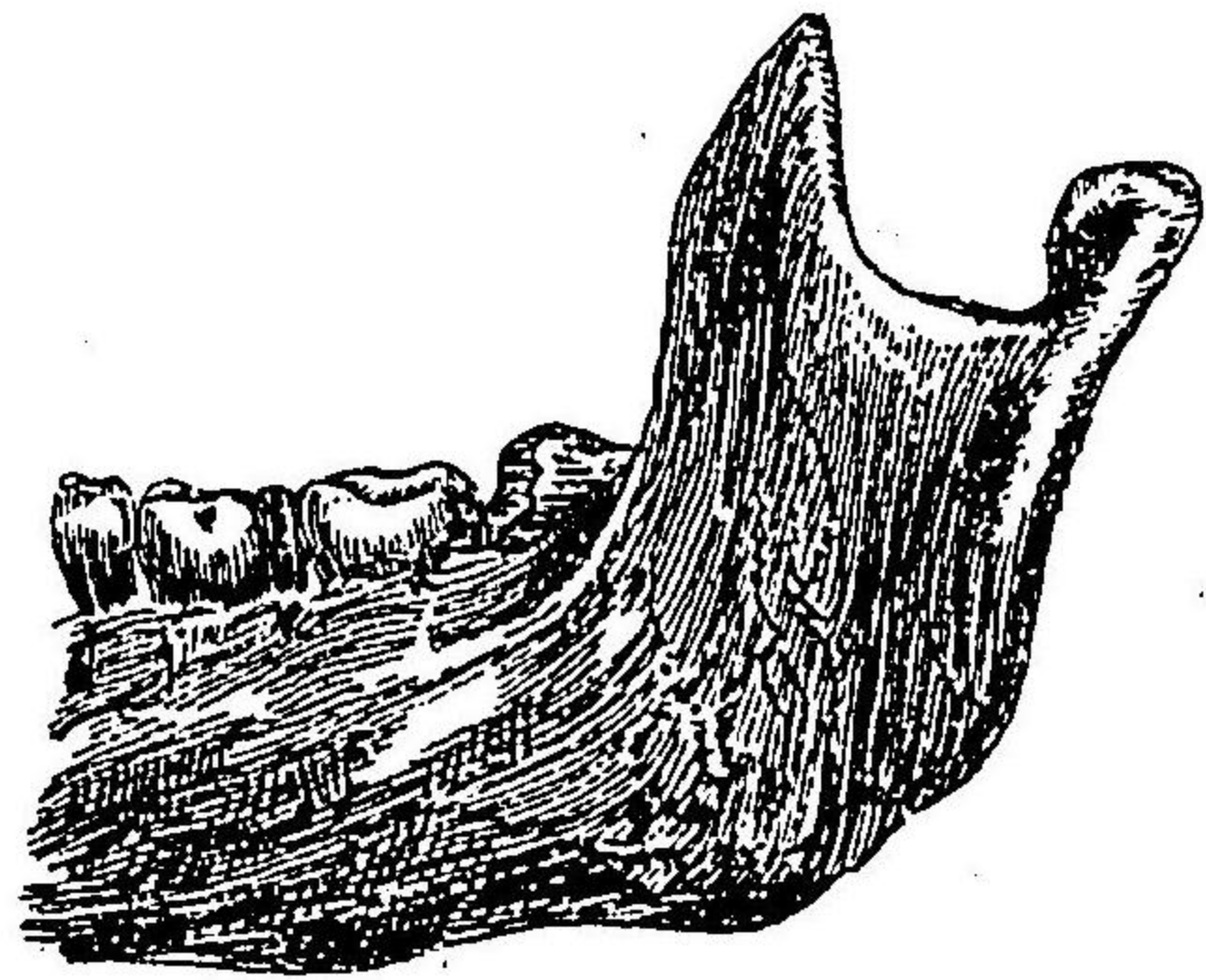
圖四十六第

中央前齒



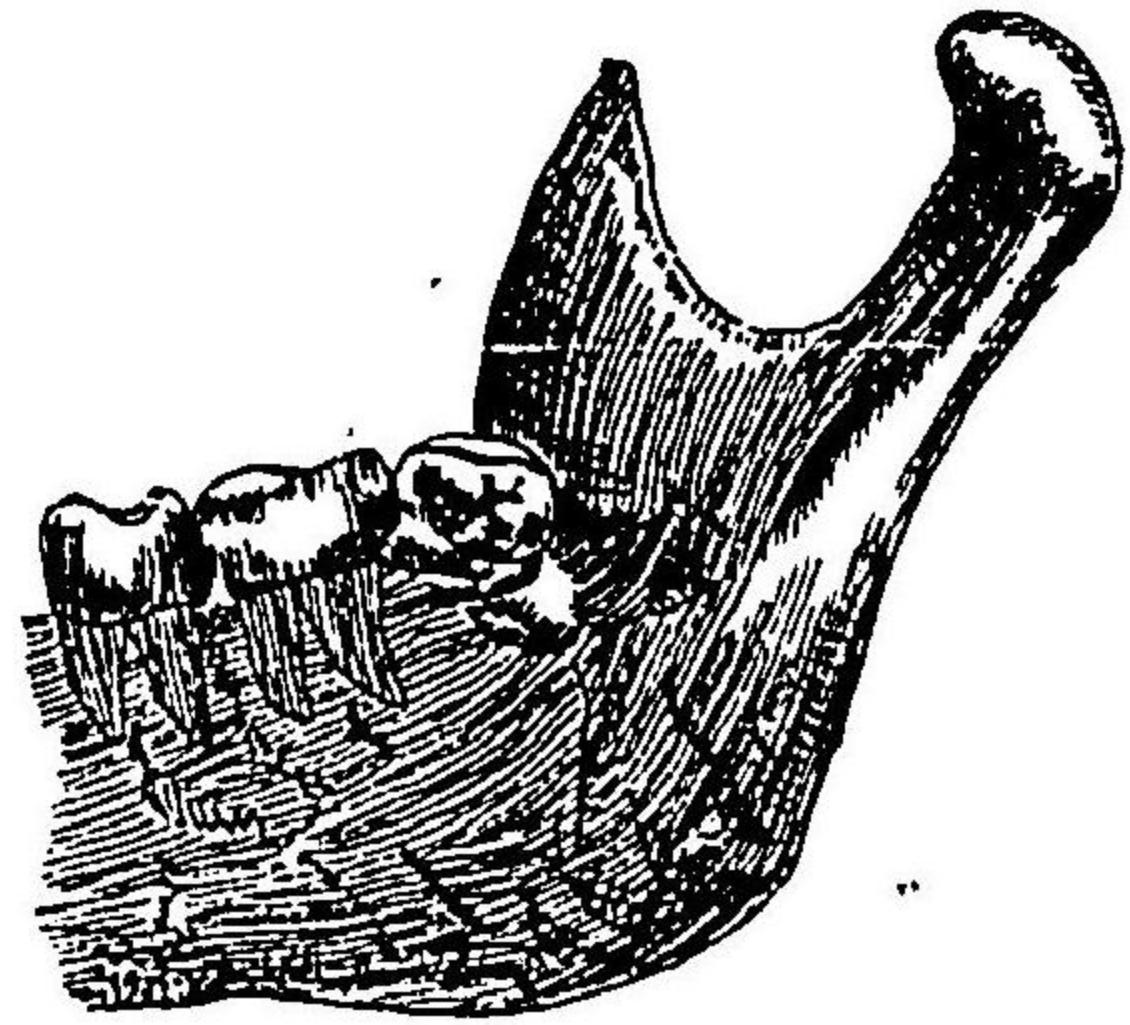
線外ニ萌生シテ他齒ノ
前方上位ニ在ル者其齒
根ハ已ニ完成セルモ短
ク且ツ醜形ナリ

圖五十六第



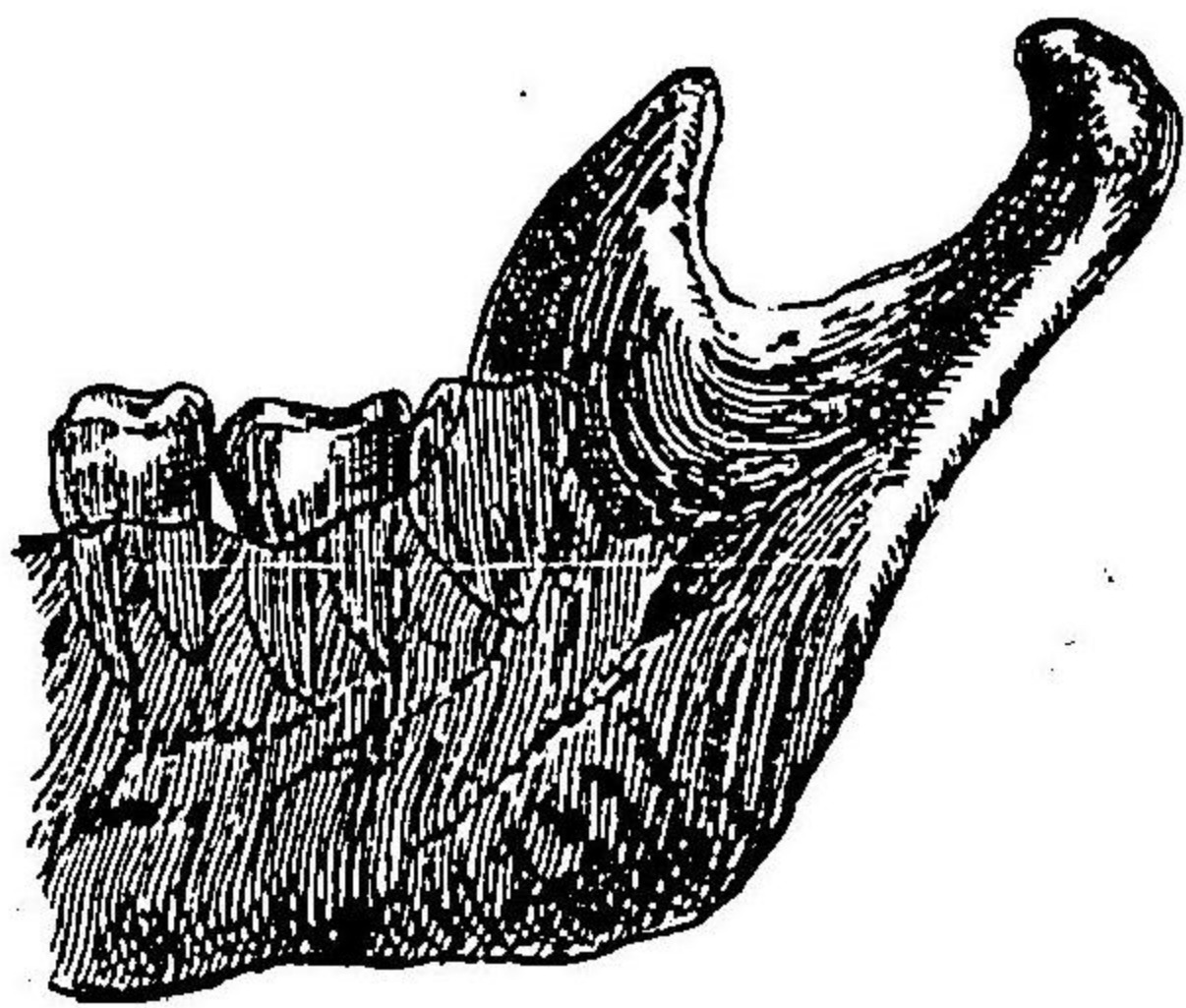
下顎智齒ニシテ其齒冠ハ
前方ニ傾キ第二大臼齒ヲ
壓迫スル者

圖六十六第



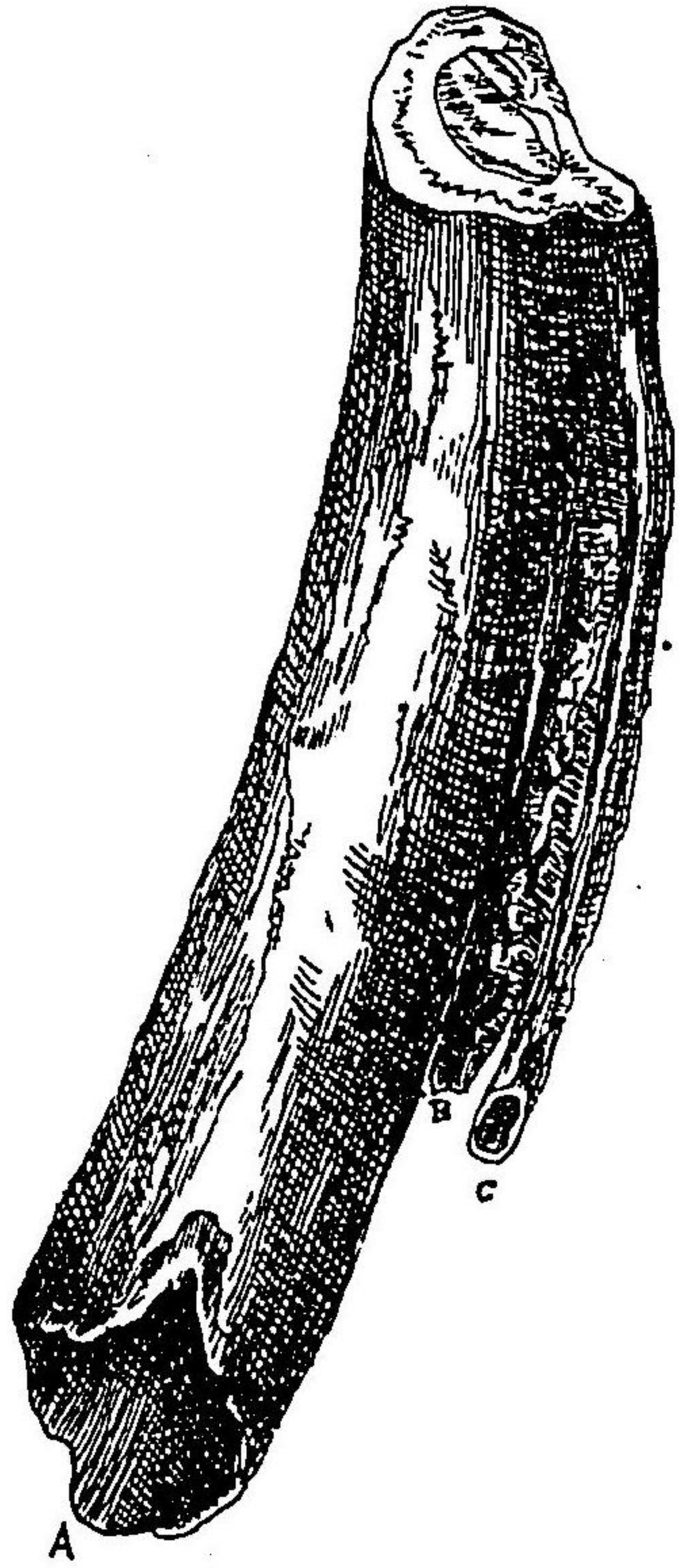
智齒ニシテ其咀嚼面ノ
舌側ニ傾ケル者

圖七十六第



下顎ノ鳥喙突起ニ
發育セル智齒

第六十八圖 象牙



小ナルニ牙ハ其頂點ニ於テ
 相結合シ各自適宜ノ齒槽及
 ヲ齒髓腔ヲ有ス

A. 正牙

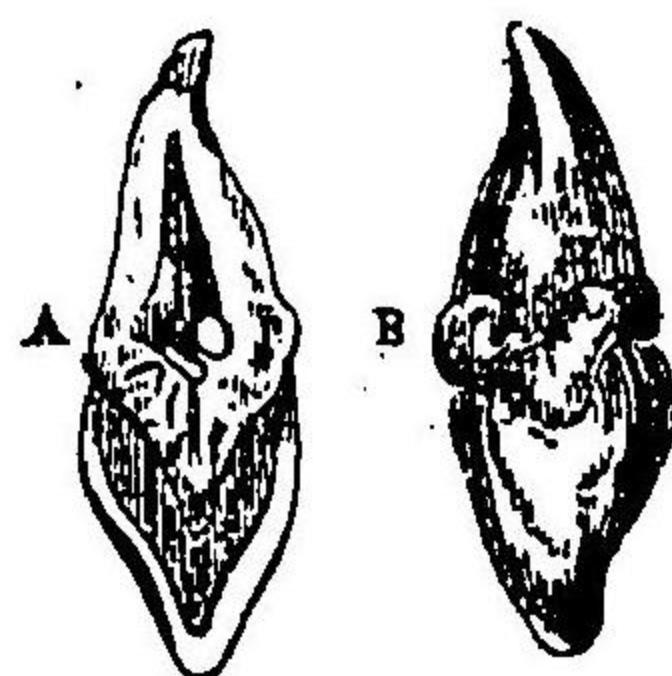
B. 及 C. 不正牙

圖十七第



齒根ノ埋藏ニ左側
上顎骨
A. 年齢ノ為ニ吸收セラ
レタル齒槽線
B. 骨中埋藏ニシタル
齒根

圖一十七第



A. 齒髓腔ノ結合線トシテ示ス處切
断面ナリ但據テ乾於ルル結合線
因テ之ヲ解明ス
B. 全齒外面

圖九十六第

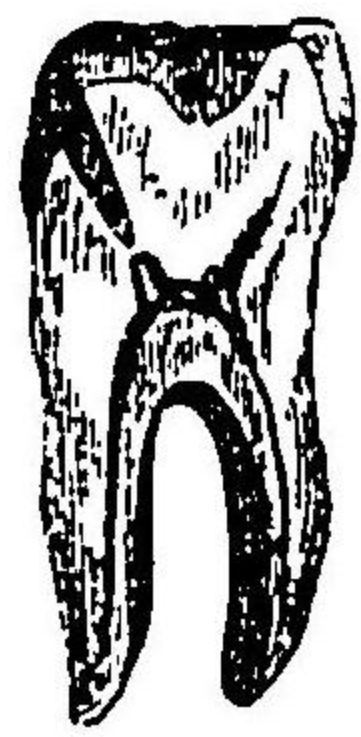


齒根ノ破壊後ニ結合セル中前齒
A. 破壊ニテ後結合セル部位

牽引後結合ニ發育完全ナル大齒

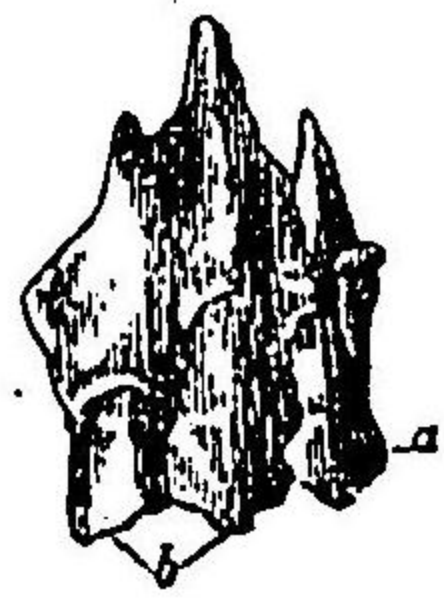
圖三十七第

大臼齒ノ縱断面
齒骨傷ノ進路及其早期ニ於ケル
疾患部ノ形成ヲ示ス

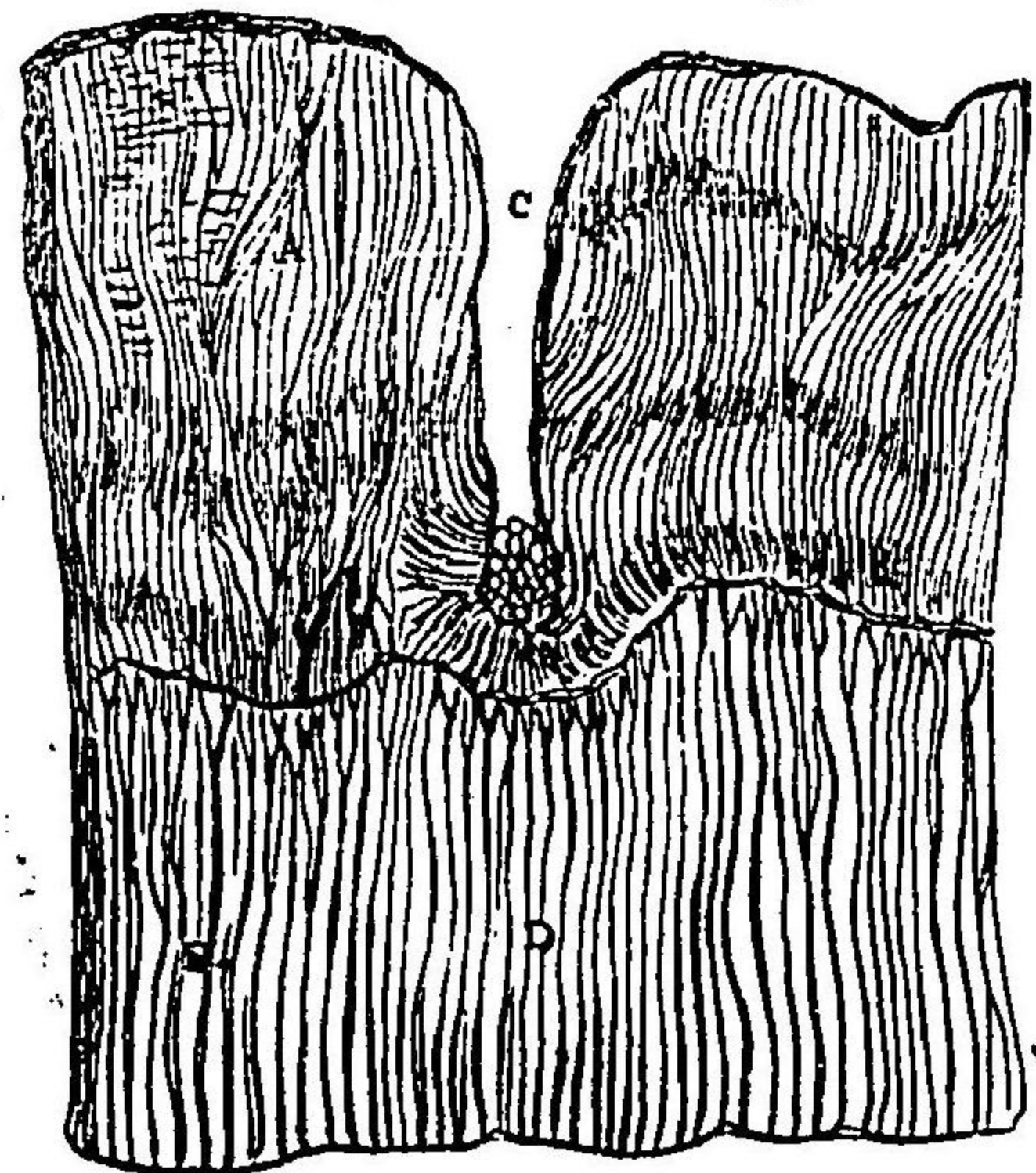


圖二十七第

側前齒大齒(B)及小臼齒(A)
ヲ有ス上顎左側ノ齒槽
齒鍵ヲ以テ第小臼齒(A)ノ拔去ス
ニ當リ一塊トナリ剥離セルモヤリ



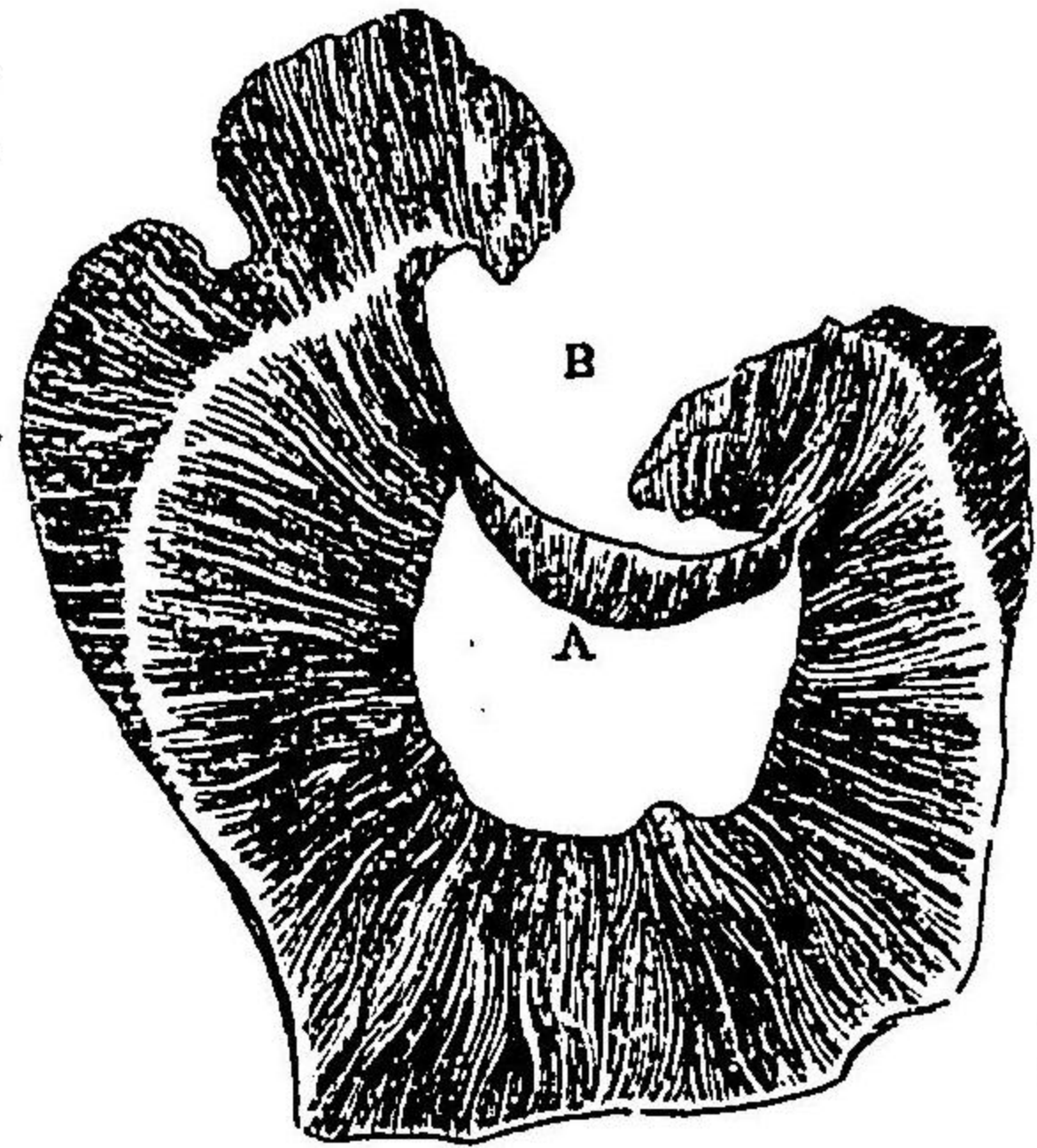
圖四十七第



大臼齒ニ於ケル珐瑯質及ヒ牙質ノ断面
珐瑯質ニ於ケル齒骨傷ノ素因及ヒ牙質ノ凝固ヲ示ス

A. 珐瑯質
B. 牙質
C. 珐瑯質ニ於ケル深
凹ノ裂痕
D. 齒骨傷ニ於ケル部位
ノ周圍ニ於ケル牙質
細管ノ凝固

第七十六圖



大白歯ノ断面

其冠部ノ一部ハ齒

骨傷者ニ依
テ破壊セシ
髓ノ第三牙
質ナル障壁
(A)ニ依
リテ保護
セラル

第七十五圖 第三十三圖ノ見ルヘシ

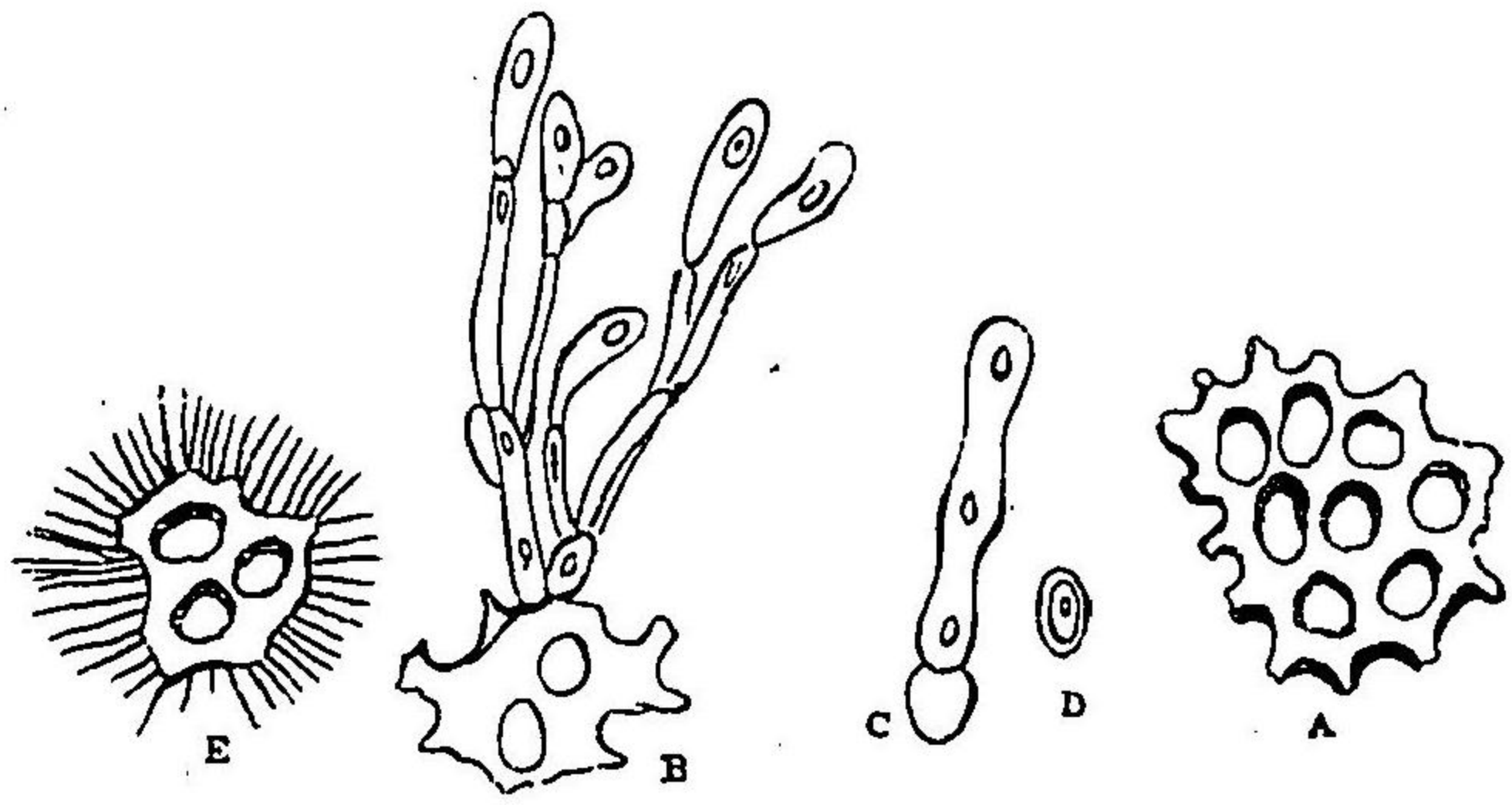


第七十七圖

小白歯ノ縱断面

齒骨傷ハ齒髓腔面マテ
穿通シ而シテ齒髓腔ノ
部ハ第三牙質ニ依リテ保護
セラル

第七十八圖



- 齒骨傷ニ罹リ部ノ分解セル牙質及植物性成長物
 A. 齒骨傷ニ依リ軟化シ牙質細管壁ノ喪失セ
 此牙質
 B. 齒骨傷ニ罹レル牙質ノ分解面ヨリ生スル甘
 水草ニ種
 C. 其早期ニ於ケル甘水草
 D. 甘水草ノ單細胞
 E. 齒骨傷ノ為ニ分解セラレタル牙質ヲ修復
 所ノ植物性成長物

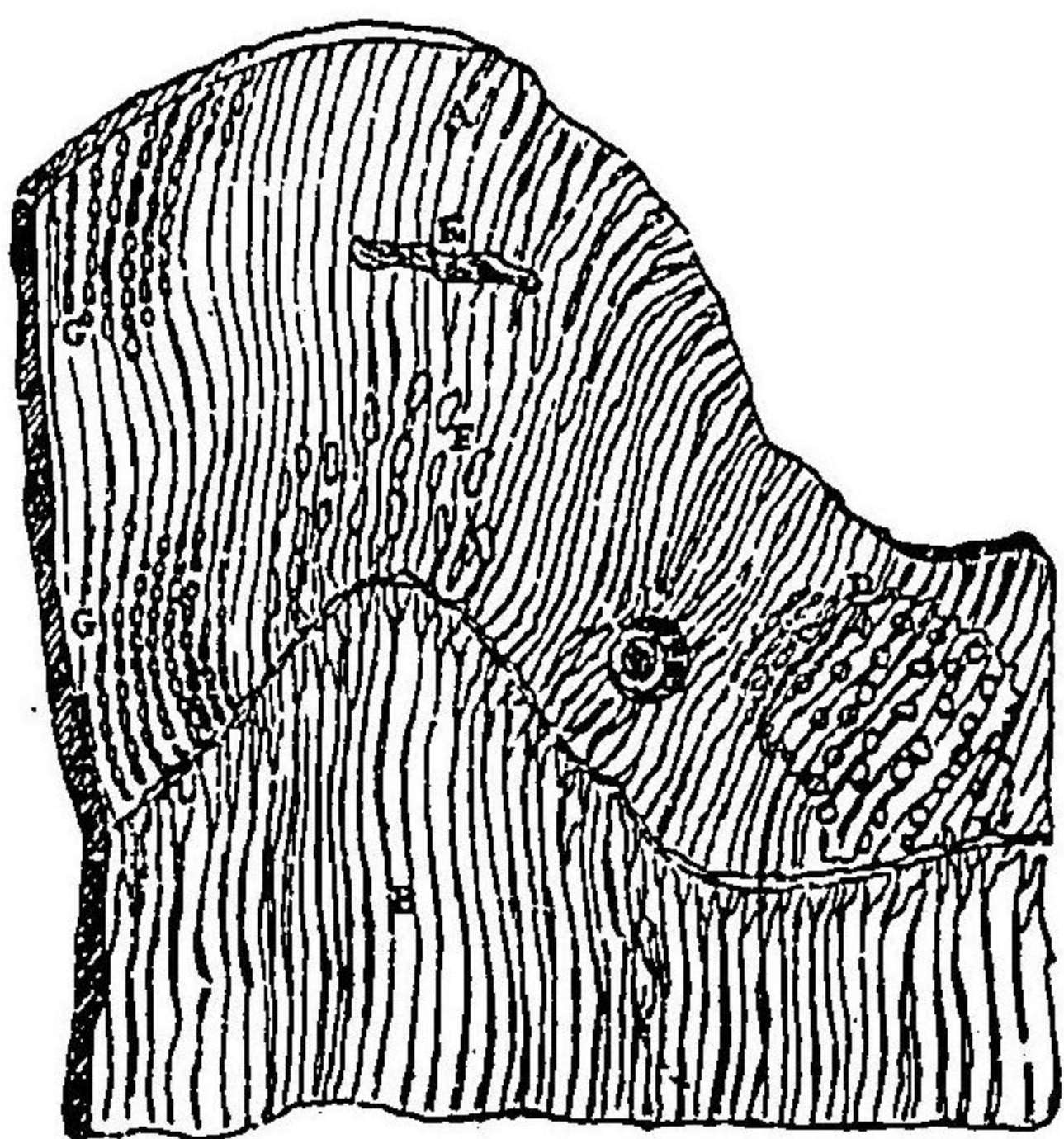
第九十七圖



下顎大白齒
其面組織ハ完全ナラス牙質及珐瑯質ハ殊ニ然リ此齒ハ年齡十五歳ノ稜癩性ノ婦人ヨリ拔去シタルモノニシテ組織ノ發育不完全ナルヲ著ルシ

第八十圖 第七十四圖ヲ見ルヘシ
第八十一圖 第三十五圖ヲ見ルヘシ

第二十八圖



大白齒ノ切断面ニシテ珐瑯質ニ於ケル齒骨傷ノ種々ノ素因ヲ示ス

A. 珐瑯質 B. 牙質

C. 珐瑯質ニ於ケル穿孔

D. 珐瑯質ニ於ケル組織節

狀層

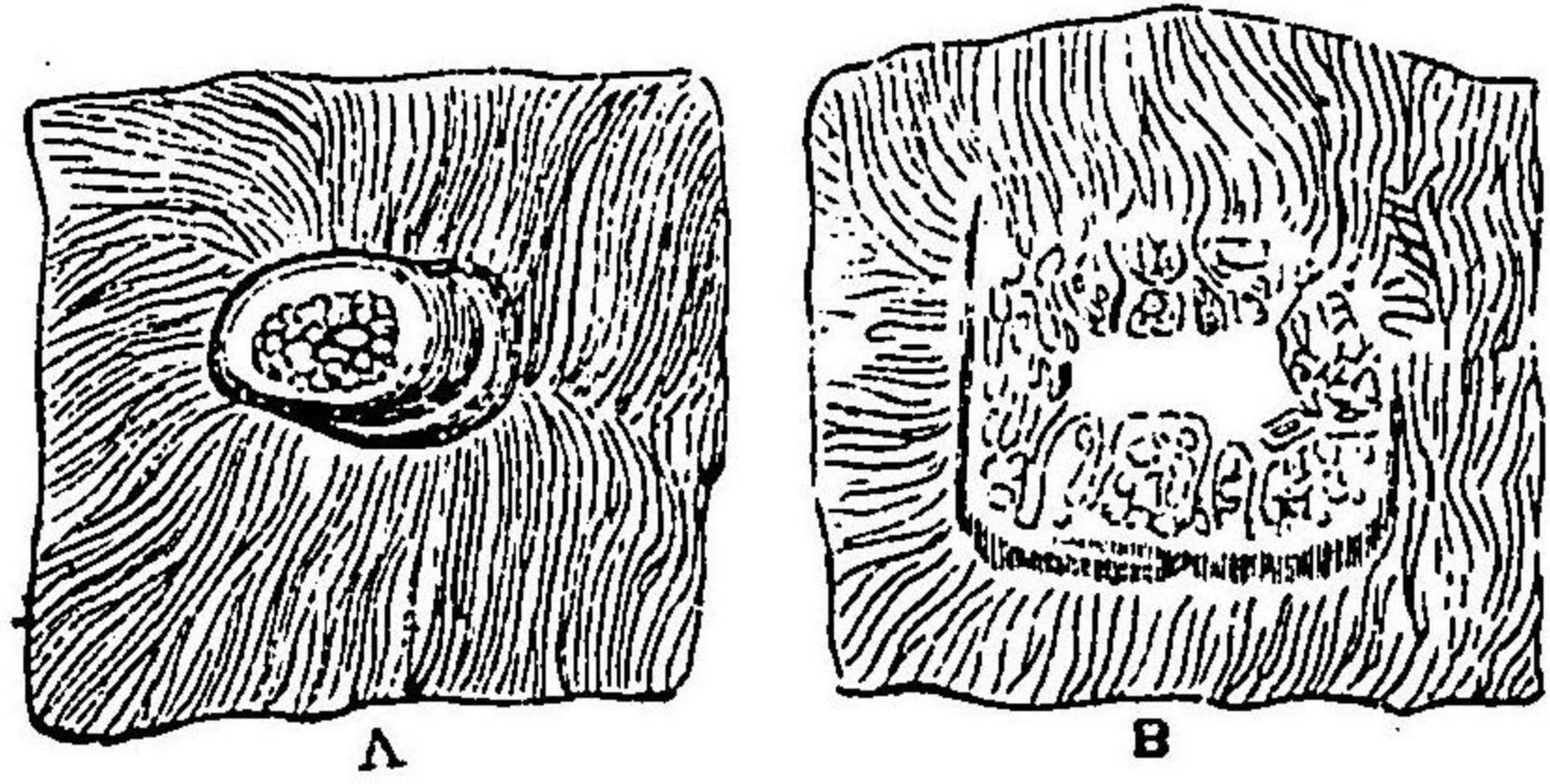
E. 珐瑯質纖維橫斷ニテ

細胞

F. 冠部牙質角点ニ接ス珐瑯質ノ細胞

G. 珐瑯質纖維間ニ於ケル微細細胞ノ數線

圖三十八第

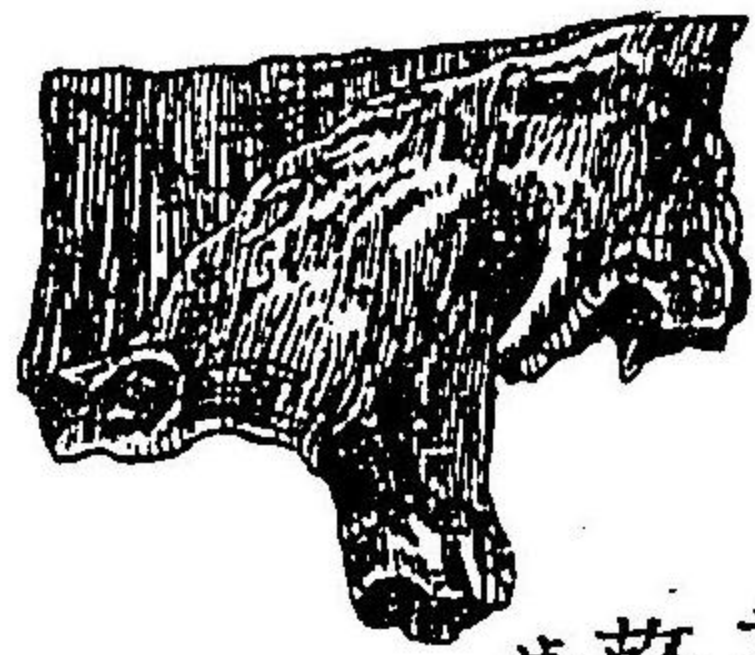


不完全ニ形成セラル珙瑯質ノ断面
 A. 顆粒ヲ包有スル細胞
 ニテ其細胞ヲ珙瑯質
 纖維ヲ放散ス
 B. 顆粒状珙瑯質ニ圍繞
 セラレテ放散スル細胞
 肥ニテ其周圍ニ珙瑯
 質纖維ヲ放散ス

不完全ニ形成セラル珙瑯質ノ断面

第八十四圖第二十六圖ヲ見ルニ

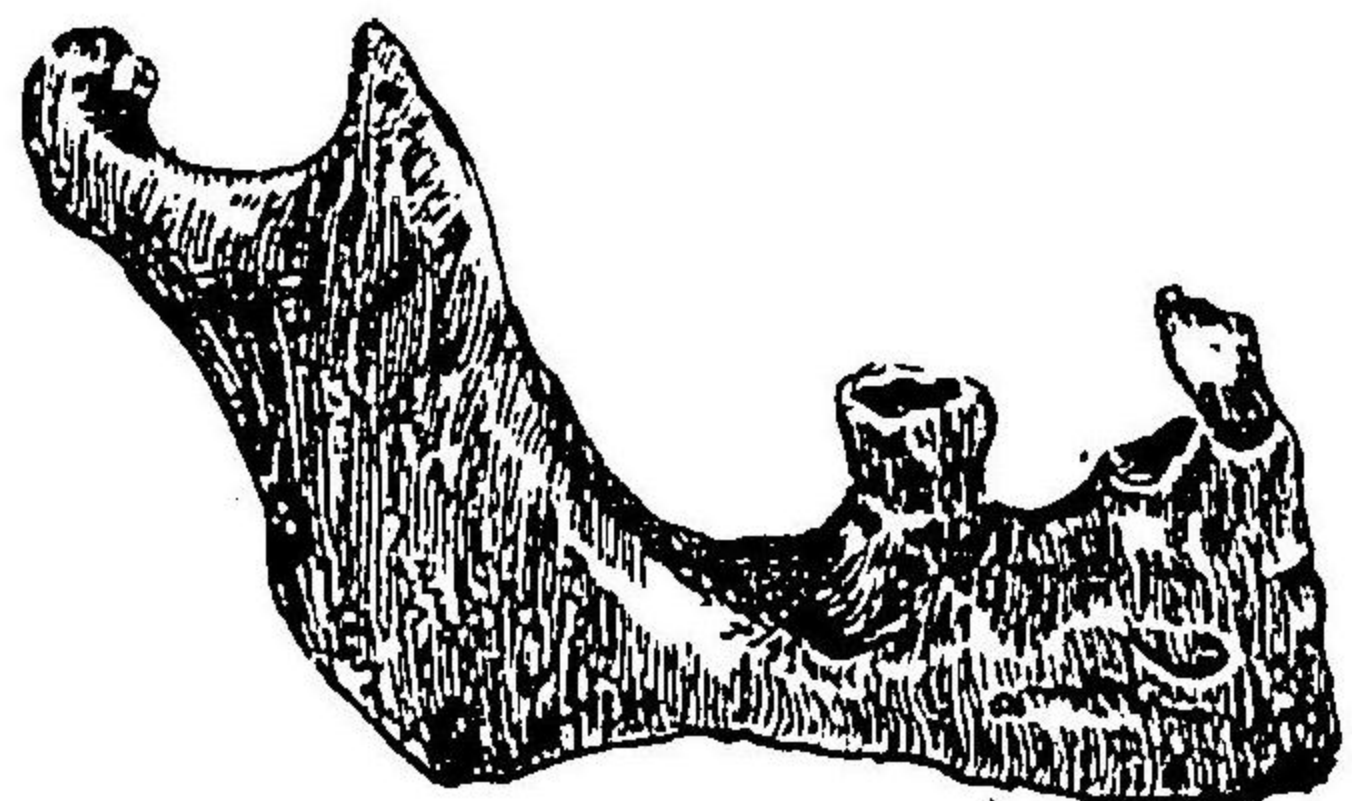
圖五十八第



上顎大臼齒

其内根ハ齒骨疽ニ罹ルカ
 故ニ其根ノ齒齦齒槽及ヒ
 齒根膜ハ吸收セリ

第八十八圖



下顎第二
大臼齒
齒槽ノ吸収シ
後根ニ培生骨
瘤ヲ有スルモ
ノ但齒冠ハ健
全ナリ

第八十七圖



下顎第二
大臼齒

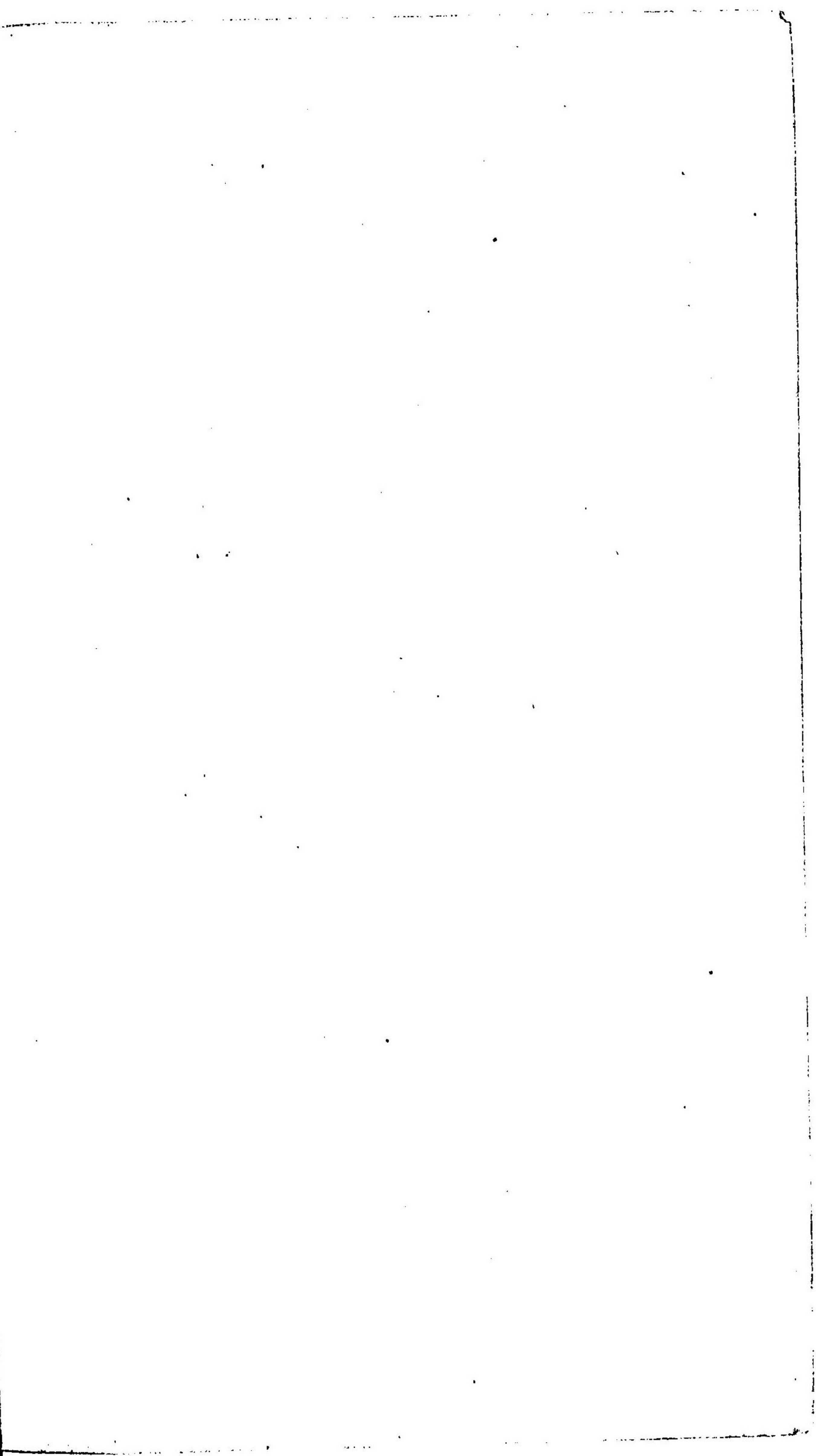
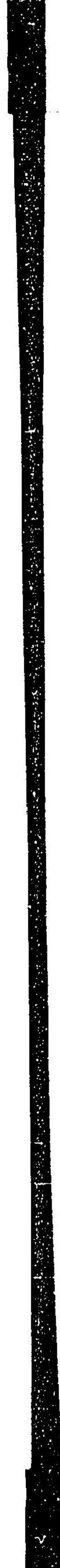
該齒ニ纖維ヲ附與スル所ノ
下顎齒神經ヲ示ス

第八十八圖

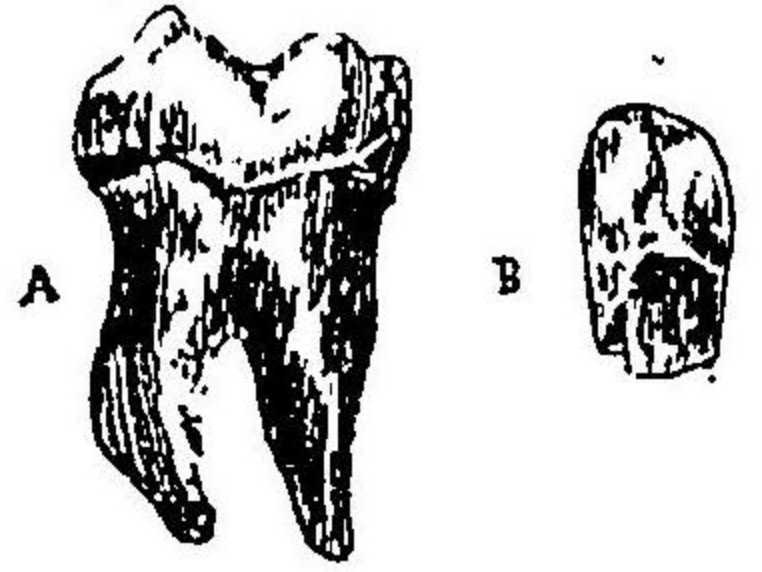


象牙ノ一部

外觀膿腫狀ヲナシ出口ヲ
有セザル象牙質ノ空窩



第八十九圖



A.

B.

齒根カ吸収ノ
為メニ菲薄ト
ナレル下顎大
臼齒
齒根カ吸収セ
ラレタル永久
側前齒

第九十圖



α.

β.

咀嚼ノ為メニ摩耗
セル前齒ノ縱斷面
化骨セル齒
髓ヲ以テ充
塞セラレタ
ル髓腔
點線ハ該齒ノ大サ及其
髓腔ノ元形ヲ示ス

第九十一圖

第七十六圖ヲ
見ルベシ

第九十二圖

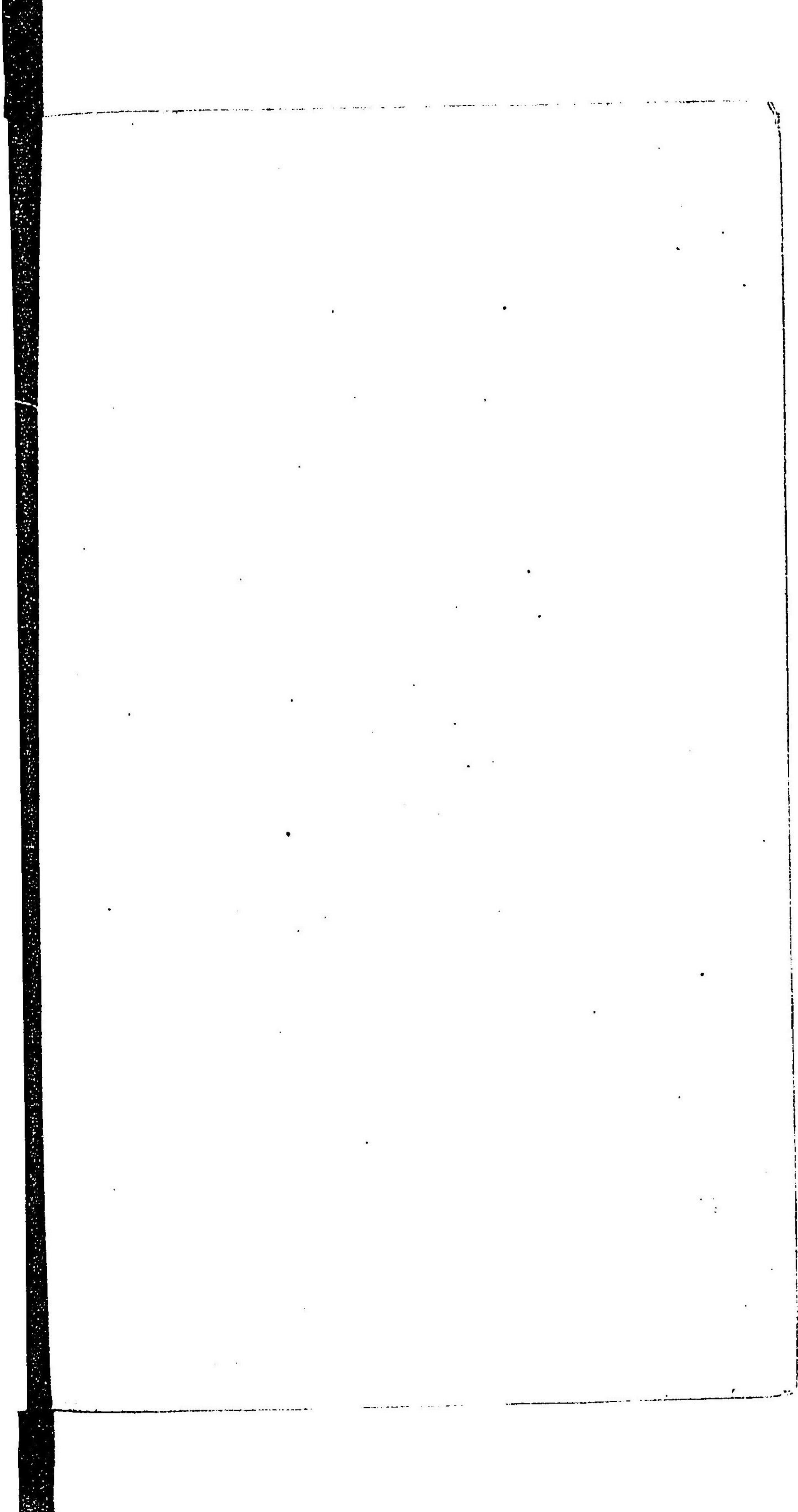
第七十七圖ヲ
見ルベシ

第九十三圖



大臼齒

其髓腔ハ齒骨傷ノ為メニ開通セ
ラルレ氏齒髓ハ破壊ヤズシテ息
肉ノ位置トナレルモノ



第九十四圖

齒槽膿腫初期ノ
標本



齒根末端ニ於ル骨
膜ハ焮衝シテ齒根
ノ骨面ヨリ分離シ
而シテ其間隙ニハ
膿汁ヲ充セリ
齒槽ハ開脈シテ骨膜ヨリ剝脱セル齒
根ヲ顯ハセリ

第九十六圖



齒槽膿腫ニ罹ラズシテ
齒根膜ノ焮衝シ肥厚
シタルモノ
此場合ニ於テ少量ノ
膿汁ハ分泌シ齒根管ヲ
經テ逸出ス而シテ齒根
ハ暴露シテ骨膜ヲ有セ
ズ

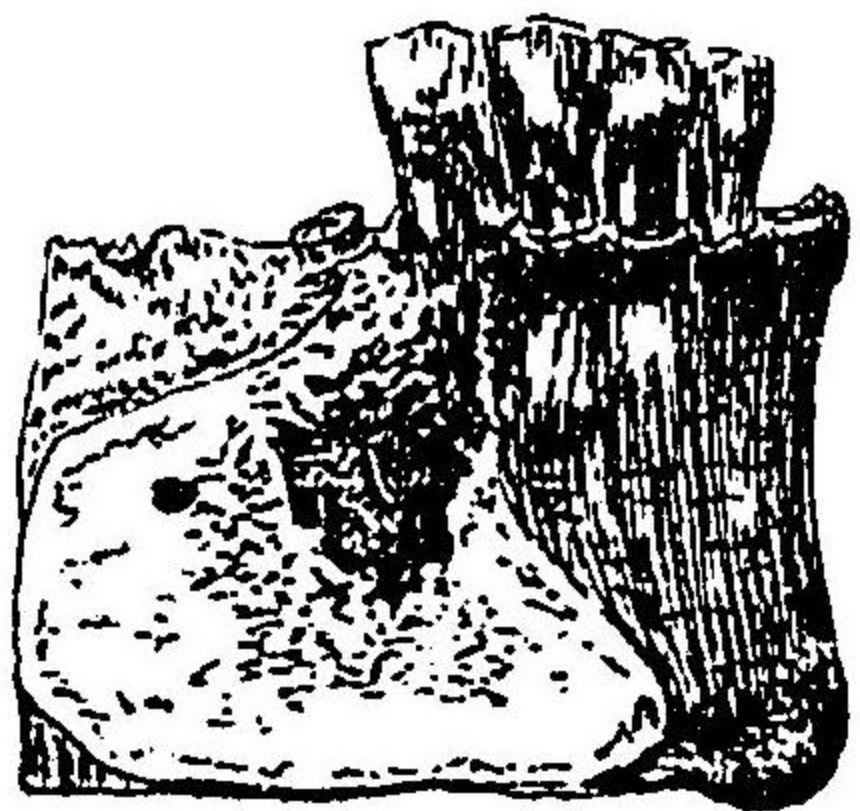
第九十五圖

大臼齒ノ齒根間ニ於ル
齒槽膿腫ノ標本

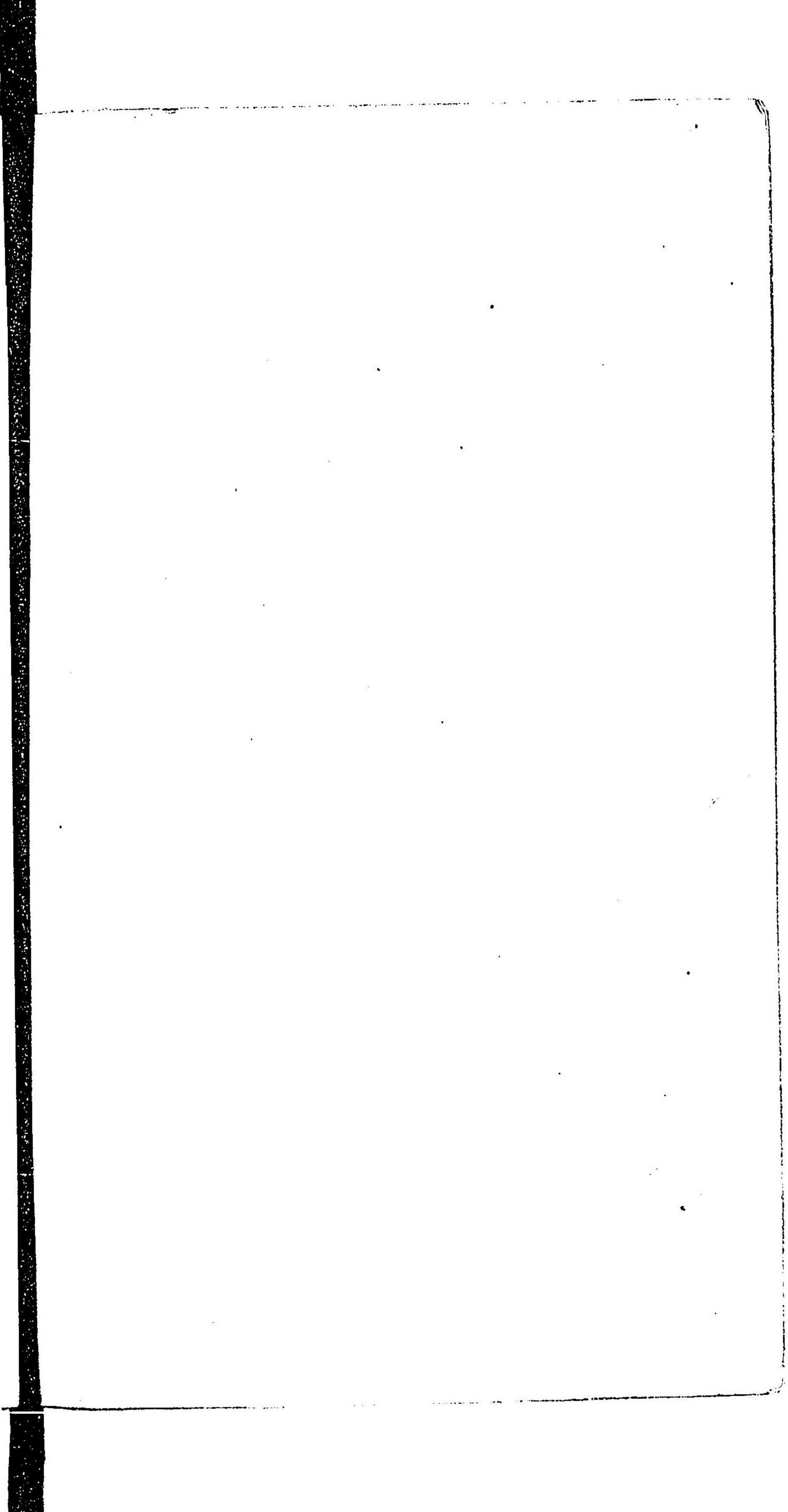


其部位ニ於ル齒ノ一部ハ齒骨疽ニ
罹リ之ヲ抜去シタルニ圖ニ示セルガ
如キ膿腫アルヲ目撃シタリ

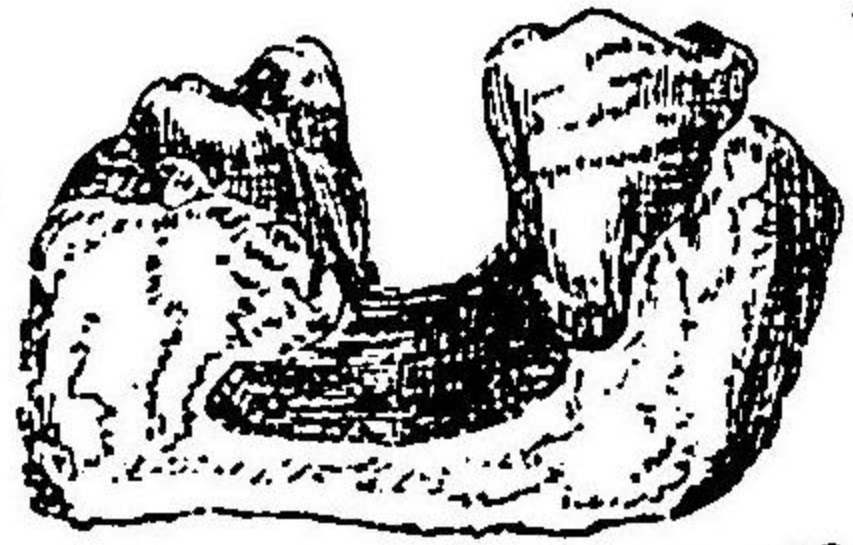
第九十七圖



齒根膜炎ノ為メニ大齒ノ
齒槽ノ擴大セルモノ

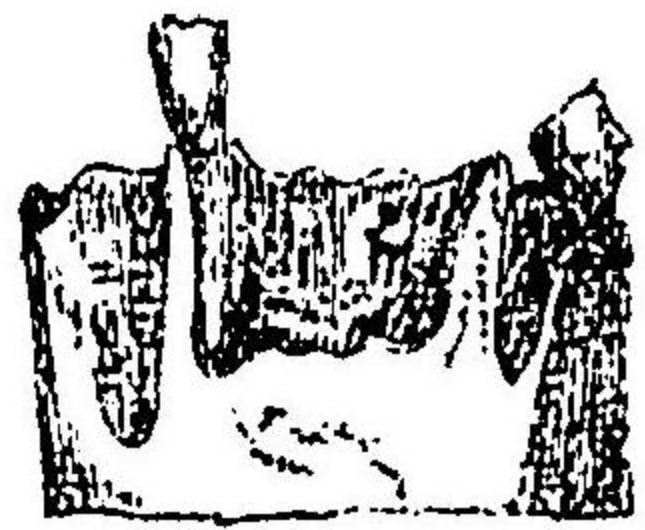


第九十八圖



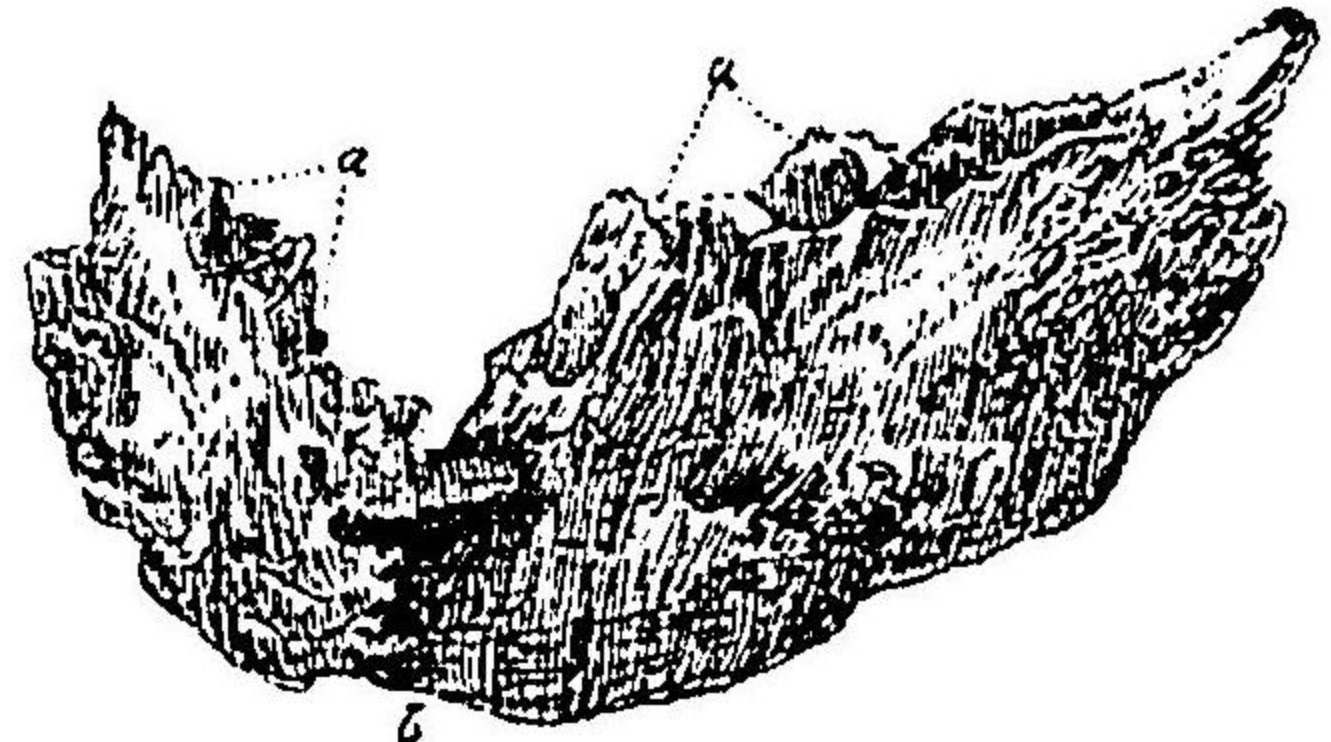
第二大臼齒根ノ骨膜炎ニ依リ
下顎第二大臼齒ト智齒トノ間
ニ於ル齒槽板ノ吸收

第九十九圖

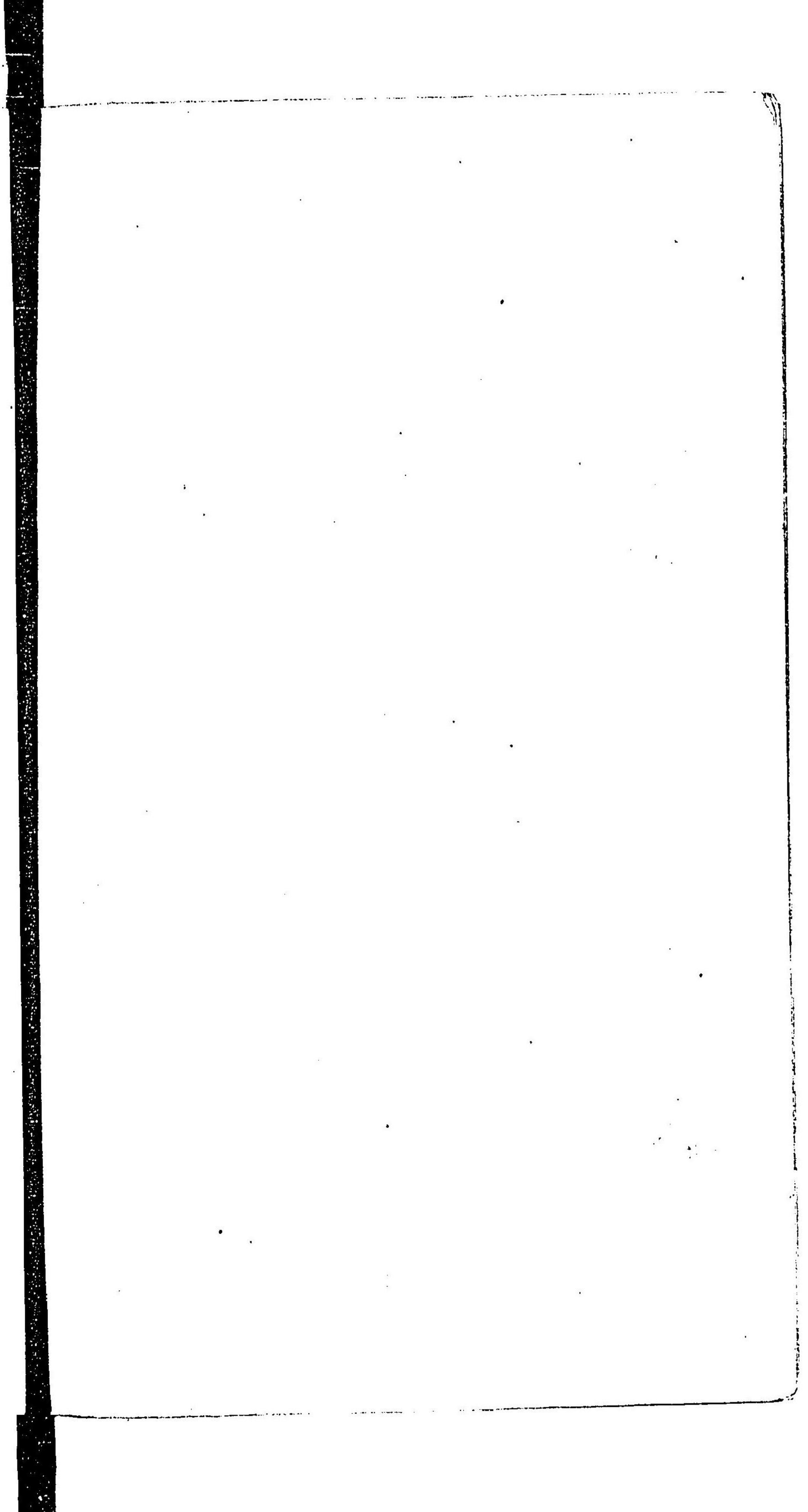


下顎前部ノ切斷面ニシテ
齒槽ノ擴大シ且ツ其中隔
カ慢性齒根膜炎ノ為メニ
朽敗セルノ狀ヲ示ス

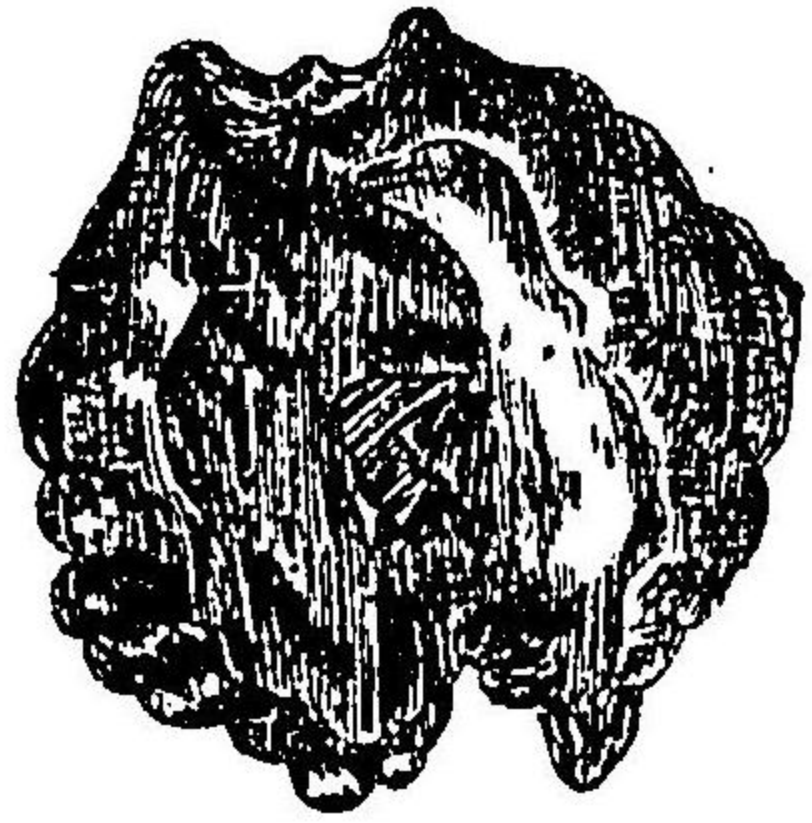
第一百圖



死骨ヲ其上前位ヨリ觀察セル狀体
aa. 左側犬齒ノ齒槽ノ一部ヲ有スル小白
齒ノ齒槽
b 軟骨接合

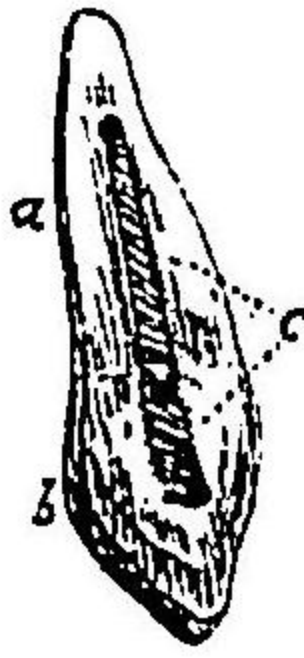


第一百一圖



下顎ヨリ得タル纖維瘤ニシテ
其中心ニハ齒根ヲ包有ス

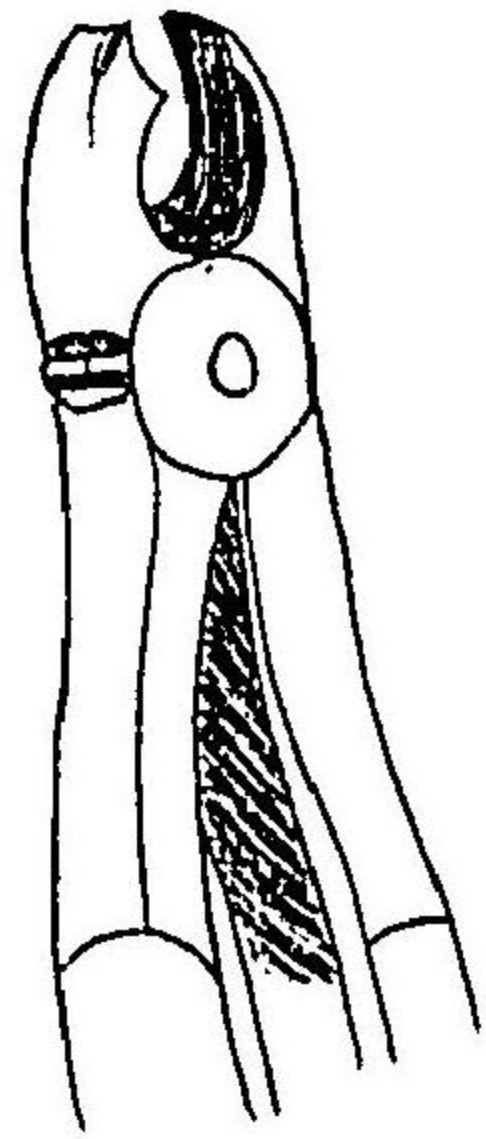
第一百二圖



樞軸齒

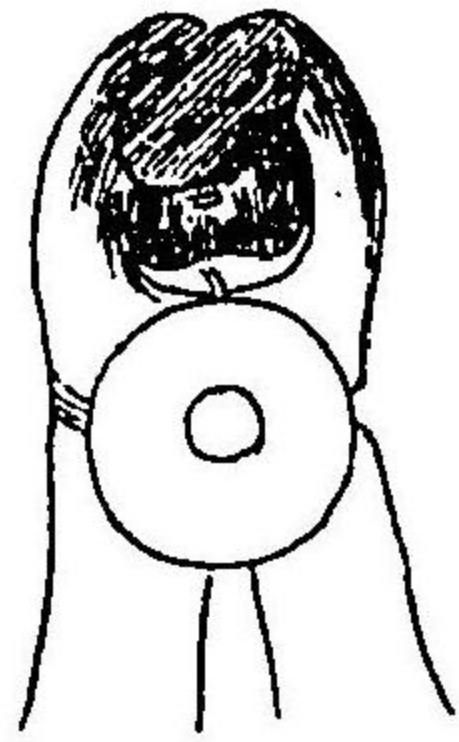
C. G. α.
新齒根
樞軸冠

第一百三圖



上顎右側ノ大白齒ヲ拔去スルニ
用フル鉗子

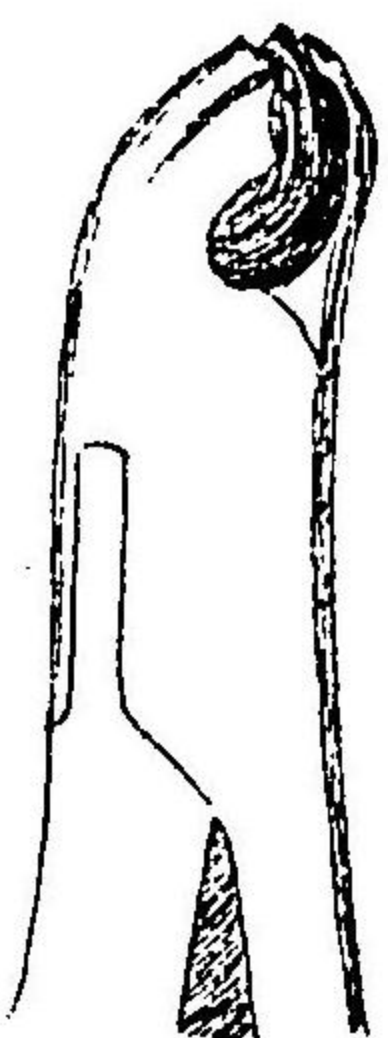
第一百四圖



同上ノ鉗子ニシテ上顎大白齒ノ
齒頭ヲ包擁スルノ狀ヲ示ス

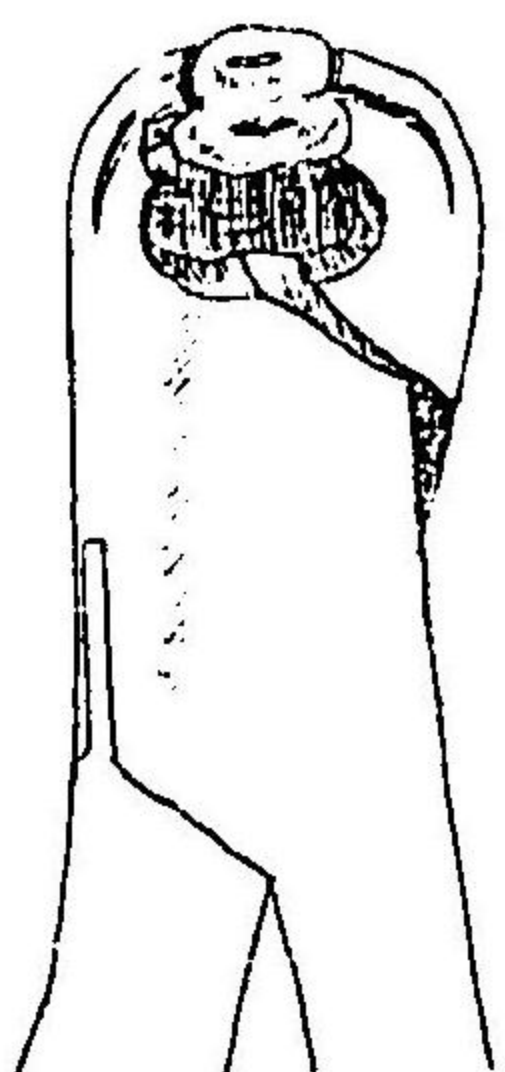


第百五圖



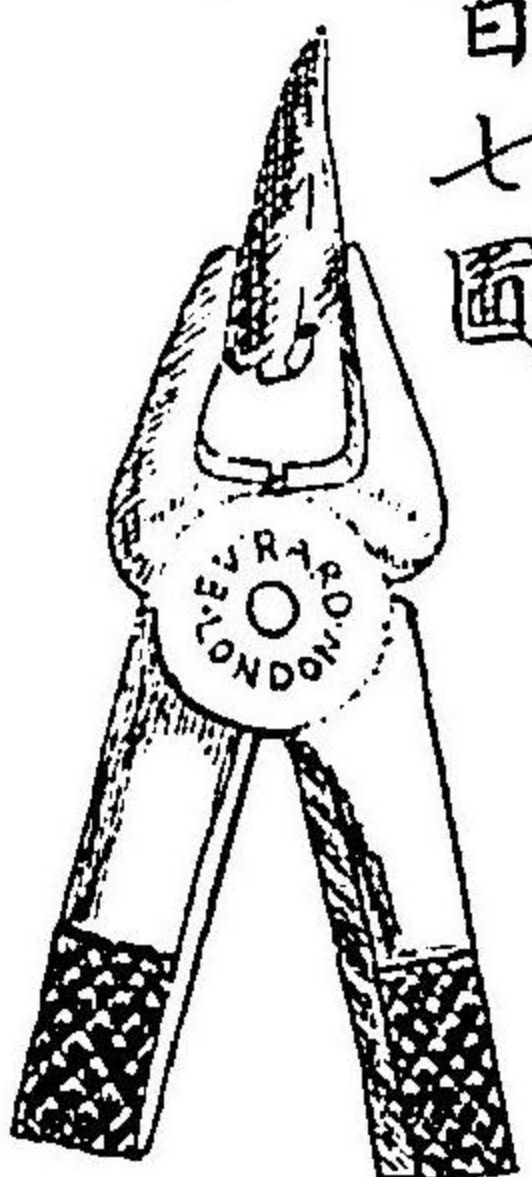
下顎右側ノ大白齒ヲ拔去スルニ
用フル鉗子

第百六圖

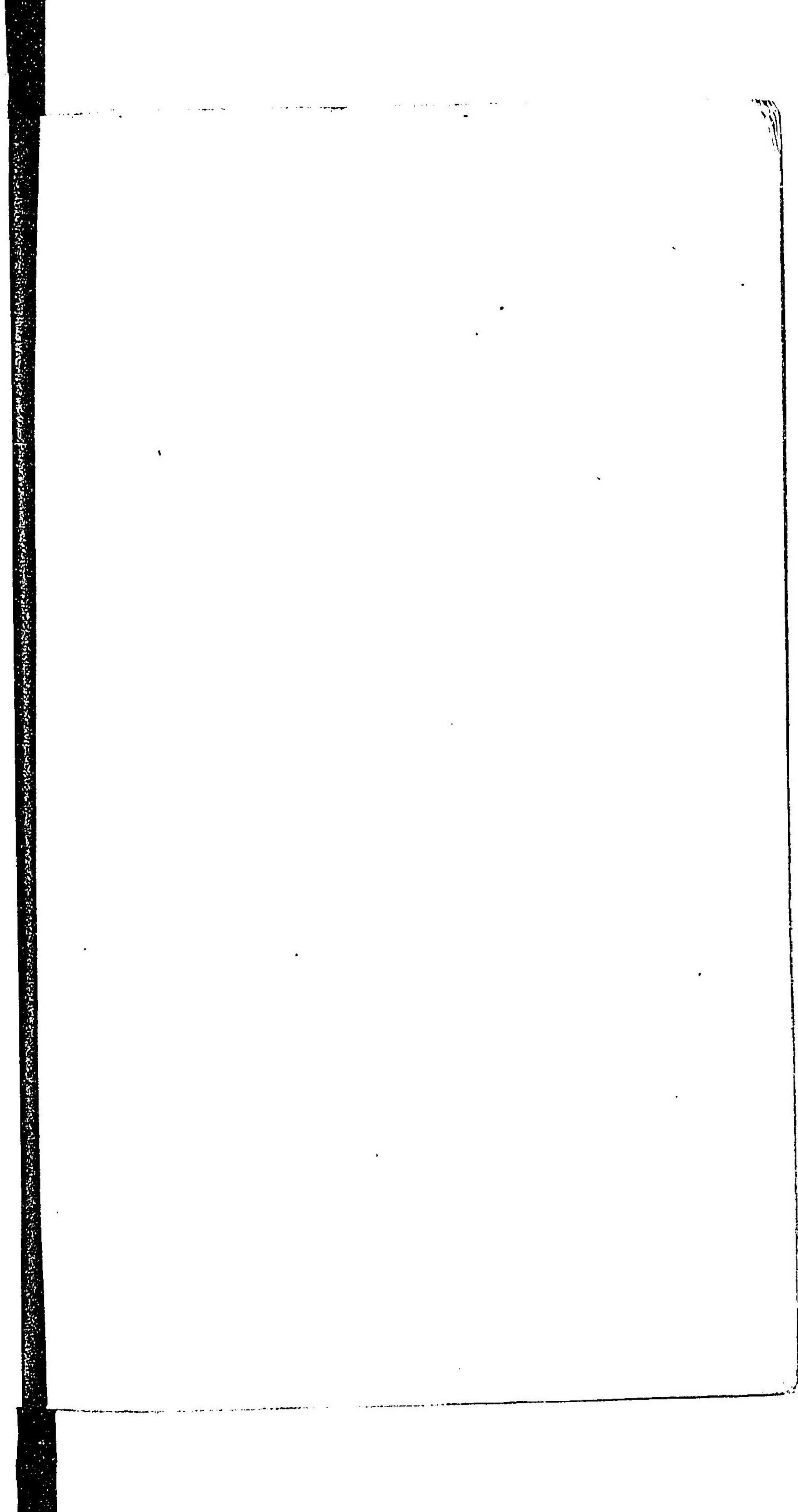


同上ノ鉗子ニシテ齒頸ヲ把持ス
ルノ狀ヲ示ス

第百七圖



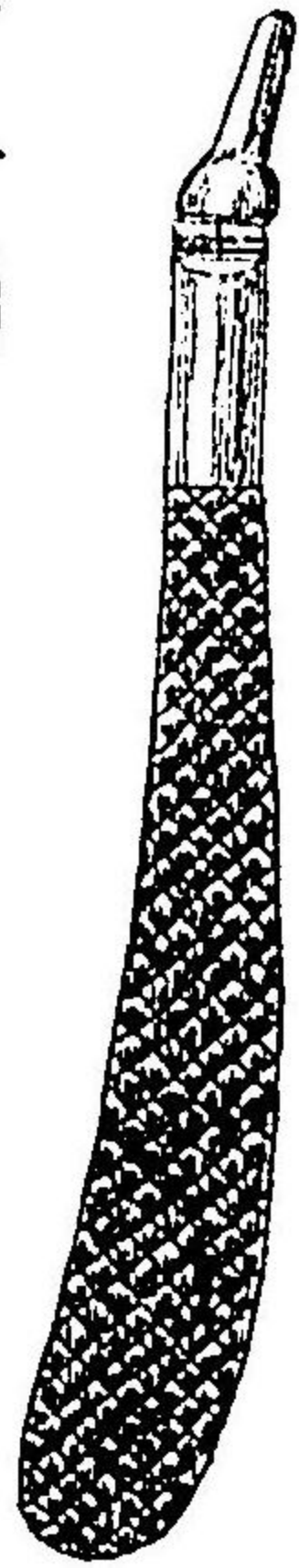
齒根拔去用ノ鉗子ニシテ其嘴ハ
齒根ノ全長ニ適合スル様製作セ
ラル



第百八圖



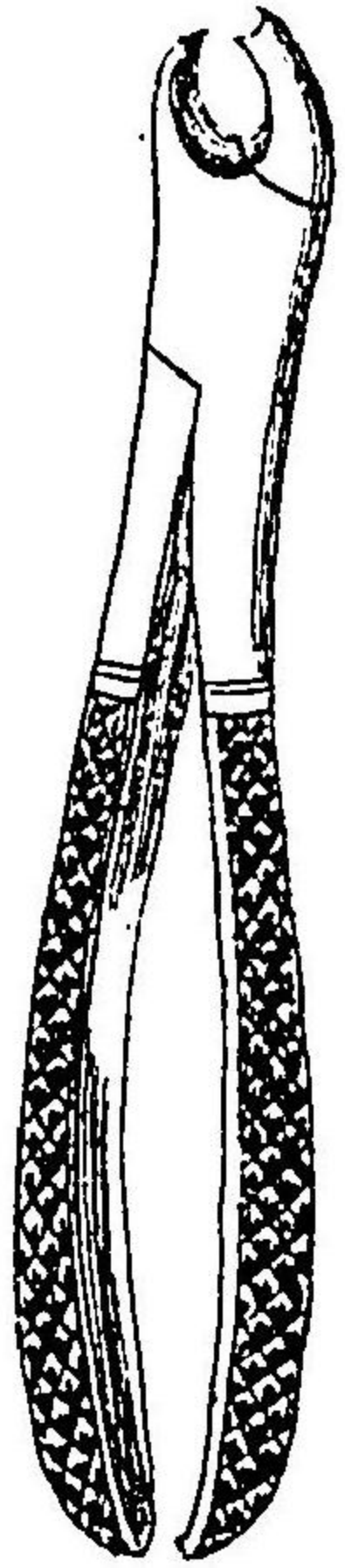
第百九圖



第百十圖

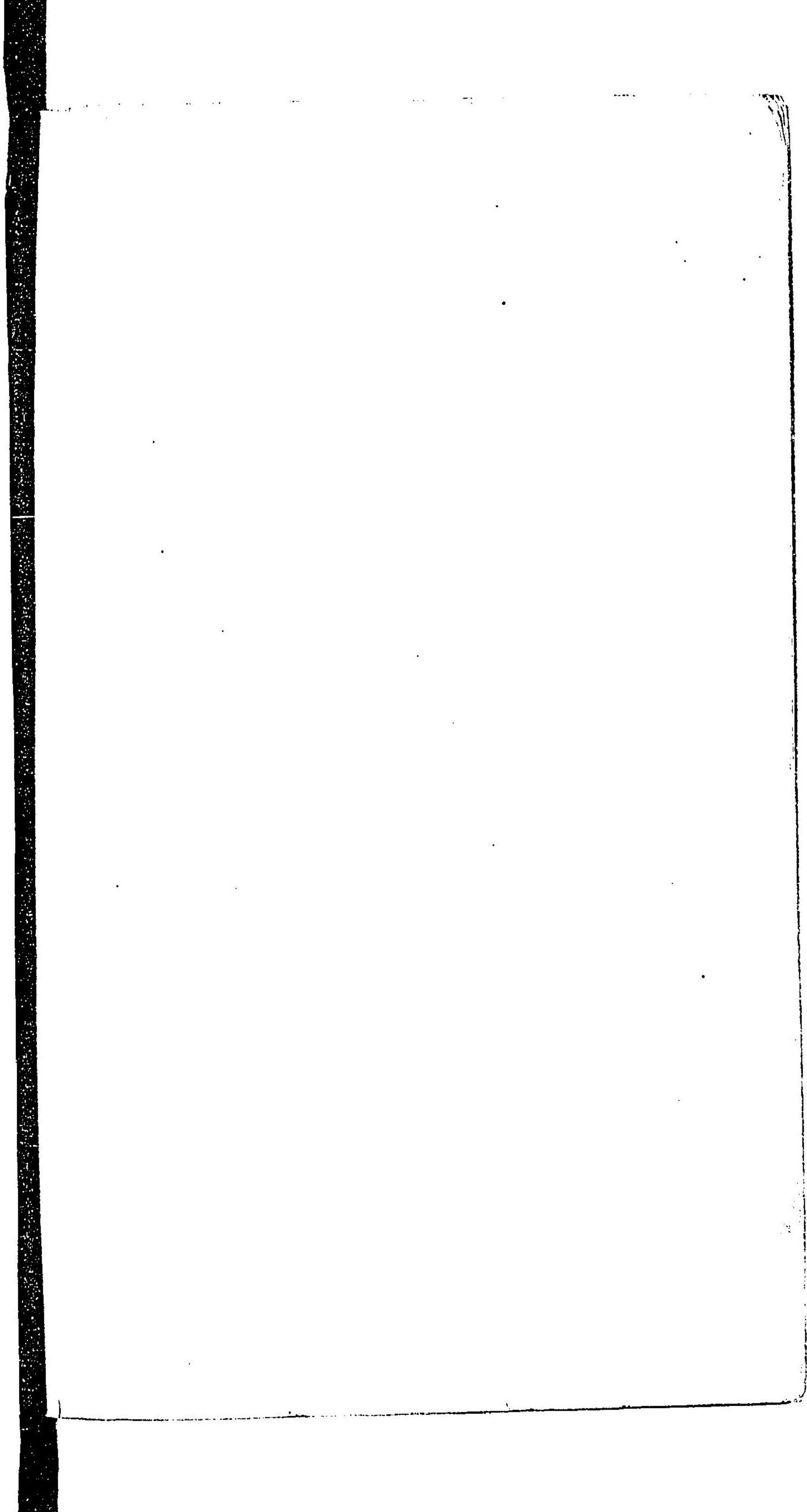


第百十一圖

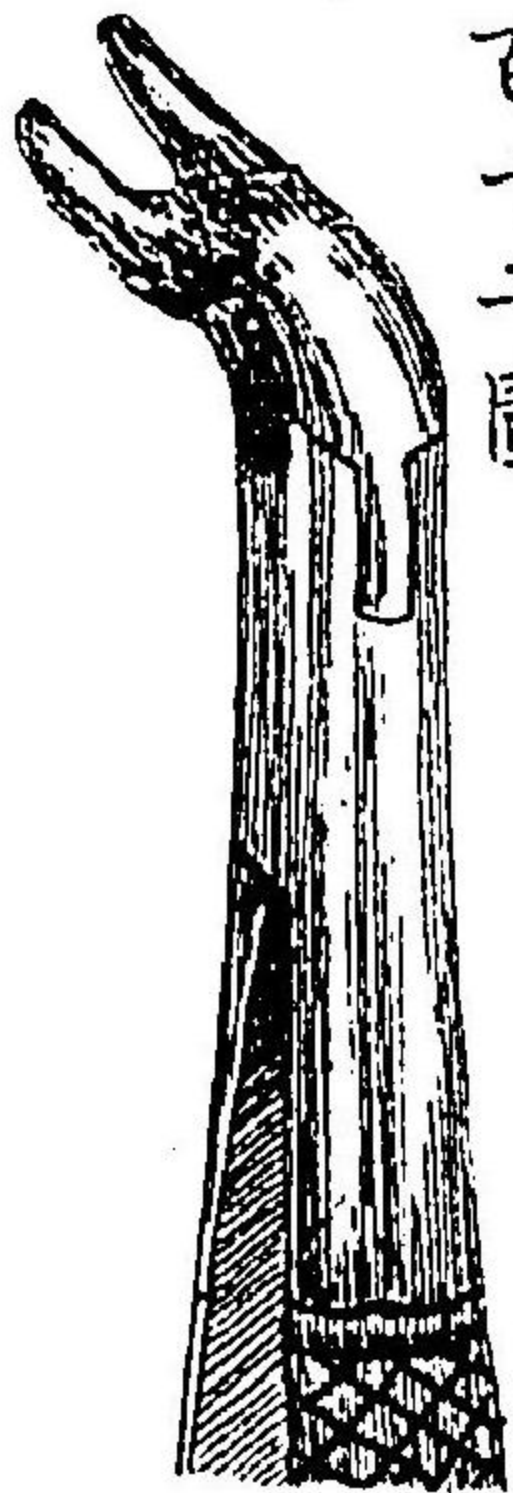


第百八、九及七十圖ニ示セル
鉗子ハ第百七圖ニ示セルモ
ノト相同シ唯其相異ナル所ハ
把柄ノ一點ニ存シ爰ニ示セ
ル三種ノ鉗子ハ皆何レノ位
置ニテモ齒根ノ存立セル所ニ
達シ得ル様把柄ヲ製作ス

三根齒ノ齒根ヲ拔去スルニ
用フル鉗子ニシテ上顎右側
ノ諸齒ニ應用ス

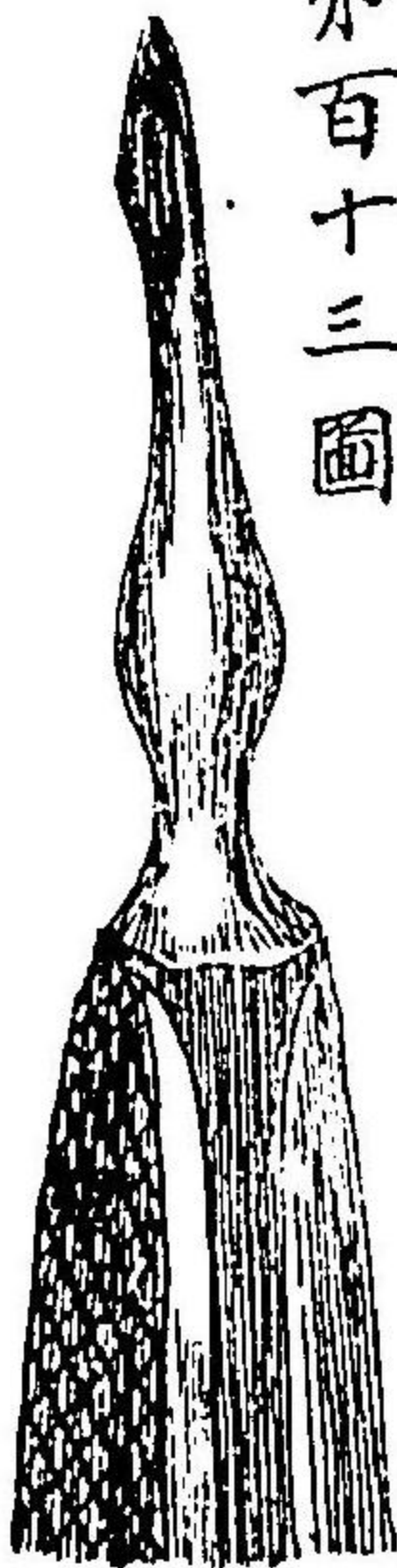


第百十二圖



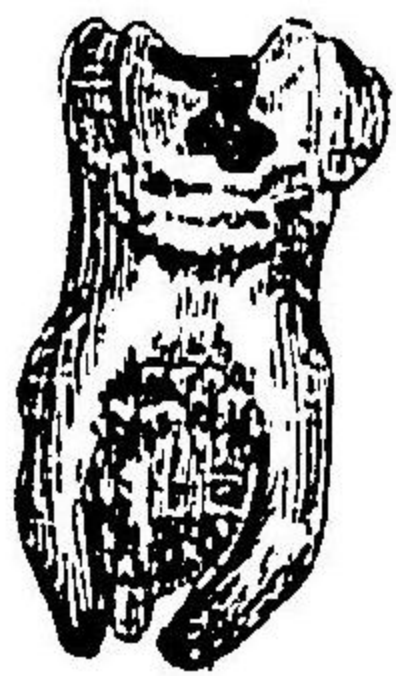
下顎二根齒ノ齒根ヲ拔去
スルニ用フル鉗子

第百十三圖



起骨器ニシテ一側ニ微溝
ヲ有シ穿通ニ自由ナラシム

第百十四圖



破壊スルカ或ハ齒根ヲ破壊セサ
ルヘカラス

當初齒根ノ廣ク分歧シ
後チ轉合セル齒
根間ニ圍雍セラレ、骨
ノ一片ハ斯ル齒ヲ拔去
スルニ當リ鉸釘ノ如キ
障害ヲ為スカ故ニ之ヲ

第百十五圖



齒根ノ廣ク
分歧セル齒

故ニ之ヲ拔去
センニハ齒根ノ一ヲ顎中ニ於テ
破壊セサルヘカラス然ラサレハ
齒槽ノ一部ヲ破壊シ去ルノ結果
ヲ免ル、能ハザルヘシ

62
198

答案
問題
成業の不正。その因らば也

成業



高山齒科医学院
齒科生理及外科学
講義録

62
198

M



060237-000-9

62-198

高山齒科医学院講義録 齒科生理及外科学

高山齒科医学院

[刊年不明]

CBL-0095

